

白狐+シヨタ=正義！ ～世界は厳しく甘ったるい～

星の屑鉄

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

女子率高い東方世界にシヨタつ子入れるとどうなるか？

男女あべこべものを見て思いついた話です。

そんな妄想と欲望大爆発の作品ですが、お付き合いいただければと思います。

尚、こちらはそれなりの頻度で更新します。最低でも週一更新目標に頑張つていきます。

※若干の男女価値観のあべこべ要素を含むかもしれませんが、そういった内容が無理だという方は、ブラウザバックの方を推奨します。(第三章になったら正式にタグに「あべこべ」を追加させていただきます)。

また、R―15の中でも特に露骨に描写している話では、サブタイトルの後に「※R―17」という表示を付けさせていただいております。露骨な描写が無理、という方は、そちらは避けていただくようお願い申し上げます。

評価の一言欄を完全に撤廃している設定になっていたので、そちらを記入できるようにしました。よろしければ、改善点、欠点、短所、長所、面白い点など、ご記入いただければと思います。

## 目次

### 第一章 古代に白い太陽を

第一話	白狐シヨタ現る	1
第二話	弱いけど強い男の子	7
第三話	男の子は食べ物には目が無い	13
第四話	お茶会での一時	20
第五話	また、あそぼうよ ※R—17	23
第六話	意外な一面	30
第七話	お別れの花冠	37
第八話	つぎは、ぜったいに	45
第二章	諏訪に集う。そして……	

第九話	諏訪大戦	57
-----	------	----

第十話	洩矢諏訪子① 聡い子の話	67
-----	--------------	----

第十一話	洩矢諏訪子② 無邪気な子の話	75
------	----------------	----

第十二話	洩矢諏訪子③ 子どもと保護者と危ない奴ら	84
------	----------------------	----

第十三話	それが長の姿	92
------	--------	----

第十四話	その後	98
------	-----	----

### 第三章 変遷と不変と

第十五話	市場にて	110
------	------	-----

第十六話	市場の簪売り	115
------	--------	-----

第十七話	師弟	122
------	----	-----

第十八話	再会とご対面	130
------	--------	-----

風見幽香から見た『白』		136
-------------	--	-----

第十九話	贈り物	139
------	-----	-----

第二十話	飛鳥閉幕	142
------	------	-----

第四章 終幕への布石

第二十一話 始まった

第二十二話 大江山の一幕

第二十三話 黒白金 1 / 2

第二十四話 最初で最後の悲鳴

# 第一章 古代に白い太陽を 第一話 白狐シヨタ現る

それは噂話程度に過ぎなかった。

——白い狐の尾を生やした男児が目の前に現れると、幸福が必ず訪れる。

当然、このような噂を、人間の都で天才と呼ばれる彼女、八意永琳は信じていなかった。油揚げが好物という噂が広まるなり、立派な庭先に巧妙に油揚げを仕掛けているからといって、決して信じてはない。信じていないったら信じていない。

「この前は確か、タヂカラオのところに出たって話だったわね……」

神妙な顔で、彼女は地図に印をつける。地図は北西部から南東部の方へと印が順番に付けられている。もうそろそろ、この家を通過する頃合なのだが、件の白狐の男児は一向に現れない。しかし、彼女は余裕の笑みを浮かべる。

「まあ、私のところには来ないでしょうね。見たところ、男神のもとにしか現れないみたいだし。それに、とっても美少年だって聞くわ。今のご時世、男児と知ればペロツと食べようとする女共がいけないのよ」

一応、この白狐の男児は侵入する相手は弁えているらしい。その点で言えば、その白狐の男児が性的に食べられないことを喜ぶべきだが、だからといって風評被害によって自分がその子を見られないことには、納得がいかない。

だから、彼女は策を練った。天才と呼ばれる彼女の頭脳が導き出した答えは、ずばり釣りである。庭には最高級の油揚げはもちろん、いなり寿司、きつねうどん、油揚げの生姜焼き、油揚げのテリヤキ……などなど、とにかく油揚げを使った料理を片っ端から並べて、件の彼が釣られるのを待っている。天才の彼女にとって、料理をするなど造作もないのだ。

ちなみに、これは彼女にとっては実験なのである。油揚げで本当に

狐が釣れるかどうか、という疑問に答えを導き出すためにやっているに過ぎない。断じて、白狐の男児を一本釣りするために餌を撒いたわけではない。

「はあ。何をやっているのかしら、私は」

庭先を見つめて冷静に考えると、改めて自分のしていることがどれだけ馬鹿なことか自覚してしまう。考えないようにしていたが、庭先を確認するたびに、彼女の心は研磨機にかけられた金属の如く音を立てて削られる。そもそも、立派な池と整地された土の庭に、料理が並べられていることがおかしい。宴会の準備といえは誤魔化せるかもしれないが、それでも本人の心を削るには十分過ぎる武器となる。

いつそのこと、不貞寝してしまおうか、と彼女はとうとう頭に手を当ててため息をつく。庭はもう見たくない、とばかりに背を向けて、いざ自室に足を運ぼうとした時だった。

「ねー、これ、たべていい?」

とうとう幻聴が聞こえ始めたか、と彼女の気持ちは一気に青色に染まった。

「どうぞ」

「わーいー」

投げやりに返事をする、無邪気に喜ぶ声があった。中性的な声だ。男児特有のやんちゃな色を含んでいた気がするが、彼女はもう知らない、とばかりに自室に引っ込んで、そのまま布団の中で不貞寝した。

「はぐはぐ」

八意家の庭では、一匹の白い狐の尾を持つ妖怪が、そこに並べられた料理を食べていた。白と藍色を基調とした立派な着物を身に着け、顔は現実離れするほど整っている美少年だ。さらに、性別は男ときたものだ。見つければ、女性たちに群がられること待ったなしの彼ではあるが、今は警戒した様子もなく、無防備に食事を楽しんでいる。

「んー!」

最高! と今にも叫び出しそうなほど、彼は満面の笑みを浮かべて

いた。漫画に例えれば、頭の上にくつつもの四分音符が浮き出していることだろう。右手を頬に当てて幸せそうにしている、さらに綺麗な白い狐の尻尾をブンブンと千切れんばかりに振るっているオプション付きである。この現場を女性が見れば鼻血を吹き出して倒れるか、記録されるか、速攻お持ち帰り待ったなしである。

「——はうっ？」

あれ、と彼は最後のひと皿、油揚げの生姜焼きの最後の一口に手を付ける前に気がついた。食事を提供してくれた女性がこの場に居なくなっていることに。そして、今残っているそれが最後の一口であることに。

「うー……」

しばし、彼は最後の一口と睨めっこした。葛藤していたのだ。最後の一口を食べるか、それとも提供者に分けるか。彼は食事を貰う手前、一緒に食べることに喜びを感じていた。また、一緒に食べるのが最低限の礼儀であると思い込んでいた。

彼は最後の一口の乗った皿を手を持ち、立ち上がった。そして、彼女の家に行儀よく、時代遅れな木製の下駄を脱いで上がり込み、長い銀髪と赤と青の奇抜な服を着た彼女を探した。

「あー、うー？」

しかし、その家には部屋が多すぎた。どれだけ進み、部屋を見ても、彼女の姿は見当たらなかった。

とととと、と健気に家の中を走り回る姿は実に愛くるしい。両手に大切に一枚の皿を持ちながら、転ばないように一生懸命走っている。

「いなーい？」

部屋を見してみるが、やはり人影は見当たらない。

「いなーい？」

また部屋を見してみるが、その部屋には誰もいない。怪しい設備ばかりが置いてあり、彼はすぐさまその部屋の扉を閉めて、次の扉に向かう。

「ばあーっ！」

途中から探すこと自体が楽しくなり、彼はそんな風に戯れた。

「あ、いたー！」

戯れた直後、食事の提供者が見つかった。彼はすぐに彼女に歩み寄ると、その顔を見てすぐに口をつぐんだ。

「うー、おひるねー」

彼女は目をつむって、すやすやと安らかな寝息を立てている。彼は精神的に幼いが、昼寝を邪魔されるのは自分も嫌だと経験しており、無理に起こすのはいけないことだと分かっていた。

しかし、彼女が起きるまで待つておくほど堪え性があるわけでもなく、立ち尽くしたまま五分もしないうちに頭をひねり始めた。

「ふあー、うう」

大きな欠伸が出た。目元に涙をためて、瞼を蕩けさせ始めた。それから一分もしないうちに、彼は彼女の枕より少し離れた場所に皿を置き、その布団に潜り込んだ。

「ねむねむ……」

そして彼は、彼女の腰に抱きついて、自由気ままに暖かい布団の中で眠りにつくのであった。

ふと目が覚めると、部屋の窓から見える外はすっかり真つ暗になっていた。もうこんな時間なのね、と八意永琳は庭に行こうと思いついた。上がろうとして、腰に誰かが引っ付いていることに気がついた。

「あの子かしら」

おそらく、弟子の綿月依姫か綿月豊姫だろうとあたりをつける。自分がこれ以上身動き出来なければ困ると思いつき、彼女は布団を捲つて、抱きついている者の頭に手を置いた。

「ほら、そろそろ起き……な、さ……い……い……」

不覚にも、彼女の声は徐々に弱くなつていった。しかし、それもその筈で、彼女の布団の中に入っていたのは、予想していた二人ではない。立派な白と藍色の着物を着けた、年の頃は十歳頃の男児だ。綺麗な白髪のショートカットが特徴的だ。これだけならば、彼女の子ども



と言っても違和感がないほど似通っているのだが、その頭には狐の耳とお尻のあたりから生えている一本の白色の狐の尻尾が、彼が人間と  
いうことを否定している。

「まさか、噂の白狐、なの……？」

あどけない寝顔はいつまでも見ていたいと思うほど強い癒し効果が含まれていた。彼が呼吸するたびに、彼女の心には暖かいものが溢れてくる。思わず表情筋が緩み、頭を撫でる手が進む。

「うにゃ……あ」

一昔前の西部劇の如く、音を立てて彼女の心臓が撃ち抜かれた。思わず口から飛び出しそうになるほどの衝撃を受けた。天使よりもよっぽど天使に思えるエンジェルボイスが、麻薬のごとく甘美な響きと余韻を残した。ただの声だというのに、天才の彼女は指先一本たりとも動かさなくなった。

「あう……あー、うー？」

寝ぼけ眼をこすりながら起き上がる。その瞬間、彼の着ていた着物が見事にはだけて、その美しい鎖骨のラインと肩から胸元までの淡雪のような柔らかそうな肌が露出する。その破壊力は、森をどれだけ粒子分解しても飽き足りないほどのものだった。かの天才は、思わず自分の鼻を押さええて、開放されかけた野生を何とか押さえ込む。

もはや、都の最終兵器と言われても納得してしまうほどの精神攻撃は、天才たる八意永琳を後一步で一撃必殺にするほどの威力だ。これを他の者が受けた日には、女性であれば理性のメルトダウンが起こり、その毛色がない男性であっても野生を開放させるには十分すぎた。

ぺたん、とその場に座り込んだ彼は、未だ寝ぼけ眼の状態で彼女を見つけると、嬉しそうに天使顔負け、面目の「め」の字も立たないほどのエンジェルスマイルを浮かべて、両手を前に広げて、人形さえも超越する綺麗なてのひらを上に向けて、口を開いた。

「たべてー」

もはや世界を破壊してもおかしくないほどの衝撃に、八意永琳はとうとう鼻血を吹き出し背中から倒れて再度、眠りにつくことになった

のであった。

「うにゆ……？」

彼はただ、いきなり気絶した彼女のことを不思議そうに見ていた。しかし、また眠ったのかと理解すると、それに追従するように彼女の腰にまた抱きついて、すやすやと寝息を立てるのであった。

## 第二話 弱いけど強い男の子

実験が大成功した翌日のお昼時の事。

八意永琳は他の追隨を許さない頭脳を持ちながらも、今も尚混乱の極致に突き落とされていった。ちなみに、今日の昼食はきつねうどんだ。昨日の残りの油揚げが良い味を出している。我ながら最高の出来の一品だと自負している。

しかし、彼女はそのきつねうどんに手を付けない。ただ、目の前で彼女の前にあるものと全く同じものを嬉しそうに啜っている、白髪と頭に生えた三角の狐耳、毛並み綺麗な一本だけの狐の尻尾を生やした男児を見ていた。

昨日、不覚にも精神的に一瞬で気絶まで追い込まれた彼女は、改めてその姿を見て、その破壊力に心を震わせる。純粹にきつねうどんを美味しそうに食べる姿もそうだが、食べ物一杯に詰めた頬の艶と柔らかさそうな雰囲気ときたら、すぐさま突いてしまいたくなる魔力に溢れている。彼女の天才的頭脳は同時に、突けば最後、底なし沼の如くその頬を弄り続ける未来まで見通していた。それでも尚、彼女の理性を、かき氷を作るかの如く削っていくものだから、下手な麻薬よりも性質が悪い。いや、副作用が無いことを考えれば、それ以上に依存性が高いようにも思える。

「ふー………(´▽`)ちそうさまー！」

丁寧に手を合わせて、食べ終わると満面の笑みで彼はそう言ったのけた。十割天然の笑顔の破壊力は、もはや既存の兵器の追隨を許さない。天才の頭脳は一瞬にしてエラーで埋め尽くされたことによりフリーズして、ぎこちなく「お粗末様でした」と言うしかない。

「う………？ たべないの？」

指摘されて、彼女は我に返った。いけない、いけない、と彼女は頭を振って煩惱や知識欲を追い払い、既に伸びそうになっているうどんを慌てて啜った。

彼女が食べ始めると、また突然、彼は笑顔一色となって、尻尾を千切れんばかりに振ってその様子を見ていた。一体、何がそんなに楽し

いのかしら、とこの時ばかりは追い払った知識欲で頭の中を一杯にして、彼女はうどんを食べ続けた。

「ふう、ご馳走様でした」

手を合わせ、食物に感謝と祈りを捧げる。それが終わると、さて、後片付けしなくちゃ、と彼の分の器も運んで、すぐにそれを洗浄機に入れた。彼はそんな彼女の後についてきており、その様子を興味深そうに「おー」と声を上げながら、まじまじと見ていた。仮にも妖怪なのだから、きつと科学の産物が珍しいのだろう。

それが終わると縁側に移動して、二人してそこで座って寛いだ。

「そう言えば。あなた、名前は？」

「んー？ なまえ……はくー！」

はく……おそらく、白と書いて「はく」だろう。安直な名前だが、それは実に良い名前だと、彼女は思わず笑みを浮かべる。

「それと、びゃくー！」

「えっ」

彼女は思わず声を出した。不意を突かれて驚いた風に口に手を当ててしまったが、すぐに何事か納得すると、ひとり頷いて、また笑みを浮かべようとして。

「それと、くろー！」

今度こそ、目から鱗が出る思いを味わった。彼の口から紡がれたのは、まったく同じ意味の2つの名前と、まったく別の意味の1つの名前だ。前者であれば納得したが、後者に至ってはまったく理解に及ばず、彼女は天才の頭脳を余すところなく使って考え込み、しかしそれでも確信を突けず、溜息を吐いた。

「んー」

不意に、自分を期待の眼差しで見上げてくる存在に気が付いた。言わずと知れた彼——とりあえず今は白（はく）と呼ぶ——が瞳を輝かせて、何かを待っていた。これには少しも考えることなく答えに至り、柔らかい笑みを作って、彼に目線を合わせて言った。

「私の名前は八意<sup>×</sup>……ごめんなさい。聞き取れないわよね。なら、永琳、って呼んでくれると嬉しいわ」

「んー、えーりん！」

向日葵の様な笑顔を向けられて、永琳は心に致命的な一撃を受けた。目線を合わせていたこと、間近でその笑顔を直視してしまった故のことだった。これほど美しく純粋な男児の笑みを直視して、更にその前に名前を呼ばれて、それで尚精神的に即死しなかっただけでも、永琳はよく耐えたといえる。

「えーりん、えーりん！　ねー、なにするー？」

白（はく）は無邪気に小首をかしげて問いかけた。彼が暇だということが分かった永琳は、早速何をしようかと頭を働かせる。しかし、どれも彼が喜ぶようなことだとは思えず、ここにきて彼女は頭を抱えた。

「あたまいたいなの？」

ぽん、ぽん、と彼女の頭に小さな手が乗つけられた。すぐに視線を彼に戻すと、何と彼が心配そうな、不安そうな顔で彼女の顔を覗き込み、更にその手で頭を撫でていた。

とても柔らかい手なのね、と永琳は場違いにも冷静に状況分析していた。状況分析が終わると、それが自分にされていることなのだと自覚して、思わず顔が赤くなった。今、この状況を弟子たちが見たらどんな顔をするのだろうか。出来れば、今この時だけは弟子たちが此処に来ませんように、と彼女は神に祈りを捧げた。

「八意様、いらっしやいま、す、か……？」

ああ、何てタイミングの悪い、と永琳は心の中だけで天を仰いだ。現実に天を仰ぐわけにはいかなかった。今は頭を撫でられているこの心地をもう少し味わっていたいと思ひ、現実に反応することだけは避けた。

一番の敗因は、縁側で寛いでいたことだろう。縁側と家の入口は繋がっており、入り口に立てば縁側も見える図式だ。そのせいで、家に訪れた弟子の一人に、この現場を目撃されてしまった。

「……妖怪かッ！」

薄紫色の髪を黄色いリボンでポニーテールにして纏めている少女は、呆然とした表情から真剣な面持ちに切り替わり、腰に差していた

刀を抜いて彼へと突撃する。

不味い、と永琳は柄にもなく焦った。甘美な感触に酔いしれている場合ではない。今すぐ彼を助けねば、と永琳は彼を抱き込んで庇おうとした時だった。

「はう!？」

突然、彼が何もないところにも関わらず、まるで何者かに足を掛けられたかの如く、正面から転んで、その顔を床に強打した。間一髪、少女からの刺突は回避できたが、あれはあれで痛い。それも、勢いづいていた。

何とも言えぬ空気を永琳が嘔みしめている間にも、少女は油断も躊躇いも無く、追撃しようと刀を振り上げた。

「っ、やめなさい——」

「——ひっく、うづ、えぐっ……」

永琳の制止の言葉が、泣きじゃくる声により止められた。少女も、これには思わず手を止めた。場の空気は先ほど少女のペースで進められていたが、今は彼一色に重苦しく染まった。ついで、錆びついたブリキのおもちやが動くかの如く、ギギギと音でも立てるのかというほどぎこちない首の動きから、二人はようやく彼の顔を視界に捉えた。

「ま……ない……」

彼が何事かを小さな声で呟いた。視覚ばかりに囚われていた二人は、慌てて彼の声を拾おうと耳を傾けた。

「いたく、ないもん……!？」

耳に泣き虫の強がりが増え聞こえた。その直後、少女の視界に彼の顔が映り込んだ。

彼は一人で必死に立ち上がろうとして、そして立ち上がるには至らなかつたものの、転げた状態から、ぺたんとして座り込むまでには姿勢を自力で戻して見せた。ほろほろ零れる涙を懸命に両手で拭きながらも、床にぶつけて赤くなった鼻には手もつけない。何よりも、彼の瞳は泣いていながかつた。下を向いていながかつた。ただ真っ直ぐ、ひたむきに前を向いていた。時々嗚咽は聞こえてくるが、その度に涙声で

「泣かないもん……！」と独り懸命に戦っていた。  
「っ……っ！」

少女の胸の内から熱いものがこみ上げてくる。それが喉元までせり上がったところで、光の速さで脳を焼いた。

少女はすぐに刀を鞘に納め、先ほどとは打って変わって柔らかい笑みを浮かべて、彼の前まで歩いたかと思うと、その場に膝をついて、その瞳を真正面から見つめた。

「っ、な、ないてないもん！」

うーっ！ と獣が相手を威嚇するように、彼は低い唸り声を上げて少女の瞳を目に涙を溜めながら真っ向から睨み付けた。彼の尻尾が怒髪天を衝いていた。

涙を流しているのに、泣いていない彼の瞳。

ただ真正面だけを見つめて逸らさず、逃げず、下も向かなければ、上に向けて祈りもしない、真っ直ぐな瞳。

誰かが見つめても、それに応える無邪気な胆力。

「大丈夫。大丈夫だ。ほら、綺麗な顔が台無しだ」

「じぶんでできるもん！」

ハンカチを取り出して、彼の涙と鼻水で濡れてしまった顔を拭おうとしたが、少女が拭こうとすると、彼はすぐさま着物の袖で顔を拭き始めた。

綺麗な着物が汚れてしまう、なんて野暮なことは誰も言わない。少女も永琳も、ただその雄姿を黙って見守り続けた。

少ししてから、ようやく着物で隠れた彼の顔が出て来た。涙も鼻水も、もう顔についてはいかなかった。当然、涙の跡、目に溜まった潤い、腫れた目元、少し赤い瞳は隠せないが、彼はそんなことを気に止めた様子もなく、リベンジするように少女の瞳を精一杯睨み付けた。

「ないてないもん！」

少女は彼の瞳を見つめ返した。何十秒と見つめ返したが、彼は瞬きすることも無く、瞳をさ迷わせることなく、頑なに少女の瞳に向けて睨み付ける。

「そうだな。うん、泣いていないな」

少女は自然と、彼のことを抱きしめた。優しく、抜け出そうと思えば例え弱小妖怪であってもすぐに振りほどけるくらい、力を全く込めずに抱きしめた。

そんな時間を数十秒ほど味わったかと思うと、少女は彼の小さな肩越しから永琳を見つめて、一大決心したような顔で言った。

「八意様。私は、この子を婿に迎え入れます！」

「……はぁ」

頭に手を当てて、永琳は溜息を吐いたのであった。



### 第三話 男の子は食べ物には目が無い

少女、綿月依姫はご機嫌な様子だった。正午より少し日が傾いた頃合い。依姫はその腕の中で舟をこいでしまっている白を、後ろから抱き枕の如く抱きしめている。つい先ほどまで自己紹介をして、わざわざ二人で楽しそうに話していたが、白がこの状態になってからは、依姫はただ白を抱きしめてその感触を堪能するだけになった。

そんな様子の子の依姫を、永琳は疲れた様な面持ちで見ている。しかし、このまま黙っておくわけにはいくまいと、永琳は口を開く。

「考え直す気は無いのですか？」

「八意様。白以上の男など、今後どれだけ待っても見つけれません！」

先ほどから、依姫は意見を変える様子を全く見せない。どうやら、本格的に正論で言いくるめるしかないらしい。永琳は覚悟を決めて、口を開いた。

「あまり言いたくはなかったのですが……。貴方が考えを変えないのであれば言しましょう。——妖怪を月に連れ込むつもり？」

依姫の体が大きく揺れた。目を逸らしていた事実を、たった半日もしないうちに突きつけられた。口から何か言葉を出そうとしても、そこから出てくるものは息だけだ。

「諦めろ、とは言いません。ですが、貴方には立場があり、家族が居ます。それをよくよく考えてからでも遅くはありません。時間はまだまだあるのです」

永琳は諭すように優しく言った。すると、依姫は返す言葉が見つからないのか、視線を落として白の旋毛を見つめた。心なしか、少し顔が近い気がしたが、永琳はそれについて何も言わなかった。

「……分かりました。白と触れ合いながら、しっかりと、これからのことについて考えていきたいと思えます」

依姫はようやく、肯定の言葉を紡いだ。説得すれば、もう無理なことを言うことも無いだろう、と永琳はその言葉を慈母のような笑みで

受け止めた後、立ち上がった。

「さて、そろそろおやつ時間よ。あの子も呼んで、お茶会にしましょう」

空気は一転して、明るいものに変貌した。一月に一度の、永琳とのティータイムに、依姫は顔を上げて花が咲くかの如き笑みを浮かべた。

「はい！ それでは、私はお姉様をこちらに連れてきますね。……白はどうしましょうか？」

白は座ったまま眠ってしまった。すう、すうと規則正しい小さな寝息だけでも耳が幸せになる。寝顔はあどけなくて、1ピコの穢れも無い。この寝顔を見れば、天使や美の神でさえ塵芥同然に思えてきってしまう。

「日陰で寝させてあげましょう。私はおやつの方を準備するわ」

そう言って、永琳は退出した。しかし、依姫はそれを確認して尚、白に抱き着いたまま離れなかった。名残惜しそうな顔をしながら、十秒、二十秒、三十秒……果ては1分、2分と、時間が過ぎていく。

そうしてズルズルと居座る時間が長くなる中。ある時ふと、依姫の頭に電流の如きひらめきが迸る。

「……二人きり」

肯定してしまつた手前、確かに白と結婚を易々とすることは出来ない。しかし、頭を撫でる程度であれば……いや、キス程度であれば許されるのではないだろうか。

自然と、依姫は白の寝顔を覗き込む。すると、見えたのはあどけない少年の寝顔だった。あまりに無防備で、無警戒で、純粹だ。依姫は引き寄せられるように顔を近づけた。すると、見えてくるのは新雪のような綺麗で柔らかい肌に、自然に整った眉毛、可愛らしい瞼と睫毛、黄金比を描き出す高くも低くも無い鼻、マシユマロのように柔らかさそうで健康的な唇、顔の彫りは子どもだからか驚くほど浅い。

不意に、依姫と白の足が触れあった。依姫が前に乗り出し過ぎたせいで。服越しに感じる肌からは温もりが伝わって来た。感触は雪のように柔らかくて、思わず少しだけ、膝を前に出した。しかし、この

体制はあまりに辛い。それでも顔はもつと見ていたい。依姫は泣く泣く後ろから抱きしめるのを止めて、白をそつと畳の上に寝かせて、その上から覆い被さつて、白の寝顔を凝視した。更に、依姫は両足で、白の両足を優しく拘束した。

「……………」

そして、恐る恐る、といった様子でゆっくり、ゆっくりと、その手を白の頬に伸ばした。そして触れば、ふにゅ、と彼女の手がその頬に力を入れずとも沈んでいった。その感触は新品の布団に飛び込むかの如し。いや、それ以上だ。

「うにゅ……………」

ピタ、と白に触れている手の甲に、温かく柔らかい何かが触れた。見てみると、それは白の手だった。白の手は、女の依姫から見ても驚くほど柔らかく、そして儂い。今にも溶けてしまいそうな錯覚に陥る。

当の白は、初めて会った時の強気は何処へいったのか、だらしなく頬を緩めて、幸せそうに眠っている。

「……………」

意を決して、依姫は自身の両手で白の頬を包み込んだ。すると、白はくすぐったそうに多少身じろぎしたが、最後には幸せそうに、蕩けるように笑った。更に、無意識のうちに白は自分の手で触っている方の手に、ゆっくりと頬ずりをした。

「っー」

一瞬、依姫の体が硬直した。まるで懐いてくれた子犬のように、小動物のように頬ずりする姿が、感触が、どうしようもなく愛らしかった。そうした感情のせいか、依姫は腹の奥底から熱を帯び、その熱はやがて麻痺毒のようにじわじわと、体に広がっていく。

これでも起きないのであれば、もつと密着しても良いのではないか。いや、きつと良いに違いない。とうとう依姫の理性が愛しさに浸食されていく。この場に誰も居ないと分かっている故に、彼女はゆっくり、ゆっくり自分の顔を白の顔に近づけていく。

「あら、そんなに小さな子を襲っちゃダメよ」

ピキツ、と空気が凍りつく。依姫もまた、その体を硬直させてしまった。まさか、傍に他の誰かが居るとは思わなかった。

対照的に、声を掛けた人物は楽しそうに笑顔を浮かべて依姫に近づいた。

そしてすぐ横に声の主が立った時、依姫は錆びついたブリキ人形の如く首を回すと、そこには全周のつばのついた白い帽子と腰ほどまである金髪が特徴的な、よく見知った相手が居た。

「……お姉様、何時からそこに居たのですか？」

おそるおそる、といった様子で依姫は聞いた。すると、目の前のように見知った相手……依姫の姉、綿月豊姫はそうねえ、と少し考える素振りをしてから、口を開いた。

『……二人きり』って、依姫が呟いたところからね」

「最初からじゃないですか！」

やってしまった、と依姫は顔を真っ赤にして豊姫に向けて叫んだ。豊姫は少し真剣な表情をして、鼻に人差し指を当ててジェスチャーする。

「静かに。その子、起きるわよ」

「あっ……」

またも失敗である。依姫が白の方を咄嗟に見てみると、彼はただ心地よさそうに、今も依姫の手をその小さな手で覆って、半ばその手を枕にするように寝ていた。どうやら、起きてはいないようだ。そのことに、依姫は思わずほっと息を吐いた。

「それと、早く退かないと、目を覚ました時に大変よ」

尤もである。非常に、非常に名残惜しいが、依姫はその小さな手を優しく解いて、畳に手をつけて立ち上がろうとした。

「だめー」

「わっ！」

しかし、立ち上がろうとするとすぐに、白の両手が依姫の首の後ろに回され、そのまま引き寄せられる。完全な不意打ちに、依姫はなす術も無く、白の胸元に頭を抱き込まれた。

「あら、大胆」

豊姫は一瞬驚いたような顔をしたものの、すぐに楽しそうに顔を綻ばせる。

一方、依姫はそんな豊姫の言葉を聞く余裕などなく、過去に類を見ないほど混乱していた。何故なら、白を解放した時、そして自分が抱え込まれた時に、白の着物がはだけてしまっていたのだ。そのせいで、依姫の頭は服越しではなく、直接白の胸板に抱え込まれている。

胸板から伝わってくる温もりは、依姫の頭を沸騰させるには十分な温度であった。それに加えて、鼻孔をくすぐるのは白の太陽のようなポカポカとした柔らかな匂いでありながら、僅かに汗の匂いも含まれている。そしてトドメには、白の肌から伝わってくる鼓動である。

依姫は目を、まるで漫画に出てくる渦巻き状に回しながらも、とにかく離れないといけない、とそれだけを考えて白から離れようと畳についている手に力を入れた。

「あ、れ……」

しかし、起き上がることは出来なかった。別に、白の力が強いとか、白が重いかということではない。ただ単純に、依姫の手に、腕に力が入らなかつた。もう一度、もう一度と試してはみるものの、依姫は起き上がることが出来なかつた。

そして時間が経てば、次第に集中力が切れてしまう。集中力が切れれば、今度は別の所に意識が向く。

依姫が次に知覚したものは、淡雪のように綺麗な白の胸板だった。シミや傷など一つもなく、ただ美しい雪原が広がっている。様々な山を見てきた彼女でも、これほど美しい白色を今まで見たことが無い。彼女の視線は、胸板という大雪原に釘付けになってしまった。

「これで、いっしょー」

それは果たして、寝言だったのだろうか。白の顔が見えない依姫は、ただただその甘える様な声に理性を少しずつ、熱された飴細工の如く溶かされていく。もし、ここに豊姫が居なければ、理性など形も残っていないかかったかもしれない。

こうなれば、もはやこの状況を楽しんでいるのであろう豊姫だけが頼りだと、依姫は床を力なく叩く。

「ついに依姫に春が来たのねー」

しかし、頼りの豊姫は暢気にそんなことを言っただけだ。きつと、今頃は頬に手を当ててひとり和んでいるに違いない、と依姫はあたりをつける。そして、豊姫の力はもはや当にできないことに、形容し難い感情が湧き上がる。

「……ッ！」

そんな状態の依姫に追い打ちするかのようには、彼女の首に温かく柔らかい、ふわふわでくすぐったい何かが巻き付いた。首を回してみてもみると、それは白の真つ白な尻尾であった。更に、白の手は首から頭に移動して、彼女の頭を撫でていた。無邪気で優しい手つきだが、その感触は後頭部から駆け抜ける様に足のつま先まで痺れる様に甘美に伝わった。

「えへへ……大好き」

ぼふんっ、と今度こそ依姫の顔が茹蟄のように真つ赤に染まった。頭の中はエラーとバグとピンク色に染まり、もはや正常な思考など期待できない。依姫はおそろおそろ、ゆっくり、ゆっくりとその手を白の背中に回して、そして抱きしめた。その抱き心地はまるでお伽噺に出てくる雲のようだった。夢の如く儂かく温かい。もはや、白を放すという選択肢が浮かばない。

そんな時、縁側近くにある和室の扉が開かれた。

「居たわね。そろそろお茶会に」

「八意様」

登場したのは永琳であった。彼女は豊姫の姿を確認すると、そう言ってお茶会の席に案内しようとしたのだが、その言葉の途中に依姫が割り込んだ。

一体どうしたというのか、永琳は声のした方を見ると、そこには先ほど論じたばかりの教え子が、白をもう放さないとばかりに抱きしめて、さらに寝ている筈の白から撫でられていた。教え子の首には真つ白な尻尾が巻き付いており、一昔前に流行った二人でマフラーを巻く光景を思い起こさせる。

「何かしらっ？」

意図せず、永琳の表情が引き攣った。しかし、そんなことを気にした様子もなく、依姫は性懲りもなく、高らかに宣言した。

「私は白と絶対に結婚します!」

「……………うにゅ?」

大音量での宣言は、白の耳にも届いていた。寝ぼけ眼のまま周囲を見回した白は、豊姫を見て首を傾げて、永琳を見て首を傾げて、最後に抱きかかえている依姫を見て、またも首を傾げた。

「……………はぁ」

どうやら、自分が居ない間に骨抜きにされたようだと、永琳は頭を手を当てて白を見た。すると、視線を感じ取ったのか白も永琳を見た。視線が交差すると、白はまたも首を傾げて、一度依姫を見て、また永琳を見て言った。

「けっこんー? えーりん、なにそれー」

怒るに怒れないこの状況に、永琳はもう一度「はぁ」と溜息を吐いた。

「あら、結婚を知らないの? 結婚というのはね」

「白、お菓子があるわよ」

させるか、と言わんばかりに永琳は豊姫の言葉を遮って興味を逸らそうとした。

「ほんとう!?!」

食いつきは完璧だった。どうやったのか、依姫の拘束から一瞬にして逃れると、白は永琳の右手を両手で包み込んだ。

「ねー、はやく、はやくー!」

「お菓子は逃げないわよ。ほら、二人もいらっしやい」

ああ、白……………、などと教え子の一人が悲しそうに呟いているが、永琳は敢えてそれを無視した。豊姫は放心状態の妹に声を掛けて正気に戻すと、二人とも永琳の後に続いた。

「あれ、あぶらあげはー?」

「……………貴方、どんな夢を見ていたの?」

道中、未だ寝ぼけて首を傾げていた白に、永琳はやれやれと首を振った。

## 第四話 お茶会での一時

「えーりん、これおいしいー！」

お茶会の席。白い丸テーブルの四方を囲んで、太陽を背に白が白い丸椅子に座り、その対面に永琳が、白の左側に依姫、依姫の対面に豊姫が座っている。

席の決め方は非常に単純だった。最初に白が西の席を「ここがいい！」と言って陣取った。そこからは流れる様に、依姫が白からみて左側に座り、続いて豊姫が依姫の対面の席につき、そのあまりに永琳が座った。

そんな席順の事情はさておき、白はきらきらと目を輝かせて、永琳に向けてスコーンを掲げた。口の周りは食べカスが所々についていることが、何とも彼らしいと言える。

「良かったわ。沢山あるから、もつと食べていいわよ」

「はーい！」

もきゅもきゅ、と謎の音を立てながらハムスターのようにスコーンを齧り、その度に白は顔を綻ばせて幸せそうに頬を紅潮させる。紅茶にはスコーンを食べる前に一度手をつけたが、それからは一度も飲んでいない。

そんな白の様子を、依姫はそわそわと落ち着かない様子で見守っていた。彼女の視線は、白の耳と尻尾に釘付けた。狐の耳はピクピクと嬉しそうに上下に動き、尻尾は千切れんばかりに左右に揺れている。それを見るだけで、依姫の口の中に幸せという甘味が広がった。

「そう言えば、自己紹介がまだだったわね。私は綿月豊姫。白、これから末永くよろしくね」

「んにゅ? ……んっ、よろしく?」

白は名前を呼ばれて豊姫から話しかけられたことに気づくと、喉を鳴らした後すぐに疑問符を頭の上に浮かべるように首を傾げて、豊姫のことは見つめた。尻尾は左右に振れていないが、耳は時折、何かを期待するように上下に動いていた。



豊姫は白にしばらく見つめられてその意図を理解したのか、ふんわりと笑みを浮かべて白の頭を撫でる。

「よろしく、っていうのはね。これからも仲良くしましょう、っていう意味なのよ」

「ん、そうなんだ。うん、よろしく！」

天真爛漫な笑みが咲いた。完璧な不意打ちだ。小動物かと思つて近づいたら、その実魔性の魅力を含蓄した愛玩動物だった。豊姫はお茶会のお菓子を食することも忘れて、思わず手触りが絹織物よりも良く反応が自然観察のように楽しい白の頭と耳を撫で続けた。白はくすぐったそうに時折身じろぎしながらも、嫌がることなく、笑顔でスコーンを齧り、時に頬張った。それがまた、リスのように愛らしい。「そう言えば、白はどこから来たの？」

ピクツ、と依姫と永琳が反応を示した。二人が白に改めて注目すると、白はまたスコーンをマイペースに飲み込んでから、元気よく言った。

「あっちー！」

白は自分と依姫のちょうど中間を指差した。これを見て、三人とも正確な場所は聞き出せ無さそうだとすぐに察した。

「なら、友達とかは居ないのかしら？」

豊姫の質問は続いた。白は自分の手を顔の少し下に出して、指折りと言った。

「えっと、びやく、くろ、それとーみあ、くらびー、おひさま、つくみー、すさのー、たぢから、えーりん、よりひー、とよひー！」

元気な声だった。そして、自分たちも友達として数えられていることに、言葉に表せない充足感が彼女たちの心を満たした。

「あら、とっても嬉しいわ。私たちは友達なのね」

「うん、ともだち！」

宣言してから、すぐにまた白はスコーンに手をつけた。

「私からも一つ。びやく、くろ、どんな人なのかしら？」

永琳がスコーンを手に取りながら、白に質問を投げ掛けた。

「びやく、くろ、どっちもともだち。はくといっしょ。でも、どっちも

あばれんぼう。はくとちがう」

白はそれ以上答えなかつた。スコーンを嬉しそうに頬張っている。謎掛けのような答えだ。永琳はその知恵を振り絞って、その正体を探ろうと、スコーンと紅茶を嗜みながら思考に耽る。

「あつー！」

何かを思い出したように、白が突然声を上げた。どうしたの？ と豊姫が声を掛けようとするが、それよりも先に白は「これあげる！」と食べかけのスコーンを豊姫の前にある皿に置いたことで、タイミングを失う。

「くらぴーとのやくそく！ またね、えーりん、よりひー、とよひー！  
びゃく、おねがい！」

まるで遅刻寸前の学生の如く慌しく、太陽に向かって走る。太陽の光が眩しく、白の姿が光によってほとんど見えなくなった時、ふと永琳はその目に白の尻尾が増えるという幻とも現実とも覚束ない光景を見た。

「……疲れているのかしら」

永琳はいつものように溜息を吐いた。

「ああ……白が……」

依姫は白が何処かに行ってしまったことに呆然とした。

「あつ……まだ全然食べてなかつたのに」

そして豊姫は、まだ手を付けてなかつたスコーンが白のくれた食べかけの半分しか残っていないことに落ち込んだ。

ちなみに、白のくれたスコーンはとても美味しかったとか。物が違わないので当然である。味にプレミアを付ける少女は、それを食べられないことにさらにガツカリした様子だったとか何とか。

## 第五話 また、あそぼうよ ※R―17

「……遅い！」

森の中心部、地獄のように深い闇の中。ピエロを思わせる帽子と服を身に着けた少女は、ずっと待っている。太陽は既に沈んでしまった。本当なら太陽が頂上に達した時に約束しているのだが、この時間になっても待ち人は来ない。

「あたいをこれだけ待たせるなんて……来たら絶対にお仕置きしてやる！」

そう言いながらも、少女は大木に背を預けて、じっと待ち続けた。時折、風に揺れた木の葉の隙間から見える月を見ながら。ひとり詰まらなさそうにしりとりをしながら。

——グルル、ホーホー。

周囲から獣の唸り声や、フクロウの鳴き声が聞こえて来た。しかし、少女はそんなものは眼中になく、ただ待ち人が現れることに期待する。

——グルルルルルル！

獣の唸り声が妙に近くなってきた。自分の背を預けている木の裏にでも潜んでいるかのようだ。それくらいに近い。しかし、少女はそれに恐怖することはなかった。むしろ、嬉しそうにその口元を三日月状に歪めた。

「やつと来る！」

待ち人とは、背後に居ると思われる獣のことではない。確かに待ち人は獣の属性を含んでいるが、彼は白狐だ。幼い、人型の、人畜無害で天真爛漫な男の子だ。少女は今日に限って、彼の姿を捉えたことがまだない。

背後に居ると思われる獣は、単体であれば少女も太刀打ちすることが出来る。しかし、それが妖獣か群れである場合は、その限りではない。実のところ、雰囲気からは想像できないが、少女は窮地に立たされていた。

しかし、少女は知っていた。待ち人は自分の窮地にこそ現れる、と。

過去三度の経験が、彼女に不安定な確信を与えていた。

ドゴン、不意に少女の背後で轟音が鳴り響く。続いて、純白に輝く丸い物体が少女の横から飛び出してきた。それを見ると、少女はより一層笑みを深くして、飛び出してきた物体に近づいた。

傍まで近づき、その物体を見た時、ちょうど数本の尾が光の粒子となって霧散している場面だった。残った尾は一本のみ。通常の妖獣や神獣であれば異常事態だが、待ち人と少女にとってこれは日常茶飯事の光景だった。

「うーっ、びやく、はやすぎー！」

ぷんぷん、と擬音がついてもおかしくないほど可愛らしい怒り方だ。迫力というものがまるで無い。これでは怒られた側を和ませるばかりだ。それが魅力と言えれば魅力なのだが、少女としては他の者にそうした貴重な場面を見せるのはあまり好ましくない。そのため、先ほどまでの笑みは消えて、お仕置きだ、とばかりに立ち上がった彼の背後から勢いよく抱き着いて押し倒し、腰のあたりに馬乗りした。そしてお仕置きのついでに、尻尾を存分に弄った。

「ひゃうっ!？」

「きやはははは！・ 白、何その変な声！」

笑い飛ばしながら、少女は抱き着いた相手、白の尻尾を弄ることを止めない。尻尾の根元を掴んでみたり、撫でてみたり、左右に動かしてみたりと好き勝手に弄った。その度に白は先ほどのように声を上げた。

少女がそれを何度も繰り返すうちに、次第に声が艶めかしく色付いていく。

「ひゃう、あう、はふ……っ」

少女が白を弄って数分もすれば、はふーっ、はふーっ、と獣のように肩を大きく動かすほど息が荒々しくなる。耳はパタパタと忙しく上下に動き、尻尾に至っては何かを期待するように自分からぶんぶんと振り始める。最初暴れていたせいか、白の着物は半分以上はだけて脱げてしまっている。つまり半裸の状態だ。山育ち特有のしなやかな筋肉と雪原の様な白い肌は見事な美の曲線を描き出し、息をする

たびに上下する背中には山脈と雪原が見え隠れする。横に向けられた顔からは、紅潮した頬と甘美に震え困惑する蕩けた瞳、口からは獣特有の八重歯が艶めかしく覗いている。

今日はただ単に遊ぶだけの気だった少女だが、そんな白の姿を見ているうちに、その気持ちにも変化が訪れる。成されるがまま、抵抗も出来ず蹂躪されるその姿は、少女をその気にさせるには十分すぎるほど色めいていた。

「ごーんなことで発情するなんて、いつけないんだー。そんなことじゃあすぐに、ぱくつと喰われるぞ」

おふぎけ半分の軽い口調で少女が言っても、白がそれを聞いているようには思えなかった。返事もしなければ、口をだらしなく開けて、ただ肩と背中を大きく上下させて獣のように荒い、しかし少し可哀想になつてくるほど苦しそうな息が漏れるばかりだ。

しかし、少女は白が言葉を返さなくとも、ただその乱れた姿を見るだけで満足だった。彼女の心の奥に秘めた嗜虐心を満たすには、白の扇情的で何かを我慢する荒々しい吐息、自分が今の盤面を支配しているという実感があればそれで良い。

ふと、少女は白の口元に目がいった。よく見てみると、口の中で唾液が糸を引いている。そこから彼の顔全体を捉えてみると、少女の心臓がドクンと大きく跳ねた。

やっていることはただの悪戯だった。しかし、白の顔を見てみれば、切なさに顔を蕩けさせている。とろん、として涙をためた彼の瞳は彼女の嗜虐心を満たし、口の中で糸を引く唾液はしてもいない凌辱を想起させ、八重歯は白特有の発情の証だ。心をくすぐる、なんて優しいものではない。その顔だけで心の奥を満たしながらも、その先にある情欲を煽り立て、相手をその気にさせる。

「はあ……はあ……」

気づけば、少女も肩で息をしていた。手にはいつの間にか汗が滲んでいた。それは手におさまることなく、少女の体全体に広がっていた。

「……うん、確かあいつって、一日一回しか表に出てこないんだよ

ねえ」

ニヤリ、とその口元が三日月を描く。白を見つめる瞳は獲物を狙う捕食者のソレ一色に変わった。もとより、少女に理性などというものは米粒程度しかない上に、堪え性も無い。拾い食いするほど意地汚くはないが、間食は好きな時に食べるし、好きなものは最初に食べる。嫌いなものは主人に言われなければ残す性質だ。

邪魔者は此処には居ない。少女の主人が迎えに来るまで、まだ少し時間がある。白ももう出来上がっている。これほど絶好の機会を、少女が逃す道理はない。

「白、ちよつと体勢を変えるよ」

息が当たるほど近くで、少女は白に淫靡にねっとり囁いた。そしてすぐに白の肩を持って仰向けにする。しかし、何の運命力が働いたのか、着物が僅かに胸だけを隠した。

惜しい、と少女は思いながらも、どうせ同じだし、と考えを改め、彼のしなやかな両腕を自分の両手で拘束する。それが終われば、後は逃げられない様に腿あたりに腰を下ろして、鼻と鼻がくつきそうなほど至近距離から真つ直ぐ、白の顔を見つめる。

「あ、う……くら、ぴー……」

ゾクツ、と少女、くらぴーことクラウンピースの背中に電流が迸る。白の切なそうな声だけでも情欲を逆鱗に触れた龍の如く暴れさせるというのに、その上で先ほど見えなかった顔全体——快樂に身を任せ発情する少女のような顔——が見えるとなれば、もうどんな抑えも効く筈がない。視覚と聴覚で快感が奔るのだ。ならば、実際に事を起こせばどれだけの喜びを味わえるというのか。

「だいじょーぶ。ほら、痛くないし……とつても、気持ち良いから」

耳元で、情欲を煽り立てる様にクラウンピースは欲望を吐き出した。その声に、白は飛び上がる様に体が一度、大きく跳ねた。尻尾の毛を大きく逆立たせて、狐耳はビクビクと痙攣している。その吐息はさらに荒くなり、情欲に溺れた獣と大差ない。違うとすれば、彼は純粹で、無垢で、無知だったからこそ、ただ不安そうな瞳で、唇をわなわなと震わせながら、クラウンピースのことを見ていたことか。

もう一度、改めてクラウンピースが白の顔の全体を捉える。そして、もう我慢できないとばかりに健康的な赤い舌で唇を濡らす。体も心も瞳の奥まで色欲に染まり、その顔を見るだけでも白の体に得体のしれない震えが奔る。

「それじゃあ、いただきます」

とうとう、宣告された。クラウンピースは乙女と獣の境界の狭間で、ただ感情に身を任せて、目を瞑って顔を近づける。彼女も雰囲気が大切だということは分かっているのか、最初の一回は乙女のようにロマンチックに、とても初心に、純粹に、と。そして二回目からは発情した獣の如く貪りつくす。凌辱の限りを尽くし、白を自分の色、狂気に染め尽す。自分無しでは生きられない体に変えてやる。

歯止めなど無い。此処にいるのは彼と彼女だけだ。

クラウンピースは顔を近づける間に、少しだけ彼の両腕に対する拘束を強くした。それは獲物を絶対に逃がさない、という意味表示だ。ここで絶対に仕留めると、覚悟を決めた証である。

白の荒い息が、彼女のぷりつとした唇に吹きかかる。とつても乱暴で、強くて、そして何よりも熱い吐息だ。身を焼き焦がすような吐息の熱が、少女の体を侵していく。まだ接吻もしていないのに、たった数秒後の出来事だというのに、少女はその熱い吐息が自分の体の中で暴れることを想像して、ゾクゾクと狂おしい快樂が背中から腹部にかけて伝わった。暑さにめっぽう強くても、恋の灼熱は一味も二味も違った。それが彼女の気持ちのまま高ぶらせ、漏れる吐息を暴れさせる。

二人の唇が掠る様に触れた。あと、ほんの少し。一秒もしないうちに、一つの空気と世界を共有する。心が震え、魂が叫び、本能が溶ける様な熱が頭を支配する。閉じた瞳からは嬉しさのあまり雫が一滴、何物にも染まらない透明な色を保って、はらりとこぼれ、頬を伝う。

ぐるん、と不意に二日酔いのような酩酊感が脳と体の中を襲う。背中には冷たい感触が伝わって来て、最高に火照った体が徐々に冷めていく。何があったの、と目を開けて見れば、そこには今も辛そうにし

ながらも、しかし心配そうに不安で顔を染める、愛しい彼の顔があった。

「だい、じょうぶ？」

はて、何をもって大丈夫？ などと聞いているのだろうか。少女は体の熱を大切に、冷まさないように、心の中で気持ちを鼓舞しようと、気合を入れた。

「いたく、ない？」

はて、確かに心臓は暴れ馬の如くドキドキと音を打ち鳴らして、少し胸が痛い。でも、その響きが体に快樂を伝えている。これくらいなら、へっちゃらだ。

「なかないで」

もしかして、彼は嬉しさ故に流れる涙を知らないのだろうか。だとすれば、ちよつと憎くはあるけど、どうにも憎み切れなくて、優しく、胸が張り裂けそうなほど切なくて、心の中に温かな雫が落ちて波紋を広げる様に嬉しい。

もう、体は熱くない。でも、ポカポカととっても温かい。快樂や欲望のような心を浸す薬の様な心酔ではなくて、ただただ柔らかく寄り添うような幸福感による豊かな心が芽生えてくる。

「だいじょーぶ」

——ああ、それはさつき、あたいが欲望のままに口にした言葉だね。でも、こんなに違うなんて、知らなかった。

「ほら、ここにいろよ」

とつても温かい、先ほどとは違う、優しさが身を溶かすのではないかと思わせるほど、心の奥から広がっていく安心感。

「くらぴー。だいじょーぶ。いつしよにいるよ。いつでもあえるよ。ねっ、だから、ね」



——また、あそぼうよ。

「——うん」

少女は真つ白な温もりに身を任せた。色や欲望の気配はすっかりと消え失せ、まるで憑き物が落ちたように、浄化されて生まれ変わったような清々しさが体を心地よく吹き抜ける。

二人は眠れる森の中心部で、まるで姉弟のように抱き合った。優しさというゆりかごは、二人に柔らかい眠りを提供するのであった。

余談だが、クラウンピースは実は待ち合わせよりも一日早く来たとか。毎度毎度、彼女は白との約束になると待ちきれなくなつて半日前に来て待ち続けるということをしていたので、白も彼女に合わせ、今回も相当早く約束の場所に訪れていたとか。

そんな可愛らしい子どもの事情は、二人だけの暗黙の了解のように、次の日の遊びの中できれいさっぱり忘れ去るのであった。

## 第六話 意外な一面

「はむっ」

白は一人で都の中を歩いてきた。大通りに出店が並ぶ祭りの日、人混みの中を流れる様に進みながら、彼は先ほど女性店主から貰ったリング飴を舐めている。尻尾があれば嬉しさのあまり振り回していたことは容易に想像できる光景だが、今の彼は人間の都に居るということもあり、前から着ている白と藍色の着物を与えてくれた持ち主の言に従って、狐の耳と尻尾を隠していた。思い出したのがつい先ほどで、ここ数ヶ月の間すっかり忘れていたことはご愛敬というものか。

「あっ！」

ふと、白は人混みの中でも一際、人が集まっている中心部に、見たことのある黒髪と自分と同じデザインの着物の男性を見つけた。奇跡的に人だかりに出来た隙間から見知った顔を見つけた彼は、リング飴を大切そうに持って駆け出した。人混みと人だかりの中をもものもせず、白はその小さい体と軽い身のこなしであっさり中央に辿り着いた。そして、その男性の背中に声を掛けた。

「つくみー！」

元気いっぱいの声だ。よく通る大きな声はその男性にも届き、振り向いた。そして白を見つけると、一瞬目を見開いて、しかしすぐに嬉しそうに聖母のような笑みを浮かべて、ゆっくりと白に近づいた。

「白、貴方でしたか。元気になりましたか？」

つくみーと呼ばれた男性は中腰になって白と目線を同じ高さに合わせて言った。白はそれに元気よく「うん！」と返して、見るだけで腹の底から力が湧き上がる様ないっぱいの笑顔を咲かせた。

「おや、リング飴ですか。美味しそうですね。私も一口貰っても？」

「いいよー。はいっ！」

「ありがとうございます」

男性は白からリング飴を受け取ると、小さな歯型のついている飴細工の部分の歯で砕き、中にあるリングをほんの少し齧りとった。

「……ふむ、やはり祭りの味はこうでなくては。サグメさんに見つかる前に食べることが出来て良かったです。あ、飴の部分は砕いておいたので、これで白も簡単に食べられますよ。はい、どうぞ。ごちそうさまでした」

「うんー！」

はむっ、と小さな口で白はリング飴に齧りついた。その顔はとにかく楽しそうで、嬉しそうで、見ている方が元気になるほど綺麗だった。男性も、この笑顔に何度元気をもらったことか、と笑みを深くしてリング飴を食べる白を見守った。

「……………」

ちよんちよん、と男性の肩を遠慮半分叩く者が居た。男性が振り向くと、そこには予想した通り、右だけ生えた翼とセミシヨートの銀髪が特徴的な、男性御付の少女が居た。

「ああ、見つかってしまいましたか。あと二分ほどは白の顔を見られると思ったのですが……………」

「んにゅ？」

男性から視線を向けられ、リング飴を頬張っていた白は突然見つめられたことに首を傾げて、つぶらな瞳で「なに？」と訴えた。声に出さず、リング飴を頬張ったまま視線だけで会話を試みる姿は実に微笑ましかった。子どもらしい優先順位が眩しく見える。

「そうだ。白、今から私の家に遊びに来ませんか？」

ふと、男性は思いついたままに提案してみた。本音も建前も無くしていつてしまえば、白とすぐに別れることになって名残惜しかっただけだ。

「っー！」

大きく勢いよく二回も首を縦に振る白の姿を見て、男性は微笑みを返した。

しかし、すぐに肩を叩かれた。見てみると、先ほどの御付の少女が首を横に振った。どうやら、彼女は男性の提案に反対しているみたいだ。

「サグメさん。白は見た通り、無害ですよ。それに、私の友達です。私

の顔を立てると思って、ここは見逃してください」

ふるふる、と少女、稀神サグメは頑なに首を横に振った。どうやら、単純に怪しい人物だから、というわけではないらしい。ならば、考えられる理由は1つだけだった。

「私はツクヨミです。上に立つ者として、人を……妖怪だって、見る目は確かです。それに、白は我々の側ですから」

男性、ツクヨミは言い切った。しかし、それでもサグメは首を縦に振らない。ツクヨミが信用できないというわけではないが、職務上それに納得して折れるわけにもいかない、といったジレンマに挟まれているのだろう。

「なら、サグメさんが見極めてください。貴方は私の護衛ですから、いざとなれば、守り切ってくださいさるでしょう?」

力強く、サグメは首を縦に振った。それを見て、ツクヨミはニヤリとその顔に悪戯に成功した子どものような笑みを浮かべた。

「なら、決まりですね」

しまった、とサグメは自分の失敗に気が付いたが、既に遅い。ツクヨミは左手で白の右手を握って、帰宅する準備を終えていた。

「さあ、我が家に帰りましょう」

後の祭りとはまさにこのことだと、サグメは軽々しく領いた過去の自分を恨めしく思った。

家に遊びに来ないか、などと言ったものの、ツクヨミの家にはボードゲームは充実していても、肉体を動かして遊ぶスポーツ用品などは殆ど揃っていない。そういうものは弟の担当だ。自分から遊びに来いと誘ったものの、ツクヨミは白と楽しく遊べる媒体が無いこと道中、頭を悩ませた。

菓子折りなどを持って世間話も良いが、それでは白が存分に楽しむことが出来ない。スポーツをしようにも、道具もなければ、身体能力がそもそも違い過ぎて勝負にならない。懐古して缶蹴りなども面白

そうだが、三人ではどうにも盛り上がりには欠ける。少人数かつ出来るだけ対等に弱者と強者が遊べる遊びを見つけるのは、思いの外難しい。

「……ああ、その手がありました」

ふと、ツクヨミは中つ国で流行している神と人間が戯れる遊び、「神遊び」を思い出した。高天原から追放された弟がよく子ども相手にやっていたものだから、今でも覚えている。ルールもぼっちりだ。

「白、サグメさん、神遊びをしましょう」

ツクヨミはすぐに提案した。それを聞いて、白とサグメが互いに首を傾げると、ツクヨミはすぐにルールの説明を始めた。

一つ、弾札の所持数をお互いに決めること。また、上限被弾回数を決めること。被弾回数の上限を越えて被弾した場合、その者は敗北する。

二つ、弾札の製作は神が行うこと。また、弾札の神力の補充は神が行うこと。（弾札とは神力弾をどのようにはら撒くかという記憶媒体である。弾に被弾すると、三秒間だけ弾が消え、また初めから弾がばら撒かれる）。

三つ、弾札は最低限の逃げ道を作ること。絶対に当たる様なものは許されない。また、出来るだけ怪我を減らすために、弾札から出現する弾は全て威力を押さえたものであること。もしくは、そうした属性を付与させること。

四つ、弾札をお互いに消費し終えた場合、どちらがより美しかったかによって、神側が嘘偽りなく判定しなければならぬ。

以上だ。何とも神に有利に見える様な遊びだが、むしろここで公平に判断しなければ神の品格が疑われることになり、また、嘘を吐きすぎれば遊び相手が居なくなるということもあるので、神側も嘘を吐けない。遊びにそこまでのリスクを負う神も居ない、ということだ。

「さて、それでは、まず弾札の製作の方を——」

「はいっ—」

ツクヨミがそう言い掛けたところで、白が少しだけ神力の余っている御札らしきものを差し出した。一瞬、それが何なのか分からなかつ

たツクヨミだが、しかしそれが弾札であることを認識すると、得意げに話していた顔が僅かに強張った。

「……白、神遊びをやったことがあったのですか？」

「うん！ すさのーとやったよ。えっと、たまふだは……これでぜんぶ！」

ツクヨミは束になっていいる弾札を強張った顔のまま受け取り、その数を確認すると、総数なんと八十一枚。それも、難易度別にされているものまである。

「……弟と、ですか。ちなみに、十回やればどれくらい勝てますか？」  
「えっとね、はじめはかてなかったけど、いまはね、みつつめのむずかしさで、すさのーがちようせんちゆう！」

ツクヨミは思わず天を仰いだ。あの武闘派のスサノオが、遊びとはいえども手加減をされる現実には、八岐大蛇でも引いた気分になった。もう、大人ぶっている余裕などない。全力でやってもおそらく勝てないだろう。ツクヨミは出来る限りの策を練りながら、神力を弾札に補充して、終わればそれを白に返した。

「……それでは、私たちは弾札を持っていないので、作るところから始めますね」

「うん！」

白の元気な声が、今はただただ言いようのない凄みを含んでいるように感じるツクヨミであった。

結果だけ言えば、ツクヨミは単騎で二番目の難易度まで無事勝つことが出来た。しかし、三番目の難易度となるとサグメと組んでようやく、といったところで、一番の難易度を誇る四番目に至っては反則しているのではないでしょうか、などと勘繰ったほどに難しく勝つことが出来なかった。

勝者である白本人は何をしているのかと言えば、単純に遊び疲れたのか眠っていた。あどけない寝顔に思わず心が和むが、それと同時に

先ほどの狂気を含んでいるとしか思えない密度の弾幕には一片の可愛らしさも無かったことを思い出すと、何か薄ら寒いものを感じざるを得ない。

「……寝顔くらいは、嘘でないと思いたいものですが」

口にして、いや違う、とすぐに首を振って自分の言葉を否定する。

白は純粹過ぎたのかもしれない、と考えを改めた。純粹な勝利への渴望から、ただひたむきに努力をしたからこそ、神遊びであれほど強くなったのかもしれない、とはツクヨミの一予想である。

「それに、白に嘘は無理でしょう」

そもそも、嘘という概念さえ知らないかもしれない。そんな白が嘘を吐くことなど、どうやっても出来る筈も無い。嘘の意味を教えるも、結局自分が嘘を吐く意味を見いだせず嘘など吐きそうにない。

「……白とももうすぐ、お別れですか」

夜空に浮かぶ半月を見て、ツクヨミは小さく呟いた。

この先、考えなければならぬことは多々ある。しかし、何よりも問題なのは、やはり思い入れの強い白についてだ。

この都に自由に出入りする白は、今や彼の天真爛漫な行動のせいとか、この都の民にも好印象を与え、白にとってはこれ以上ないほど心地の良い場所となっている筈だ。だからこそ、白は結構な頻度でこの都に訪れる。しかし、今回はそれが仇になりそうだ。

「……文明破壊のための爆弾」

移住の時、今の中つ国にとつてのオーバーテクノロジーを残すわけにはいかない。だから、ロケットが全て飛び立った半日後、この都を中心に文明を消滅させるための爆弾が爆発する。

その時、もしも此処に白が訪れたならば、という想像をするとゾツとしない。やはり、何か理由を付けて、その時期には白が此処に訪れないようにしなければならぬ。そうとなれば、弟に手紙を送りつけて、話の辻褄でも合わせてもらおうとしよう。

思いつきのまま、ツクヨミは筆を手に取り、手紙をしたためた。完成すれば、すぐに神力で生み出した遣いにその手紙を運送させる。これで、あとは自分が白に話を切り出すだけだ、とツクヨミは深い溜息

を吐いた。



## 第七話 お別れの花冠

秋の涼しい風が白い髪を撫でる。風はそのまま森の中を駆け抜けて、木の葉のコーラスを奏で始めると、今度はそれに応じて虫がリンと高い声で鳴きだした。周りには白いコスモスが月光を浴びながら元気に咲いている。

「〜っ、〜っ！」

自然のコーラスに身を任せ、鼻歌を歌いながら、白は白いコスモスの花畑の中に紛れていた。コスモスと同じように風に合わせて体を揺らしながら、コスモスを丁寧に摘み取り手先で作業を繰り返す。1つ1つ丁寧に、真心を込めて、その思いを紡ぐように、花冠を紡いでいた。

「うんっ、できたー！」

最後の花冠が完成すると、白は満面の笑みを浮かべてそれを月に向かって掲げた。その出来は完璧とは言い難い。ところどころ、形の崩れた箇所があったり、花が均一に並べられていなかったりと、どうにも子どもならではの不器用さを隠せない。しかし、その不器用こそが手作りとしての味を出していた。

「みんな、よろこぶかなあ……」

数十もの花冠をぎゅっと抱きしめて、白は都に向けて走りだした。りんりん、と虫の鳴き声は止まない。

ふと頬を撫でる秋風は、静かな森の中で何度も音を奏でた。

白が地面を踏みしめる時に下駄からなる音が、森の中で大きく響く。からん、ころん、と。

「そんな大きな音をたてたら、妖怪たちにすぐ見つかつちまうぞ」

不意に、森の闇の中から声が掛けられた。白が足を止めてそちらを見てみれば、そこから出てきたのは、白黒の洋服を着た長い金髪の女性だった。

「るーみあー！」

とてとて、と白は自ら女性ことルーミアに近づいた。ルーミアは近

づいて来た白の前でしゃがみ込み視線を合わせると、その頭をわしやわしやと撫でた。

「ったく。白、気づけよな。今、此処に妖怪が全然居ないことに」

「へう？ みんなおでかけ？」

妖怪の中では一大事だというのに、白は何それと言わんばかりに、きよとんと首を傾げてみせた。ルーミアはやっぱり、と肩を落として溜息を吐いた。

「ほんと、私は此処に残って正解だったな。白、都にはもう行くな」

「えっ、どうして？」

「みんな、都で殺し合いをしているからだよ」

ぶわっ、と白の尻尾の毛がハリネズミのように総毛立つ。顔は一瞬で青くなり、唇をわなわなと恐怖に震わせた。その体も、大きく震えている。

「だから、今すぐ中つ国に逃げろ。私はこれから、他の奴らに混じって、都の奴らと殺し合ってくるから、ほら、さっさと行ったいっ——」

「だめえええ！」

びくっ、とルーミアは予期せぬ大声に一步後ろに下がった。続いて、どんと腹部に衝撃が走り、重心と衝撃のせいでそのまま尻もちをついて倒れ込んでしまう。

「イタタ……白、いきなり何するん——」

「だめっ！ ぜったいにだめ！ るーみあ、はやく、はやくみんなつれてにげて！」

「っ」

ルーミアは思わず息を呑んだ。いつも和やかに笑ったり、嬉しそうに尻尾をぶんぶんと振ったり、時折悲しそうにシユンと尻尾や狐耳を垂らしたり、ぶんぶんと可愛く怒ったり……。そんな白が、目に涙をためて、必死の形相でルーミアの服の襟首を掴んで叫んでいる。こんな白を、ルーミアは今まで見たことが無かった。

「みんな、だめ！ いま、みえた。みえたの！ るーみあ、しんじやう！ いったら、たたかったら、しんじやう！ おおきなひかりにのみこまれて、みんな、みんな、きえちやう！」

白が叫びながら大泣きしていた。今まで一度たりとも声を上げて泣いたことなんてないのに、恥も外聞もなく泣き叫んでいた。ルーミアはその姿を見て、ただ事ではないと確信した。当然、その姿だけで判断したわけではない。ルーミアは、白の能力を知っているが故に、確信にまで至れた。

『異変を予見する程度の能力』か。わかったよ。知り合いには声かけて、さっさと逃げるから。白も逃げろ」

「……うん」

白はルーミアから離れて、袖口で涙を拭きとった。そしてルーミアに突撃した際に落ちた花冠を全て拾い上げると、また都の方に向いた。

「みんなに、おわかれのあいさつしてくる」

「はっ？ いや、白が先に逃げろって——」

「だいじょーぶ！ おわつたらすぐにもどってくるから！」

「あつ、おい！」

ルーミアの声など振り切って、白は森の闇の中に消えて行った。彼女の心の中に残ったざわめきなど露ほども知らず、いつもの自由奔放な姿で行ってしまった。

「……くそっ！」

ルーミアはすぐにその後を追った。気絶させてでも連れ帰る、という決意をその胸に秘めて、彼女は闇の中を疾走するのであった。

月の都の外壁。そこでは、妖怪たちと都の民による戦争が起こっていた。血肉が飛び散り、罵詈雑言と悲鳴が場の空気を支配する。阿鼻叫喚の地獄絵図を生き写しにしたような光景は、思わず目を覆いたくなるほど惨たらしい。

鼻につく濃い鉄と汚物の臭いは、都の中にも漂ってきている。心まで腐敗してしまいそんな酷い臭いだ。中には体調を崩す者まで現れている。

溜まる穢れ。積み上がる屍。染まり続ける赤い大地。

空を見上げてみれば、ロケットが月に向かつて飛んでいく姿が見られる。もう、幾つものロケットが飛んだ。最重要人物は、都の防衛に必要な者以外、全員が既にロケットに乗って月に向かつていった。

「えーりん、はい、これ！」

しかし、この都から避難しなければならない者が今、八意永琳の目の前にいた。その名前は白。八意家で数日過ごした後、その姿を二度と見せなかった彼が、彼女の目の前に現れた。どうしてか、その手に白いコスモスの花冠を永琳に差し出しながら。

「どうして、貴方が此処に……」

「だって、おわかれ、まだちゃんといつてないもん！」

ふふん、と白は胸を張ってそう言った。別に褒めているわけでもないのに、妙に誇らしそうに。いつもなら微笑ましいと思える余裕もあったが、今はそれどころではなかった。

「早く逃げなさい。このロケットが全て飛び立てば、その半日後に、ここは跡形もなく消え去ります。その余波に巻き込まれないうちに、逃げるのです」

「しってるよ。でも、はんにちもあるよね。それならだいじょーぶ！」  
教えて諭したつもりが、白はそれを知っていて、それでもなお、此処に来たと言つてのけた。今度こそ、永琳はどうしようもないと半ば諦めた風に溜息を吐いた。

「なら、私のところはもう良いわ。早く、二人のもとに。あそこの城壁の上に居ます。二人に別れを告げたら、すぐに此処から去るのです」  
「えーりん。よりひーもとよひーも、こっちにきてるよ」

白が永琳の指差した先を見て言った。それを聞いて、まさかと永琳がそちらを見てみると、いつの間にか目の前まで移動していた豊姫と依姫が居た。

「八意様。担当していた城壁の妖怪は殲滅しました」

その報告に、永琳はほっと安堵の溜息を吐いた。どうやら、イレギュラーも起こらず順調に、事が終わったようだ。こちらでイレギュラーが起こったばかりで、思わず要らぬ心配までしてしまった。

「そうですか。……白」

「うん！」

えっ、と依姫が声を上げた。聞き間違える筈も無い。白の声が依姫の耳に届いた。

すぐ横を見てみれば、そこには紛れもない、本物の白が居た。狐の耳と狐の尻尾、白と藍色を基調とした着物をいつものように纏った、彼が居た。

「はい、よりひー、とよひー、えーりんも、はなかんむり！」

白は三人に、今度こそ花冠を手渡した。依姫は呆然としながらその花冠を見てみると、作り方は間違えていないが、所々歪だった。花の位置が均一でなかったり、少し軸が歪んでいた。コスモスの花冠はとても綺麗だけど、不器用さが滲み出ている、子どもらしさに溢れている。

たかが一度、時間にしても僅か。とても小さな出会いで、触れ合った時間も少ない筈なのに、コマ送りのように頭の中で記憶が蘇る。

「よりひー、なかないで」

小さな手が、依姫の瞳の涙を拭った。その手は白雪のように美しいのに、とても暖かい。

拭かれて、顔が少しだけ濡れて、初めて依姫は自分が泣いていることに気が付いた。しかし、それに気付くと泣き止むどころか、涙腺がさらに緩くなり、涙が溢れて止まらなかった。

「……八意、様。白は……白は、これから、この大地で、生と死を繰り返す不浄の地で」

—— 私たちが居なくても、生き残れるのでしょうか。

きつとそのような言葉が続いたに違いない。しかし、依姫はそれを紡ぐことが出来なかった。これ以上、我慢して声を震わせずに言うことが出来なかった。

「今●の●彼一人では、百年も無理でしょう」

依姫が怖れていた言葉が、最も彼女が信頼する八意永琳本人の口から吐き出された。認識した途端、依姫の背中に迸る寒気は、死を直後にした第六感のそれに似ていた。

「なら、ならばっ！ 白を、白を匿うことは!? 結果と……八百万の力を借りれば、穢れの蔓延も防げます！」

「籠の中の鳥のような生活を、彼が望むと?」

依姫は言葉を詰まらせた。本人にとつて幸せなことは、必ずしも生きることではない。時には、死んでも良いから貫き通したいことがある者も居る。それを知っている依姫は、永琳の言葉を安易に否定することが出来ない。

「……っ！」

依姫はギリツと音を立てて歯軋りした。どうして、ここでこの大地に残ると言えないのか。自分の気持ちは一時のもので、単なるまやかしだったとでもいうのだろうか。我が身可愛さに、恋する相手が死ぬと分かっているこの大地に放置して、それで本当に良いのだろうか。『諦めろ、とは言いません。ですが、貴方には立場があり、家族が居ます』

永琳の言葉が、心の内でリフレインされる。それが依姫の心に重くのしかかる。自分の行動が、自分だけに影響するわけではないと、どこまでも重い責任と言う名の枷が彼女の動きを封じる。

「もー、かんがえすぎ！ とよひーをみならってー！」

そんな中、場違いなほど明るい白の声が響いた。

「……お姉様を?」

ふと、依姫が豊姫の方に目を向けると、そこには白の頭や尻尾を存分に堪能している姿があった。

「あつ、ずるい！」

思わず大声が出てきた。その時には、いつの間にか涙は止まっていた。

依姫の声に対して、豊姫は余裕を持った笑みを浮かべてみせた。

「白とはもう早々会えないわ。だったら、今のうちにモフらなきや損よ！」

ドーン、と効果音と集中線までも活用されそうな勢いで、豊姫は言い切ってみせた。依姫はそんな姉の言葉を聞いて、抑えきれず大声を上げた。

「お姉様は白が心配じゃないのですか!？」

えっ、と豊姫がすつとぼけたように、きよとんと首を傾げてみせた。その瞳は「何を言っているのかしら」と呆れた様な色を含んでいた。「心配なんてしていないわ」

そして、そう断言してみせた。嘘では無い。心の底から、豊姫はそう思っただけで言っただけだ。

「どうして!？」

「八意様のお言葉を忘れたの? 『今の彼一人では百年も無理でしょう』って」

依姫はそれだけでは意味が分からなかった。だからこそ心配だというのに、どうしてその言葉が自分の不案を解消することになるのか。

「ほら、白を見てみればわかるわよ」

「白を……?」

豊姫に言われて、依姫は白を見た。頭には三角の狐の耳、綺麗な白髪、整った顔立ち、すつとしなやかな筋肉のついた体躯、表面に纏った微量な霊力、内に秘めた小さな妖力と神力……と、ここまで分析したところで、依姫はあつ、と声を上げた。

「霊力に、妖力……そして、神力?」

「んにゅ……」

ぺたぺたと、依姫は白の顔を触った。一体、どういうことなのか。謎を解明しようと白の顔をまじまじと見ながら、時に耳や髪、尻尾を触ってみた。

白はくすぐったそうに身じろぎするだけだった。

「良い毛並みでしょう?」

「はい。……って、そうじゃなくて!」

「もう。ほら、白は人の形をしているでしょう?」

豊姫に諭されて、依姫はようやくあつ、と理解の色を含んだ声を上げた。

人型の妖怪とは本来、力を蓄えた妖怪か、もともとの力が規格外の者、あるいは何千年という月日を生きた妖怪が怖れか信仰、もしくは

自然と力を着けてその形に収まった者たちのことである。

要約すれば、人型の妖怪は基本的に、規格外なまでに強い。そうではないにしても、何千年と生き残るほどの生存能力を持ち合わせている。

半獣や半妖などのハーフであればその限りではないが、少なくとも神力と妖力を同時に持ち合わせた半獣（半妖）半人など聞いたことも無ければ、前例も無い。

これらの事実と、八意永琳の言葉の意味を繋ぎ合わせれば、答えは自ずと導き出された。

「……あら、お迎えが来たのね」

残念だわー、と豊姫は白の後ろ、少し距離の開いた、妙に騒がしい場所を見た。

そこに居たのは――



## 第八話 つぎは、ぜつたいに

「幽香！ あんたはもう少し穩便に済ませるとかしないのか!? ここにくるまでの間の兵士全員ボッコボコにして、これじゃあ都から出るのに苦労するだろ！」

「あら、別に良いじゃない。足止めされても、それを倒してからここを離れても、森の中まではずぐに辿り着けるわ」

「あーもう！ だからつてなあー！」

「殺さぬだけマシというものじゃろう？ 注文の多い者は嫌われるぞい。まったく、狸の妖怪である儂に狐なんぞ助けろと言いつて。女狐ならば断わっていたところだのう」

「くそつ、あんたもあんただよ！ 幼い男だつて言つた瞬間に食いついて！ 喰おうとしたら容赦しないぞ?！」

「呵々。気分による。確約はせぬ」

「あら、ならその時は私もご相伴に預かろうかしら」

「だああああああ！ やっぱあんたら帰れ！ ここまで来たらもう私一人で十分だよ！ 今帰れ、すぐ帰れ！」

「まあ、そう騒ぐものではない。ほれ、向こうさんも三人。こちらも三人。数としては丁度良からう」

一人は黒と白の洋服を着た金髪の女性だ。一目見ただけでも分かるほど膨大な妖力は大妖怪のレベルに達しているどころか、その中でも最上位に入ると思われるほどの強者だ。先ほどからツッコミ役になつたり叫び散らしたりと、とても強そうには見えない一面を晒しているが、その中にある力は確かに強い。腹芸は苦手そうに見えるが、それは逆に言えば、腹芸を用いなくても相手を完膚なきまでに叩き潰せる実績の象徴だと言ひ換えることもできる。単純に馬鹿という可能性も捨てきれないが、前者の方が説得力はありそうだ。

一人は白いカッターシャツにチェック柄のベストを上から着て、また同じ柄のスカートをはいている、癖のある緑色の髪が特徴的な女性だ。日傘を差している姿、温厚そうな笑顔に一見騙されそうになるが、先ほどの発言から喧嘩つ早い、あるいは凶暴であることは十分に

知れた。それも、彼女の内に秘めるのは妖力だけでなく、魔力もまた膨大だ。大妖怪にして大魔法使い、そんな厄介な性質を彷彿とさせる。腹芸も出来るところから、感じる以上の力を隠し持っている可能性を考える必要がある。一筋縄でいける相手とはとてもではないが思えない。

一人は黄土色の無地のノースリーブと臙脂色のスカートを身に着けた女性だ。髪は肩口に掛からない程度の長さで、赤みがかつた茶色に染まっている。集団の中でも、一人だけ丸眼鏡をつけているところと、大きな狸の尻尾が特徴的だ。狸の妖怪でまず間違いないだろう。

頭の上に木の葉を乗せている姿は実に狸の妖怪らしいが、その木の葉こそが何かを化かしている可能性も否定できない。狸の妖怪ならではの尻尾が尋常ならぬ大きさを誇っていることも、化かし合いに一躍買っているように感じられる。大きさだけならば大妖怪クラスだ。何よりも注意しなければいけないのは、その妖力がまるで感じ取れないことか。腹芸はこの中で一番上手そうで、それを生業にしている可能性が非常に高い。その仮定が正しいとするのであれば、この中でも最もまともに相手をしてはならない相手だ。戦うならば初手必殺、これが一番に思える。

一癖どころか、二癖も三癖もある三人の妖怪に、思わず依姫は白の前に立ち、腰に差している刀の柄に手を添えた。例えあの三人が白の保護者だとしても、無傷で都の内地に辿り着く妖怪に対して無警戒に居られるほど、彼女の神経は凶太くなかった。

「あー、私らは別に戦いにきたわけじゃないっての。おーい、白！ そろそろ離れるぞ！ 光に飲み込まれるのは私も御免だよ！」

面倒くさそうに手を横にぶんぶんと振ってから、金髪の女性は白に声を掛けた。

「うん！ ーみあ、あとちよつとだけまつてー！」

白は女性、ルーミアの言葉に人懐っこい笑みを浮かべて元気に答えた。心なしか、尻尾を振る勢いが激しくなっている。

「あら、可愛いじゃない。あの子、私にちようだい」

それを見た緑髪の女性、幽香が世間話をするようにルーミアに話を

振った。

「言った端から喰う気満々か!? もう少し節操持てよ!」

当然、ルーミアは噛み付く勢いで反発を示した。しかし、それに対して幽香は悲しそうに、両手で顔を覆ってしまった。

「なら、せめて私に紹介ぐらいしても良かったでしょ? はあ、友だちの私を信用出来ないのね」

ほろり、と端正な顔の右端から顎にかけて雫が伝い、そして大地に落ちた。

「待て、これは私が悪いのか!? どう考えても白の教育上よろしくない幽香が悪いだろ!」

「あら、そんなことないわよ。少なくとも、私好みに育てる努力は惜しまないわ」

「やっぱ嘘泣きか! いや、待て。口元のそれなんだ? まさか涎だったのか!」

「これこれ。賑やかなのは結構じゃが、その狐の男の邪魔をしてはいかぬ。そろそろ静かにせい」

狸の妖怪からの静止が入ると、幽香は勝ち誇ったような涼しい笑顔を浮かべて、ルーミアは苛立ちと悔しさを抑える様に歯を食いしばった。

それからしばらく、静かな時が続いた。外では未だに悲鳴や怒声が聞こえてくるが、それもとても小さなもので、少なくとも彼女たちの近くで音は鳴っていない。

「ねっ、よりひー」

「……お姉様」

白に話しかけられた依姫は、豊姫に声を掛けて目配せした。何を意図したものなのか理解した豊姫は、心配性ね、と言いながら、懐から扇子を取り出して三人の妖怪たちを監視するように見つめた。

依姫は屈んで、白と目線を同じ高さに合わせた。

「だいじょーぶ。みんなつよいよ。るーみあも、あのふたりも。それに、びやくとくろもいる。だから、ねっ、しんぱいしないよ」

「でも、もしもあの二人が襲ってきた場合どうする? 本当に、大丈夫

か？」

「もうっ、よりひーはしんぱいしすぎ！　るーみあ、あのふたりにまけるほどよわくないよ！　それに、ずっと、びやくとくろがついてるよ。あばれんぼうだけど、たよりになるんだよ！」

「でも、もしも白が一人になつた時は……」

切りが無いことを言っていることは、依姫も分かっていた。それでも、心配は消えないのだから仕方が無かった。もしかすると、このまま離れたくないと、無意識に駄々をこねてしまったのかもしれない。「もうっ！　なら、びやくをよぶから！　びやく、つきまでみちをつくって！」

痺れを切らした白が、虚空に向かって大声を上げた。依姫は相手が何処にいるのか分からず、思わず周りをきよきよと落ち着きなく見たが、びやくとよばれる者はおろか、民草の人影一つ見当たらない。ふわっ、と柔らかい風が吹いた。髪の毛先を浮かせる程度の、小さな風だ。

「うん、そう！　びやく、きゆうほんぜんぶ！」

白が高らかに宣言した途端、彼の体が白く発光し始めた。あまりの光量に、依姫は思わず目を瞑り、更に光を遮る様に手を顔の前に出した。

「おー、久しぶりにその姿見たわ」

ルーミアの暢気な声が聞こえてきた。彼女は『闇を操る程度の能力』を用いて光の中にある闇を調節することにより、いち早く彼の姿を捉えていた。

発光時間、およそ一分。光が収まると、ようやく依姫はその瞼を開き、彼の姿を見ようとした。

「……なっ」

しかし、目の前に白は居なかった。見えたのは白い毛に覆われたしなやかな動物の足である。ふと上を見れば、空ではなく同じ色の体毛と動物の腹部が瞳に映る。そこで依姫はようやく、巨大な動物の下に居たことに気づき、慌ててそこから飛び出て、その全貌を確認しようと上を見た。

「……………」

依姫は、それを見て言葉を失った。

月の光は、白色の体毛に反射して幻想的な輝きを放っていた。四本の脚はしなやかな筋肉と美しい白色の体毛に覆われている。高さはおおよそ、依姫が六人いればようやく、背中と同じといった程か。

三角の狐耳が見えた。体と頭の大きさに合った巨大な耳だが、その形は白だった頃の面影を残している。鼻の高さもそうだ。しかし、その目は白とは比べ物にならないほど鋭くて、威厳に満ち溢れている。人々を畏怖させるには十分すぎる眼光だ。口元には肉食獣特有の尖った牙がいくつも覗いており、その巨大さも相まってただただ恐ろしい凶器に見える。

尻尾を見てみれば、その数は九本。その上、その一本一本が、おおよそこの大きな純白の狐の体長と同じくらいの大さを誇っている。

その全身を覆うのは靈力でも、妖力でもない。神力だった。思わず跪き、許しを乞いたくなるほど濃密で膨大な神力が、竜巻のように荒れ狂う。それは紛うことなき、狐神の姿。

気がつけば、依姫は膝をついていた。視線がかの狐に釘付けになっていた依姫が知る由も無いが、豊姫も、幽香も、狸の妖怪も、無意識のうちにその場で膝をついていた。

「我が名は鬮（びやく）。天地開闢の四文字目、鬮ぞ。イザナギとイザナミ程ではないが、土地や道を拓く程度であれば容易い。宿主の願いにより、今、貴様等が目指す月の裏側への道を押し開いてみせよう」  
威厳に溢れた声だった。大地を声だけで震わせていると錯覚するほどに。思わず身を縮こまらせてしまい、動くことが出来なかった。耳を疑う言葉が出てきたが、それさえも圧倒的力のもとに納得せざるを得ないと感じてしまった。

「ふんっ！」

ドゴン、と舗装された道に衝撃が走った。鬮の足元の道はひび割れ、亀裂は依姫の足元にまで及んだ。

「……………うそっ」

信じられない、と言外に含まれた声がこの場の誰も耳に届いた。見てみると、永琳が空に浮かぶ月を見て、目を見開いていた。

「月の裏側への道が、満月になっていないのに、押し開かれた……!?!」  
「当然だ。我を誰と心得る。鬨とは即ち、ひらくこと。我が『ひらく程度の能力』を前にすれば、かの天の岩戸さえも意味を成さぬ」

そんな問題の話ではない、と永琳は心の内で叫んだ。確かに、月の表側から裏側への道を拓くだけならば、彼女の愛弟子の豊姫にだって出来るだろう。しかし、はるか遠くにある不完全な月を見て、その裏側への道をこの大地から拓くなど、規格外にも程がある。

何が言いたいのかと言えば、鬨の能力は距離という概念の一切を度外視して、且つ先に何かが存在するのであれば強弱の概念さえも無視して、道を拓いている。この能力に掛ければ、拓かれない道は存在しないのだ。つまり、鬨を前にすれば侵入不可能な場所は無い。

あまりの出来事に、かの永琳でさえ戦慄を禁じ得ない。これはまさしく、神の御業であると認めざるを得なかった。

「……おーい、鬨。あんまり無理してキャラ作って、後でボロ出ても知らないよ」

しかし、そんな御業を前にして、ルーミア一人だけいつもの調子で、狐神・鬨に声を掛けた。それも、大変失礼な言葉である。力は本物の彼を前にして、よくもまあ無礼な言葉を掛けられたものだ、と、永琳は冷めた目でルーミアを見た。

「ちよ、良いところだったのにルーミア、テメエ！　今までの流れ完璧だっただろうが！　何にもボロ出てないじゃん！　ちったあ空気読めよ！」

「ほーら、ボロが出た。……まったく、演技するならするで、知り合いに声かけられても、最後まですればいいでしょ」

「こ、んのっ！　ハメヤがったなクソアマア！」

その様子を見て、鬨とルーミア以外の面子がポカンと呆けてしまった。先ほどまで威厳の溢れていた狐神の姿は何処へいったのか。今はまるで子どものように騒ぎ立てている。力は本物で、誰しにもその威厳を魅せていた筈なのに、最後には酷いカリスマブレイクを見た。

まるで、クリスマスイブにサンタクロースの正体を暴露された子どもの気分である。夢も希望もありやしない。

「うう〜！ くそつ、もう帰るー！」

そして遂にはへそを曲げて、そんなことを言い捨てた。そしてすぐに、鬨の体が先ほど白が狐神の大きさに変身した時のように発光し始めた。突然のことに、これには誰もが目を瞑り、光が消えて行くのを待った。

「――びやく、おつかれさま」

光が収まると同時に、声が聞こえた。いつもの少し舌足らずで、不思議と和む、彼の柔らかい声だった。どうやら、元に戻ったらしい。一同ほっと安堵して、閉じた瞼をゆっくりと開いた。

『えっ』

そして、女性一同の声が重なった。

「んにゅ〜？」

白は疑問に首を傾げた。しかし、そんな姿だけでも十分な破壊力があつた。

何せ、目の前には、白のあられもない、生まれたままの姿があつたのだから。そこに首を傾げるなどというオプシオンをつければ最後、どれだけの力を秘めるかわかったものではない。

何も気づいていない、幼い、穢れを知らない顔が疑問に首を傾げている。首から肩にかけては、何も覆うものがなく、淡雪のように美しい肩や二の腕だけでなく、腋までもが丸見えだ。胸元にも、覆うようなものは何もない。隠されていない。無防備であつた。新雪の中に所々見られる健康的な桃の様な色づきは可愛らしく、しかし生まれたままの姿と相まってエロティックな魅力にも溢れている。

そしていよいよ、禁断の場所に全員の視線が集中した時。

「ああああー！ 全員、白を見るなつてのおー！」

白の全身が闇に覆われた。その闇の中を見通すことは出来ず、白の裸体は見事に隠れてしまった。

「白！ 服はどうしたんだ!？」

「ふく……っ？ あつ、びやくがおとした!」

「何してんだあのクソ野郎オオオ！」

最後の最後までトラブル呼び起こしやがって、と悪態を吐きながらルーミアは素早く、白の近くに落ちていた着物を回収して、それを闇の中に居る白に渡した。

「よいしょっ」

すり、すっ、という衣擦れの音が、この場で妙に大きく響き渡った。闇のせいで中が見えないというのに、人間そして妖怪の持つ豊富な想像力が、闇の中に隠された白の着替えシーンを彷彿とさせる。

「あつ、変な妄想すんなコラ！ くそっ、闇じゃ音は消せない……！」  
顔を赤くしてどこか上の空な様子の女性陣を見て、ルーミアは大声で指摘すると共に、自分の能力の弱点をこの時ばかりは本気で呪った。血涙を流さんばかりの眼力を備え、更には己が歯で己が歯を噛み砕かんばかりに噛みしめ、ギャリと凄まじい音を口から鳴らした。

「もういいよー！」

しばらくすると、白の元気な声がルーミアの耳に届いた。その声はまるで清涼剤の如く、彼女の荒れた心を静める。

「よしー！」

ルーミアはようやくこの時間が終わるか、能力によって出現させていた闇を消した。すると、そこには着物姿の白が出てきた。ただし、その着物は若干着崩れており、また帯が結びきれておらず……前が大っぴらに晒されていた。

不幸か幸いか、ルーミアは白の前方に居たため、他の女性陣から白のその姿を見られることは無かった。しかし、ルーミアはその姿を、全てをまさに目の前で直視してしまった。

「あわっ……おまつ、は、白！ 帯！ 帯がちゃんと結ばれてない！」

反射的に、ルーミアはそう指摘すると共に着崩れた着物を直して、帯を結べる状態にした。間一髪、とはまさにこのことか。じゅるり、などと女性陣の方から不穏な音が聞こえてきたが、ルーミアも今ばかりは構っている余裕が無かった。

「あー、うー……。くらくいとわからないよお……！」

しゅん、と耳と尻尾を垂れさせて、白はすっかり落ち込んでしまっ



た。ルーミアはそんな白を見て、しまった、と冷静さを欠いていた過去の自分を責めた。同時に、熱くなっていた顔が冷水をぶちまけられたかのように冷めていった。

仕方ない、とルーミアは肩を竦めて、着物の帯を結び始めた。人のものをやるのは、別に初めてではない。白と触れ合っていると、何度かこうして結び直してあげることがあった。そのため手際は良く、帯もすぐに結べた。

「ほら！ 次から気を付けるんだぞ？ 落ち込んでいないで、今は別れの言葉、言うんだろ？」

はっ、と白は顔を上げてルーミアを見た。ルーミアは依姫の方を親指で指して、得意げな顔を浮かべていた。

促される様に、白は依姫の目の前まで走り、その顔を見上げて言った。

「ねっ！ びやく、すごいでしょ！」

胸を張って、我がごとのように嬉しそうに、自慢げに、白が言った。依姫はその姿を見ても、ただ人形のように、こくり、ときこちなく頷くことしかできない。

「……ううう！ へんなそうぞうしない！」

「っ！」

依姫の頬を、ふわり、と何かが叩いた。それは白の尻尾で、どうやらジャンプした後器用に体を回転させて、その勢いで依姫の頬を叩いたらしい。

どうやら、白に邪な想像をしていることがばれてしまったらしい。依姫はそのことに焦り、必死にあたふたと手を振りながら、痙攣する唇を何とかして動かした。

「ああ……。ちよつと、いや、かなり衝撃的だったから……」

しかし、口から出たのは弁明になっていない弁明の言葉だった。その言葉に、白はさらに不機嫌になっていく。

「もっっ！ またそのはなし！」

怒ってます、と言いたげに腰に手を当てて、頬を膨らませながら白は依姫を睨み付けた。本当に怒っているのか、今ばかりはその瞳に迫

力があり、依姫は思わず「うっ」と声を上げて、後ろめたさに顔を俯かせた。

「だから、よりひーには、ばつげーむー！」

しかし、そんなことお構いなしに、白は依姫の両手を握って、はつらつとした夏の向日葵を思わせる笑顔で言った。

「つぎはぜったい、あそぼうー！」

依姫はその時、あどけない太陽を瞳に映していた。

朝焼けでも、夕焼けでも、昼の皆さんと強い日差しを放つ光の象徴でも、そのどれでもない、白い太陽。

無垢で、真っ直ぐで、純粹で、子どもっぽくて、とても優しい、真っ白に眩く輝く太陽。

白い太陽が照らすのは、表面の世界ではない。

心の内を、そこに潜む闇を照らして浄化する。

「あっ」

気づけば、依姫の目の前から、白い太陽は消えていた。その姿は闇の妖怪、ルーミアの前に居た。そろそろ帰ろう、と話し合っているみたいだった。

ルーミアと白が背を向けた。それを見た幽香と狸の妖怪も背を向ける。

その姿が、太陽の姿が、何処か遠くに感じられた。

「白ー！」

考えがあつたわけではない。ただ、咄嗟に叫んでいた。次の言葉なんて用意してないのに。

「なーに？」

白い太陽が振り向いた。太陽は、次の言葉を待っている様だった。足を一步も動かさない。自然の摂理の如く人を待たない本物の太陽と違って、実体から幻視した白い太陽は依姫を待っていた。

「次は——」

拳を握りしめる。腹に力を込めて、息を吸い——

「——絶対に、遊ぼうー！」

今までで一番大きな声で、依姫は言い切った。

「——うんっ！」

白は満開の笑顔で、依姫の言葉を受け止めた。まるで、彼女たちに渡した白いコスモスの花冠のように、白い彼は元気よく返事をしたのであった。

月へのロケットは全て旅立った。

白とその仲間の彼女たちは、遠くにある中つ国を目指して旅立った。

後に月の民と呼ばれる者の元都は、文明の生み出した兵器の光によつて跡形もなく飲み込まれ、最後まで攻め込んでいた妖怪たちは、この大地から消え失せた。

時代は、一つの転換期を迎えた。

神話の時代は終盤に入り、大地は穢れに汚染されていく。巡り巡る、生と死が循環して、命も大地も変わり続ける中。それでも、変わらないものはあった。

それは——

「あははっ！ すわこ、こっちだよー！」

「白、待て——！ 絶対に、今日こそ捕まえるよー！」

此処は諏訪の地。土着神が治める大地なり。

今日も神社は、夕焼けで美しく照らされる。影と光の世界が描かれている。

そんな神社の境内。

そこには、二人の小さな子どもの影があった。

彼と彼女は、ただただ楽しそうに追いかけてつこを楽しんでいた。

そして、ふとした瞬間。

—影は1つに重なった。

## 第二章 諏訪に集う。そして……

### 第九話 諏訪大戦

大地の荒れ具合は、まさに天変地異の如し。そこかしこにクレターが量産されている。朽ち果てた鉄の残骸が転がっている。砂塵が舞い、視界は少し悪い。極めつけは、大地に刺さる数々の御柱が、神々の古き戦場跡を思わせる。

しかし、そこにはまだ、二柱の神が居る。

青と白を基調とした壺装束を身に着けた金色のショートボブの少女が、大地にその血を垂らし、片膝をついていた。その手に持つ鉄の輪は既に錆びついて朽ちかけている。肩で息をするほど疲れも溜まっていた。壺装束には所々、赤色がべつとりと付着していた。しかし、それでも少女の瞳に諦めの文字は無い。

「最後だ。降参する気はあるか？」

冠のようにして頭に注連縄をつけた青髪の女性は、重苦しい言葉を少女に対して投げ掛けた。膝をついている少女に対して、女性はかすり傷など負っているものの、軽傷だ。大地に血の溜まり場をつくる少女とは比べ物にならない。

「だが、そんなことするもんか」

少女ははつきりと、拒絶の言葉を投げ返した。もはや立つことさえも出来ないというのに、何が少女にその言葉を吐かせたというのか。「何故だ？ もはや勝負は決している。これ以上の争いは不毛である」

当然のような疑問を、女性は少女に投げ掛ける。女性は、少女の信念を殺す前に窺い知りたかった。実力差を理解しながらも、ここまで諦めの悪い相手など、今まで居なかった。そんな少女の根性には感動を覚えた。そして、より鮮明に記憶に残したかった。だからこそ、少女を支えている柱の正体を知りたかった。

「ふん。知らないよ。ただ、私はこの民草と財産を守る義務がある。

それに、うちには友だちが居候しているんだ。あの子の帰る場所を守れなくて、何が友だちさ。私だって、ケジメくらいはつけなきゃいけない時があるんだよ」

大量出血しているというのに、よく饒舌に喋る。その胆力に女性は何度目かわからない敬意を抱いた。

「ここで負けを認めれば、命までは取らぬ。友とやらと、何処へなりとでも行くがいい。意地を張って、友を一人にする気か？」

「心配ないよ。あの子には、私以外にも頼りになる友だちが居る。だから、私一人が居なくなつたくらいで、どうにかなるわけもないよ」

この程度では揺さぶられないらしい。女性はその返答から少女のことをますます気に入って、口元に獰猛な笑みを浮かべた。

「降伏しなければ、友とやらを私の手ずから殺すとしたら？」

「ははっ。出来もしないのに、そんなこと言わないほうがいいよ」

それに——と、少女は言葉を繋いで言った。

「——私の友だちはスサノオよりも強い」

ピク、とその言葉に女性の眉が僅かに歪んだ。

「……吠えたな」

静かな怒りが、言霊に込められていた。曇天からは雷鳴が轟き、叩きつけられるような暴風が戦場に吹き荒れる。

「事実さ。少なくとも、神遊びの範疇であれば、白の右に出るヤツなんて居ないよ」

一瞬、ほんの一時、女性は予想もしなかった言葉が飛び出てきたことに呆けてしまった。口をぽかんと開けて、間拔けな表情を晒して。

その一時を、少女は見逃さなかった。

「っー」

膝をついていた少女は、その姿勢のまま前に乗り出し、身を捻ってその手に持った鉄輪を女性に向かって投げつけた。それは正確無比に、女性の首元に吸い込まれていく。

隙を突かれた女性は思わず息を呑んだ。ほぼ反射的に後ろに退き、足元から細い植物の蔓を生やして、それを壁にした。あと一歩及ばなかった鉄輪は、その蔓に触れた瞬間に粉となって朽ち果てた。

「ミシヤグジ！」

動かずとも、少女は言の葉を操ることが出来る。その口からは祟り神の名前が飛び出すと、女性の足元の大地に突如亀裂が入る。

「ちっ！」

舌打ちを一つ。女性は亀裂の入った大地から更に後ろに退き、手近にあった御柱を握りしめ、大地の亀裂に叩き込もうと超重量のそれを振り上げた。

——ビキ。

不意に、何かがひび割れる音が、女性の背後から聞こえた。その音を聞いた途端、女性は突如身を捻り、その場で回転して、御柱で虚空である筈の背後向けて薙ぎ払った。

「ギャッ！」

御柱を持つ手に、手応えがあった。かなりの重量のものを殴りつけたようだ。女性の視線の端では白いものが盛大に吹っ飛ぶ姿が確認できた。御柱を大地に突き刺し、改めて殴りつけた相手を見てみれば、それは八尺ほどある白い大蛇のようだった。

「……ありがとう、ミシヤグジ」

ゾク、と女性の背中に悪寒が奔った。すぐ近くから、少女の声が聞こえてきた。まさか、と思い振り向いてみれば、血に塗れて片目を瞑りながらも、おぞましい神力と崇りの力を手にためた少女の姿があった。

もはや、どう足掻いて避けることも出来なければ防御も出来ない。

「はあああっ！」

気合の咆哮が天を揺るがす。最後の大一番、その声は腹の底から自然と湧き上がって来た。震わせれば震わすほど、力が漲ってくるように思えた。

少女の手が、女性の背中に突き出された。拳ではなく、手のひらを女性の背中に叩きつけた。

力の神の拳で身体を抉られたような痛みが女性の背中で爆発した。

「がふっ！」

これには堪らず、女性は吐血し大地を血に濡らした。しかし、それ

でも足は大地から離れず、その場に踏み止まり、体を捻り、拳を構えた。寧猛に笑い、女性はとうとう少女とゼロ距離で対面した。

「——言い残すことは？」

「なら、友だちに伝言してよ。またどこかで会おうね、って」

少女が一体どのような表情でそれを言ったのかは、顔を俯けていたためわからなかった。しかし、そこには確かに覚悟が詰まっていた。

女性は、その言を深く受け止めた。

「しかと受け止めた。安らかに眠れ、土着神の頂点よ！」

——ああ、終わったんだなあ。

少女はそんなことを、迫る拳を見ながら暢気に思った。後悔なんて無かったものだから、ああすればよかった、こうすれば上手くいった、なんて脳内シミュレーションは行わない。ただ、少女はこの地に住む人々や子どもの顔を一人一人、思い出していた。

最近是谁が居たっけ？　なんて考えてみれば、真っ先に挙がるのは、白い狐の男の子だった。妖怪ではなく、ハーフでもなければ、クオーターでもない。最初は人に近いとも思ったが、今考えてみれば、その在り方は守護霊や八百万の神々の方が近いように思われる。非常に不思議な、そしてとつても純粋な男の子だ。

彼のことを思い出せば、続いて心配事も湧いてきた。変なヤツに騙されはしないだろうか、危ない目に遭ったりしないだろうか、何かの拍子に悪い妖怪に捕まってぱくつと性的に食べられたりしないだろうか。挙げていけば切りがないほど、未練がたらたらと溢れ出てくる。

『やくそく！　あしたもあそぼうね！』

ふと、昨日就寝直前に交わした彼との約束が、頭の中で蘇る。どうやら自分は、民草の住処や友だちの帰る場所だけでなく、約束すらも守れないようだ。ひどい神様も居たものだよ、などと少女は心の中で自嘲した。

楽しかった日々が、頭の中で幾度となく蘇る。

『ねっ、つよいでしょー！』

あれは確か、神遊びをして完膚なきまでに打倒されたときのこと



だったね。

『ふふん、すきのーにだってかてるよ!』

『すきのー? えっ、誰それ?』

『かみさま! おひさま、つくみー、すきのー!』

『……わあ、もしかしてスサノオのこと?』

『うん!』

あの時はほんとに驚いたよ。スサノオの名前が飛び出てくること自体が想定外。それに、友だち感覚でアマテラスやツクヨミのことも呼んでいるし。

『あつ、たちから! ねっ、またあれやって!』

すっごいお偉いの神様に平気で話しかけるし。いやまあ、うちに仕事で来ていたのに、すっかり遊びほうけて、それに満足して帰るアイツもアイツだけど。

それに、何なのさ。タヂカラオのやつ、よりにもよって説明も無しに白を空高く投げ飛ばして! そのあとタヂカラオがすっかり保護して、白も楽しそうだったからいいけど、下手したら白が死んでいたよ!

『すわこもまだまだ! これくらいなら、すきのーだってできるよ!』

あつ、何か無性に腹立ってきたよ。白も白だよ。土着神程度の私を、海の神で本物の化け物を退治したスサノオと比較しないでよ!

あいつ、神遊びだって異常なほど強いんだから!

『すわこ、ここがひみつのばしょ!』

『わあ……大妖怪だらけだ』

確か、ルーミアと、風見幽香と、二ツ岩マミゾウだっけ。秘密の場所だって案内されたから行ってみたら、大妖怪が三人も居たからびっくりしたよ。話の分かる妖怪だったからいいけど、普通なら死んでいたよ。土着神だし。

あの秘密の場所とやらには、もう二度と行きたくないよ。

『あ、やまちー!』

『ぶほっ!』

そう言えば、白のせいでとんでもない奴が此処にやってきたんだっ

た。うん、あの時は本当に驚いたよ。死んだと思っていたのに、あんな化け物が生きてるなんてまさに悪夢だったけど……まあ、白の友達だから助かったよ。侵略目的なら、私の国は今頃更地になっていたよ。うん、冗談抜きで更地になっていた。

『えっ、やまちーのことも!?!』

『ぶふお!? げほっ、げほっ』

化け物が子どもを授かろうと考えているなんて言うから、あの時は本当に咽た。苦しかったし、お茶が勿体ないし……。陰で崇ろうとか考えたけど、報復が怖くてやめちやったよ。それに、面倒事が見事に増えたし。これ、アマテラスとかに報告しなきゃダメだね。

『うん、なかよくする! ……? むこ? なにそれ』

しかもあのクソ蛇、さりげなく白にちよっかい掛けてきたし。あー、やっぱり崇っておけば良かったよ! なにさ、子どもの婿になつてくれたって? そんなことまずは子どもが産まれてから言えばいいのに!

あー、もう! 最後ののにすぐイライラするよ! これも全部白のせいだ。うん、万が一私が生きていたら、絶対に許さない。改めて考えたら、何度私を驚かせれば気が済むのさ! 毎回友だちだからって許していたけど、まとめて思い出してみたら、許容量なんてとつくに超えてるよ!

『すわこ、むこってなに?』

『……婿っていうのは、婚姻した男女のうちの男を指す言葉だよ。正確には、娘の夫として家に迎え入れる男のこと』

『うーん、わかんない』

あと、なんで一般常識に対して無知も甚だしいことこの上ないのかな。狙ったように男女の関係についてのことなんて、結婚どころか接吻すら知らなかったし。やっぱり心配だよ。悪い奴に騙されたらどうしよう……。

『白風に言えば、仲の良い男女のうちの男のこと』

『そーなの? なら、すわこのむこなんだね!』

『えっ、誰さ、それ』

そう言うと、白がすっごい悲しそうな、今にも泣きそうな顔をしたから、白自身が私の媚だつて言おうとしてるんだつてことは分かったよ。ちよつと想像したけど、まあ、悪くないよね。白つて見た目良いし、性格も好ましいよ。交流関係も豊富で、鬨が居るから力もそこそこ……あれ、白つてもしかして、とんでもない優良物件？

なんて考えて、その先まで想像して、柄にもなく顔を赤くしちやつたりして。あのクソ蛇に散々からかわれたから、腹いせにミシヤグジけしかけたけど秒殺。いや、死んでないけどね。それでもさ、ミシヤグジ、もうちよつと頑張つてよ。

あー、でもこうなることが分かっていたなら、味見くらいしておけば良かったかなあ。もう後の祭りだけど。よし、生き残ったら白をペロツといただいちゃおう。今は私の家に居るし、家にはあの大妖怪たちだつて来やしない。うん、奇跡と機会が重なるなんて、私に食べてくださいって言ってるようなものだよね。据え膳喰わぬは女の恥、つてね。

『すわこ、おつきさまにね、ともだちいっぱい、いるんだよ』  
……それにしても。

『すわこ、このおさかなおいしいー！』

どうしてこんなに、走馬燈つてやつは長いのかな……。

『すわこ、あれ、ながれぼしー！』

こんなに思い出しちゃったら……。

『すわこ、はやくはやくー！』

『白、早すぎー！……えっ、ほんとにどうして私より早いのか!?』

死ぬのが、どんどん怖くなっちゃうよ……！

『すわこ、おひさまだよー！』

『えっ!? ……つて、なんだ。アマテラスじゃなくて、本当に太陽の事かあ』

ああ、もう！やるなら、早くしてよ！ 覚悟決めたのに、目、瞑っちゃったよ。涙も何だか溢れてるし……神様として失格よ、これ。

「すわこ……」

あーうー。とうとう幻聴まで聞こえてきちゃった。こんな辱め、過

去に無いよ。こいつ、死んだら絶対に祟ってやるんだから。一年くらい食中毒で苦しめばいいのよ。

「すわこをなかせたの、ダレ?」

「……誰だ、貴様」

えっ、まさかこいつ、幻聴に反応しているの? ……いや、そんなわけないよね。

つまり、白が居るの? すぐ近くに。

「すわこ、きずだらけ。ないてる。ねー、なかせたの、オマエカ?」

あれ、でも何だか、声の調子がおかしいような……。ちよつと、何か別の意味で怖いけど、目を開けてみようかな。

そーつと、そーつと、ね。

「……如何にも。傷つけたのは、我だ」

「ふーん、そつか」

……えっ、誰?

いや、間違えた。あれは間違いなく白だよ。でも、何でいつも白い筈の髪と尻尾が、黒いの?

「ねー。ぼくがくるまえ、オマエ、すわこになにをしようとしてたの?」

「ここは戦場だ。ならば、命の遣り取り以外に何がある?」

「そうなんだ。すわこを、ころそうとシテタンダ」

それに、何で此処に来てるのさ。こいつが約束を破るとは思わないけど、戦場なんだよ? すごく危ない場所なんだよ? どうして、こんなところに来ているのさ!

「くろ」

いや、それよりも……!

「——やつちやえ」

お尻から生えてくるその穢れ……黒い九本の尻尾は、一体何なのさ!?

それに、その莫大な妖力……あのクソ蛇と同じくらいの化け物じみた力……!

こんなの、白じゃない。

「っ！ ちつ、洩矢の神、男の様子がおかしい！ 虫の良い話だが、一時休戦だ！」

ただの獣の爪だけで、神様を切り裂いて血を流させるなんて、白のやることじゃないよ。

こいつ……！

「誰なのよ!？」

もう、立っていられないなんて言っていてられないよ。

白の皮すら捨てて、巨大な黒い化け狐になったこの悪辣な妖怪を……よくわからないけど、友だちを奪った。この、憑き物風情が……！

「……共闘しよう」

私の口から、自然とそんな言葉が出てきた。さつきまで殺し合いしていた相手に向けて、都合の良い言葉が。

「随分と怒ってるねえ。もしかして、あれが友だちだったヤツかい？」

「今も、友だちだよ。……あんな黒いクソ狐は知らないけど」

「随分と口が悪くなったな。まあ、そちらの方が良いだろう。……一緒にやるよ」

さつきまで敵だったこいつだけど、味方になると途端に頼もしいとも思えた。御柱を持って戦おうとしている姿は、実に神様らしい姿だね。……正確には神霊っぽいけど。

もう神力も体力も、ほとんど残ってないし、武器なんてものはないけど。

幸い、致命傷となる傷は一個も受けてないから、まだまだ普通に動けるよ。

だから、待っててね、白。

必ず、その黒いクソ狐を倒して、仇を取るから。

「これが私の、最後の仕事かな」

大地の砂を拝借して鉄輪と同じ形のものを作って、それを武器に見立てて私は構えた。

殺したいほど醜く憎い黒い狐を睨み付けて。

神力を工面して最低限の身体能力だけ確保して。

重心を前に倒して、ついでに体も前に倒して。

私は地面を蹴って、黒い狐に向かって飛び出した。

## 第十話 洩矢諏訪子① 聡い子の話

——あーうー……。

恥ずかしい。ただただ恥ずかしい。穴があつたら入りたいくらい恥ずかしい。

狐憑きの類が白をとり殺したのかと思っていたけど、本質的には的外れもいいところだった。あの黒い狐……名前は黒っていうけど、聞いた話と実際に視たところ、白の三つ目の人格……いや、概念？ちよつと違う。正確に言うなら……うん、魂。黒は白の三つ目の魂だった。もちろん、最初の魂は白のものだし、二番目は鬨だった。

調べた結果わかったけど、白ってだいたい変わり種らしいんだよね。何が変わっているかって聞かれたら、人格が分かれているわけじゃないくて、一つの体に魂を三つも共有しているところが特別だね。

あくまで私の推測だけど、本質的に白が持っていた魂は二つだけ。それが白自身と、鬨だと思う。最初に白が白狐として生まれた時、白狐としての特徴から『見た者を幸運にする程度の能力』を持って生まれて、そこから白自身に信仰が集まったことで、神としての魂がその中で生まれた。鬨っていうのは、きつと白から読み方を少し変えただけ。それに、幸運になることで将来を拓ける人間も居るから、そのあたりも関係しているのかな。

黒は後付けの設定だね。狐の妖怪が現れてから、怖れと嫌悪を買った為白の印象にも被害が及んで、白自身が妖怪としての一面も持った。白のもともとの種族は、ここから推測すると妖獣じゃなくて、ただの白狐、あるいは聖獣の類だね。

結論だけ言うと、一匹の白狐が人間の勝手な思い込みによって後から後から設定を付け加えられた被害者、っていうことになるのかな。これだけ凄まじい風評被害はめつたにないけど、逆に言えば、これは白がそれだけの影響が自身に降り注ぐほど大量の人間と触れ合ってきたことの証拠だね。信仰の量に例えれば、多分、アマテラスと同程度。狐の印象が変わるたびに、これからも注意しなくちゃいけないよ。

まあ、こういう結論に至ったから、つまり――

「それにしても、あの時の怒りは見事なものだったねえ。山をも崩さんばかりの殺意に、親の仇を見る様なあの恐ろしい目は、まさに祟り神として相応しかった！――まあ、勘違いとあっちゃ格好もつかないけど」

「さつきから追い打ちかけないでよ!? あの時は貧血気味で頭もろくに回らなかつたんだから!」

――こうして、宴会の席で弄られるわけだよ。

しかも、よりによって敵にして協力した相手、八坂神奈子が私の隣にいるっていう最悪の位置。出席者は他にスサノオとか、アマテラスとか、タヂカラオ、スミヨシのウワツツノヲ、カムナオビ、イツノメ、オオマガツミ、オオヤマツミ……主だった面子は、私と神奈子を含めてこんな感じだね。

「ぷっ、神が貧血……」

「あつ? イツノメ、祟るよ」

「あら、怖い。しかし祟り如き、私の手に掛ければ祓うのも容易いことです。それよりも、白キユンは何処ですか?」

この巫女服の女狐……私を馬鹿にするだけに飽き足らず、白にまでちよっかい掛けるなんて、よっほど死にたいのかな。あと、キユンって何さ、キユンって。この節操無しの神崩れが……!

でも、悲しいことに相性最悪なんだよね、この巫女風情とは。基本的に祟りが効きやしない。伊達に禍を正す神をやっているわけじゃないってこと。よりによって何でこいつが、白を狙おうとするのかなあ……。

「ガハハハ! しかし、驚いたぞ。あの白の小僧が『やっちゃえ』などと言ったか! うむ、うむ。実に想われているではないか、諏訪子嬢」

「あー、うん……まあ、それは嬉しい、けど」

「良い、良い。そう照れるな。あれほど器量の良い男に想われて、そなたもさぞ嬉しかろうて。どうだスサノオ! ここは一つ、白の門出を祝ってみないか!」

「タヂカラオ、燥ぐな、鬱陶しい。それに、白のヤツとは勝負をつけね



ばならんのだ。今日来たのも、ヤツと神遊びが出来ると思ってた来たのに……まったく」

本当に、タヂカラオは竹を割ったような性格で、どうにも憎めない。こいつの辞書には悪意という言葉が無いんだよね。

そして、相変わらずスサノオはツンデレ全開だし。こいつ、此処に着くなり私に挨拶も無しに白の寝込んでいる部屋に突撃した後、大国主の薬まで使って治療までしたんだから。よくもまあ、言い方は悪いけど、たかだか一匹の狐の為に出雲まで足を運んだね。

「あらあら。素直になればいいものを。白ちゃんが心配だったのでしょうか？ だから、わざわざ出雲まで赴いて、注連縄を引き千切って大国主の首根っこを引っ掴んで……」

「あつ、こら!? そんなこと指摘してる暇があったら、さっさと結婚相手くらい探せよ!」

「それはツクヨミに言っただけなさい。あの子、ひどく行き遅れていて、姉としてとても心配なのです」

「月に引きこもったクソ兄貴のことなんか知るか!」

「こうは言っていますけど、実はこの子ったら、月に向けて週に一度は手紙を……」

「やめろバカ姉貴があああああ!」

アマテラスも、姉弟漫才にまだ飽きていないみたいだね。ほんと、太陽みたいに良い笑顔を浮かべて……白がおひさま、なんて呼び方している理由が、少しは分かる気がするよ。

でも、弟弄りはそこまでにした方が良くと思うよ。また拗ねて高天原で暴れられたら迷惑だろうし。

「儂ら、空気だの。どうして集まったのか、はてさて」

「我は同じ気配を感じてきたのだが……ううむ、いくら探しても見当たらぬ」

うん、何かごめん、オオヤマツミ。でも、近くの山にたまたま寄っていたからって、宴会にヒョイヒョイ釣られるのもどうなのさ。

あと、オオマガツミ。宴会に出席する意味あったの？ それと、報告くらい聞きなよ。探しているのって、きっと黒のことだよ。

「はて。何故我輩も呼ばれたのか。オオマガツミでも退治すればよいのか？」

うん、それは多分、白に穢れが残っていた場合祓ってもらうためだと思うよ、カムナオビ。仕事のうちだと思つてあきらめた方がよいよ。

「アマテラスの招集には逆らえない。あと、それは絶対に違う」

一番謎なのは、どうしてウワツツノヲだけ来ているのかつていうことだよ。残り二柱どうしたのよ？ まあ、私には関係ないからいいけどね。

こうして改めてみると、どうしてこんなに濃い面子ばかり揃ったんだろうねえ。いや、そりゃあ戦争の事後処理とかもあるだろうけど。それにしたつて、余計なのが引つ付きすぎなのよ。

「ガハハハ！ さて、諏訪子嬢。そろそろ話のタネも無くなつてきたところ。ここは一つ、白の小僧との馴れ初めを話してみても如何？ そのところ、とかく気になるのだ」

タヂカラオが急にそんなことを言つてきた。いや、それ言つたら私も、どうしてスサノオやアマテラスまで白と面識があるのかすごく疑問が尽きないんだけど。

「……ちなみに、タヂカラオたちはどうやって出逢つたのさ？」

「む？ そうか。話していなかつたか。まあ、大それたことは聞けな いぞ。何せ、白の小僧から勝手に現れて、こちらから食事に誘つて、あ とは気が合つたから友だちになつた、ただそれだけなのだからな！」

「うわっ、単純」

こつともあつげらんと言つるのはタヂカラオらしいけどね。でも、もうちよつと語り方つていうものがある気がするんだけどなあ……。

「私は高天原で会いました。白狐と黒狐、金狐に銀狐、仙狐、天狐、それに空狐……様々な狐を群れとして引き連れていましたね。今は尻尾が一本しかありませんが、昔は十本もありました。大ききも見事なもので、スサノオの体と同じくらいでした。ただ、それだけ成熟しているにも関わらず、白ちゃんは舌足らずで、純粹で、無垢で……とにかく愛らしかつたので、たつぷりと愛でました」

「えっ、もともと十本なの!？」

白っていつも霊力も妖力も神力もちっぽけで、尻尾も一本しかないから、てつきりあの姿だとあまり強くないと思っていただけ……え、昔そんなにとんでもない力を持っていたの？ 尾が十本って、もう神様とかと同列の力を持っている筈なんだけどなあ……。

神遊びだけはやけに強いと思っていたけど、もしかして、もともと強くて資質も高かったのかな。

「はい。力も相当なもので、その霊力は……そう言えば、巧妙に隠していましたね。推し量ることは出来なかったのですが、少なくとも、総合的な危険度は八岐大蛇と同等以上でしょう」

「補足するなら、八岐大蛇は基本的にバカだ。酒をやったらヒョイヒョイ飲んで、酔っ払って、潰れる。その間に切り刻めばいいだけだから、力を持っているようで案外、危険度は低い」

スサノオがそんなことを補足するように言ってくる。

いや、そんなフオーロー要らないよ。ますます白の凄さとか実力とかが分かりにくくなっちゃうよ。まあ、それでも最低値が八岐大蛇の時点で、とんでもないことは分かるけど。

……うん。いや、八岐大蛇って。

「ちよつと冗談にしてはキツイよ?」

あの白が八岐大蛇と同程度の凄い狐?

うん、想像出来ないよね。どう見積もっても白単体ならちよつと長生きした狐程度だよ。神様に及ぶなんて、そんなことあるはずないよ。

「事実です。これは私見ですが、力で物事を見る場合、鬮と黒はとっても可愛いものですよ? 底が知れていますから」

……アマテラス、とっても涼しい顔して言っているけど、さ。

私からしてみれば、アマテラスもスサノオも、規格外なのよ? そんな規格外な存在からしたら、私や神奈子だって底知れた存在になること、理解して言っているのかな。

笑顔。とつてもいい笑顔で、アマテラスは言った。

それがただただ、私には恐ろしかった。理由は分からないけど、恐

ろしいとだけはしつかりと感じた。体中に鳥肌が立つくらいに、恐ろしかった。

「あ、でも勘違いしないでくださいね。白ちゃんは、あの純粹無垢な姿が素ですから」

「純粹無垢が一概に恐怖と無関係かと言えば、話は別だ。特に、友だちや仲間、部下、知り合い、周囲の繋がりと結果を考えず行動すれば、内輪からは頼りにされるが、敵にしてみれば怪物そのものに変質する。つまり、そういうことだ」

スサノオがまた、要らない補足を付け加えてきた。聞きたくないことを、現実を、スサノオが必ず付け加えて、私に聞かせてくる。

「……じゃあ、なんで白は高天原から降りて来たのさ？」

多分、これが確信を突く答えに繋がっていると思う。白が、今までどんな環境に置かれていたか、この質問の答えで分かる筈。

「白ちゃん曰く、『たびにでて、いろんなものをみてくる！』って、言っていました」

「仲間の狐はどうしたのさ？」

「今は稲荷大明神のところに帰属しています。白ちゃん自身は、きつと高天原に戻る気は無いでしょう。常識に疎いところもありますが、それ以上にあの子は、聡い子ですから」

「補足するなら、一見すれば、稲荷大明神の方が力は強く見えるだろう。……しかし、狐とはどれも聡い者ばかりだ。バカから群れを守った時から、行く末は決まっていたのだ」

私は無意識のうちに立ち上がって、大広間の出口に向かって走っていた。でも、部屋から出る前に、スサノオが私の前に立ちはだかった。「座れ。まだ、貴様から話を聞いてないだろう」

「退いて。白の、白の傍に居たいのよ」

私がスサノオの顔を見上げて言うと、スサノオはギロリ、つて魂心臓を貫くような鋭い視線で私を見下ろしてきた。その時、私の足は思わず後ろに退いた。

「要らぬ。貴様が行ったところで、何が変わる？」

「変わるよ！ 少なくとも、もつと白に寄り添える！」

「阿呆。誰が、いつ、寄り添ってくれと言った？ 白のヤツが言ったか？ 貴様に頼んだか？ そんなわけあるか。仮に、貴様が白に寄り添って何かが変わるとしよう。しかし、それは貴様の望む変化ではないと断言する。行けば、白は貴様の前に二度と現れぬぞ」

「どうして、そんなことが言えるのよ!?!」

私は声を荒げてスサノオの言葉に噛み付いた。だけど、スサノオはまるで歯牙にもかけない様子で、さも当然のように鼻を鳴らして、私を見下しながら言ってきた。

「哀れみ、同情、慈悲……貴様の行動原理は、大体そんなところか」

また一步、私はスサノオから退いてしまった。こちらを見透かしたような瞳が、感情の色を失った神の瞳が、私の心の隙間を掻い潜って畏怖の念を触発した。

「無垢、無邪気。だからこそ聡いのだ。他者の感情の動きに」

あつ、と私の口から声が出た。

スサノオに気づかされた。今の私の行動は、白が最も嫌う行動だ。底抜けに優しい白のことだから、白はそんな感情を持った私に対して、きつとこんなことを思っちゃう。

「自分が居なければ、これ以上誰も、悲しまない」

ドクン、と私の心臓が凶星を突かれたように飛び跳ねた。

「自分が居なければ、これ以上誰も、怖がらない」

ドクンドクン、私の鼓動が早鐘を打つ。

「自分が居なければ、これ以上誰も、傷付かない」

もう、耐えられなかった。

スサノオの言葉に負けて、私は自分の席に戻った。スサノオは自分、そんな私を見て、何食わぬ顔で席に着いたと思う。

「幼子とは、総じて厄介なものだ。聡いが、考えはとても幼い。特に感情の機敏には聡い。聡い故に、自己で解決できるならば、すぐに行動してしまう」

悔しいけど、その通りだと思う。きつと、白なら私が悲しんでいて、それが自分のせいだと気づいて、何も告げずにどっかに行っちゃおうと思う。

それくらい、白は真つ直ぐすぎるから。

「これ、スサノオ。場の空気を湿らせてどうする？ 盛り上がりには欠けるではないか。諏訪子嬢も、気づいたのであればそれで良いではないか。幸い、過ちは犯さなかった。ならば、それを喜びながら、明るく楽しく、白の小僧との馴れ初めを話してみよ。ここで考え込んで、得られるものは少ない。それどころか、その気持ちを引き摺って、白の小僧に悟られてしまえば、今度こそ、過ちを犯すことになる。だからこそ、今ここで明るい話をするのだ」

確かに、タヂカラオの言う通りだよ。こんな風に落ち込んでいるところを白に見られたら、きつと、今度こそ白は私の前から居なくなっちゃう。

なら、ここで気分を入れ替えるために白との出会いの話をする方が、何倍も良いわ！

「そうだね。うん。じゃあ、白との出会いから今に至るまで、とことん話し尽しちゃうよ！」

おおーっ！ と、神々が楽しそうに杯を掲げて声を上げた。本当に、神様っていう奴は、宴会や酒の肴になる面白い話が好きだね。私もそうだけど。

さて、じゃあ私の話をしようかな。

——あれは、雪の降る、寒い、寒い日の事だった。

## 第十一話 洩矢諏訪子② 無邪気な子の話

その日は雪が降っていた。寒空の下で雪はしんしんと降っていて、明日にはきつと積もるだろうな、つてことが簡単に予想できた。竈の火を点けたつて背中までは温まらないから、この日は外でかまくらを作つて暖を取つていた。

「寒いなあ……」

人里の方は、きつともつと大変なんだろうな、つて暢気なことを考えながら、かまくらの中でぼーつとしていた。かまくらの中は温かかったけど、いつものように何か欠けたように、そこだけは寒かった。

この雪の中だどうせ誰も来ないし、昼寝でもしようかな、なんて思つていた。だから、能力を使つて寝床を作つて、そこに寝転がつて、かまくらの入り口から見える外の雪景色を目的もなく見つめた。

「——ん！」

心地よくまどろんでいた時に、急にその声が聞こえて来た。こんな日にまさか参拝客が来たの、何てその時は焦つて外を見てみれば、入り口から見える景色からは誰も確認出来なかった。

もしかして聞き間違いかな、あるいは動物の声か、自然の奏でた洒落た音かな、なんて考え直してもう一度寝ようとした時——

「ううー、たてももの。だれか、いるのかな……」

確かに、そんな声が聞こえた。それも、入り口と反対側のすぐ近く。寝台とかまくらの壁を挟んだあたりに、今度こそ誰かが居ることを確信した。

「ねんねん おやまの

しろおえぬ

いっぴき ほえれや

みなほえる」

どこかで聞いたことのある歌が、すぐ耳元で聞こえてきた。声の調子は子どものように元気で高かった。でも最初は、男の子かそれとも女の子か分からなかった。

「たったと きつねが

はしりさる

おろちの はいずる

おとがする

きつねが とびでて

おいかえす

じごうじとくの おうほうで

きつねは いっぴき

ふゆすごす

ひやつこの きつねび

いまひとつ

はるには しずくが

きらりとおちた」

今度は聞いたことの無い歌だった。その声はさつきよりもちよつと高く、時折詰まりながら、歌っていた。

——今考えてみたら、すごく、悲しい歌だよ。そういう意味だって、あの時は気が付かなかった。……って、しんみりしちゃいけなかったね。ごめんって。

せつかく体が温まったのに、かまくらから出て声のした方を見てみた。すると、そこには藍色と白色を基調とした着物を身に着けた、雪景色と見紛うほど綺麗な白髪と狐の耳と尻尾を携えた、男の子が居た。かまくらを背にして、いじけた様に座り込んで、両手で包み込むように小さな火を出して、暖を取っていた。

「きつねび くらべて

さわいでた

いっしよに ともして

あそんでた

たまもの きつねび

おおきくて

いっぴき きつねび

おおきすぎ



さいごは みんなで  
おつきくともして  
いっぴき みんなで  
はりあつた  
とつても とつても  
たのしくて  
おもいで みんな  
ひのなかに」

また、聞いたことの無い歌だった。人型の狐ってことは、それなりに生きてきた狐だから、きつと狐の中で受け継がれてきた歌なんだろうな、ってその時は思っていた。

狐の男の子はひとりぼっちだった。ちようどひとりぼっちがもう一人居たから、その時はちようど良くて、その子に声を掛けてみた。「やつほー。寒い中、こんなところに一人で、どうしたのよ?」「うにゅ?」

手の中にある火を大切そうにしながら、男の子はこつちに向いた。顔を見てみると、なかなか整った顔立ちで、そこらの神様よりよっぽど綺麗で魅力に溢れていた。まあ、長生きした狐の中でも特に美形な子なんだろうな、なんて思いながら、胸を張って自己紹介した。

「私は洩矢諏訪子。この周辺を治める神様よ!」

「かみさま? すわこ、かみさまなんだ」

「そうよ。ふふん、これでも結構偉いのよ!」

「そーなんだ!」

キラキラとした瞳を向けて、興味を前面に押し出した狐の子の姿は、長生きしている筈なのに本当の子どもみたいで、とつても微笑ましかった。

「貴方は?」

「ん、はく!」

「はく? ……多分だけど、白、って書いて白かな?」

「うん! よろしく、すわこ!」

「こちらこそ、よろしく、白」

短い自己紹介を終えて、そこからは寒空の下で、何処から来た？

とか、どんな物が好き？ とか。体はとても寒かったけれど、欠けていた何かが埋まって、そこだけはとても温かかった。

「すわこ、これってなーに？」

ふと、白はかまくらを指差してそんなことを聞いてきた。結構便利なのに、意外と知られていないものなんだなあ、なんて思いながら、簡単に説明してあげた。

「これはかまくらだよ。雪をこうやって家のような形にして、その中で温まるためのものだよ。反対側に入り口があるけど、よかつたら中に入ってみる？」

「えっ、いいの!？」

その時の白の食いつきぶりは、本当に凄かった。顔をぐつと、鼻と鼻がくつつきそうなほど近づけて、キラキラと期待の眼差しで瞳を見つめてくる。

「う、うん。いいよ。ほら、こっち、こっち」

ちよつと言葉が詰まったけど、白をかまくらの入り口まで案内して、そこから中に入ってみると、白がまた「すごい！」なんて言っってはしゃぎだした。

「ほんとうにあつたかい！ ゆきのなかなのに！」

「ふふっ、そうだよ。ほら、寝床もあるから、ここで眠ることだってできる！」

自慢げに言いながら、白の分まで能力を使って寝床を作っただけだ。そうしたら、白は諸手を挙げて喜んでくれて、さっそく寝台に仰向けになった。

「わあ……！ すわこ、これもあたたかい！」

「当然。何せ、私の能力だからね！ それくらい操る程度造作も無いのよ！」

とても心地が良かった。気軽に話せる相手が身近に居るだけで、こんなに心が軽くなることに、その時初めて気が付いた。

それから半刻も話さないうちに、白は話疲れたのか寝てしまった。でも、それを不快に思うことは無かった。あるのはただ、寒空の下で

も話し相手が居てくれることに対する、満足感だった。  
その日の私は、そんな白を見習って寝ることにした。

翌日。その日は雪が膝辺りまで積もっていて、神社の屋根には建物が潰れるんじゃないかってくらい雪が乗っかっていた。神様だって、自分の神社を守るために雪掻きくらいはする。いつもは一人でやっていた雪掻きも、その日は早朝から、昨日知り合ったばかりの白と共にお喋りをしながら作業をすることになった。共同作業っていうものが新鮮だった。

「白。これが終わって朝食を食べ終えたら、何かやりたいことはある？」

「んー……あつ、かみあそび！」

「おつ、いいね。久しぶりに、私の弾札が唸っちゃうよ！」

「ふふん、ぜつたいまけないよ！ つよいから！」

「私だって負けないよ。何と言ったって、神様の十八番だからね！」

——まあ、この時はまだ知らなかったよ。白の弾幕が、あんなに可愛さの欠片も無くえげつないなんて。

白と遊びの約束を取り付けて、そして雪掻きが終われば、神様自ら食事を作った。白は朝ごはんを美味しそうに、見ているこっちの口の中に旨味が広がる様な錯覚を起こすほど嬉しそうに、食事を頬張っていた。いつもは一人空虚な広間にも、この日から正面で友だちが飲み食いをするようになった。

食べ終わって、片付けが終われば、ようやく運動だ。あの口ぶりから白はきつと神遊びをしたことがあるから、まずは白の実力を見て難易度を調節しなきゃ、なんて思って、その時は先手を譲った。

「白、先に弾幕撃ってもいいよ」

「うんー！」

——うん、先手を譲っちゃったよ。結果？ 分かりきっていること

聞かないですよ。

「おもいで思出へ百ひ狐やつ夜こ行や行こうく」

「えっ——」

目の前に現れたのは、ただただ密度の濃い、まさに弾幕だったよ。密度が濃いだけってわけでもなくて、弾幕一つ一つが無秩序に、縦横無尽に動き回って向かってくるから、軌道も読みづらい。それだけに飽き足らず、横からは狐火のような小さな火が、ゆらゆらとこれまた無秩序に動きながら迫ってくるものだから、白を撃墜させるための弾幕に割く神経も惜しんで避けることに徹したよ。

だけど、それがいけなかった。当然、そのままの弾幕なら避け切つて時間耐久することも出来たけど、何せこの弾幕、一分経った瞬間に『発狂』する。『発狂』すればもう遅いね。狐を表わす正面の弾幕は津波の如く迫ってきて、狐火を表わす横の弾幕は、相手を逃がさないとばかりに、まるで山火事に遭った時の如く火の壁が囲いを形成して動きを制限してきた。その上での狐の津波を避けるなんて無茶苦茶よ。たった一枚の弾札を前にして、白に負けたよ！

「あれ、おわり?」

拍子抜けしたように、白が首を傾げて言ってきた。こんな『発狂』付の可愛げも何もない弾札を使ってくるなんて、微塵も思っていないかった。それも、初手にこの切り札のような弾札。人は見かけによらないなんて言うけれど、狐はもつとあくどいわよ。

「んー、すわこ。じかんかけちやだめ。じかんかけると、ぜんぶあんなつちやうよ?」

「えっ、白の弾札って全部『発狂』付?!」  
「うん」

子どもだからだろうか。それとも幼いからかな。どつちにしたって、白は容赦というものを知らない。弾札全てに『発狂』が付いているなんて、それが有効だと分かっているも神様だってそこまでやらない。『発狂』しなければ勝てない相手なんて、神遊びにおいて神側は想定してないわよ。最後の弾札に、申し訳程度に付けるのが『発狂』だっていうのは、少なくとも土着神の共通の認識よ。

だから、人間側もお手本がないから、そんな『発狂』付の弾札を作ることも無い。頭のオカシイ武神や上位の神々は一部、『発狂』付の弾札を複数枚持っているけれど、そんな存在こそ稀よ。というか例外

よ、例外。

——いや、スサノオ、貴方のことを言っているんだけど。……話しを続けるよ。

全ての弾札に発狂が付いている白は、文字通りオカシイ。頭がおかしいとか、そう言うことじゃなくて、純粹に勝利への欲求の度合いがオカシイ。

「もういつかい、やる?」

「っ、もちろん! 負けっぱなしなんて嫌だからね!」

「こんどはすわこから、ね」

「当然!」

白を相手にすることもあって、この時は最初から発狂付の最高難易度の弾札を使った。いくら弾札を作るのが上手いといっても、それと避けられるかどうか、つまり本人の運動能力の有無は比例しないからね。だからこそ、意趣返しに弾札の発狂で圧倒してやろう、なんておとなげなく考えていた。

「ミシヤグジ!」

崇り神の名前を呼べば、弾札が発動した。花びら(もしくは米粒)のような弾が交差しながら全方位にばら撒かれる弾幕よ。残り20秒から『発狂』する弾札ね。ずっと同じように交差しながら迫る弾幕は、同じことを繰り返し行わせることを強制し、その間でミスを狙う意地の悪い特性を持っているわ。

「けん、けん、ぱっ!」

弾幕が目の前まで迫ると、白はそんなことを呟きながら、リズムに乗って避け始めた。

「けん、けん、ぱっ!」

一定の調子で言いながら、弾の間を避ける。けん、で横に、もう一度、けん、で正面に、ぱっ、で後ろに下がる。これを繰り返し、あるいはしばしば移動する方向を変えながら、しかし常に一定の調子と移動距離を保ち続ける。

「……………きた!」

一度も白は迎撃をしてこなかった。そして遂に、残り二十秒の『発

狂』の時間がやってきた。正面は交差弾に埋め尽くされ、自分でも見ているだけでも目がチカチカしてしまふ。

「けんぱっ、けんぱっ、けんけんぱっ！」

白はそれでも尚、一定のリズムを口ずさみながら避け続けた。右に、左に、そして上下に調整し、今度は左右に調整を加える。白がそんなことをしているうちに、あっという間に制限時間は過ぎていつて……。

「はい、ごうりやく！」

そして遂に、弾札を攻略されてしまった。『発狂』する弾札を時間耐久で、それも初見で攻略されてしまった。

「ねっ、つよいでしょ！」

「……………」

攻略した張本人はえへん、と自慢するように胸を張っていた。でも、初見でそれも時間耐久されてしまった側としては、見かけによらない幼い狐の男の子、白を見てただ呆然とするしかなかった。

「かみさまになら、なんどもかってきたからね！」

「へ、へえ……………」

ほとんど吐息のような相槌が口から漏れ出た。そんな反応でさえ嬉しいのか、白はますます誇らしそうに、衝撃の言葉を口にした。

「ふふん、すさのーにだってかてるよ！」

「すさのー？ えっ、誰それ？」

そんな変な名前のヤツが居るのか、なんて的外れなことを考えて、口からついつい疑問が飛び出ちやったよ。白は一度領いてから、補足するように言った。

「かみさまー！ おひさま、つくみー、すさのー！」

（神様で、おひさま……………つまり太陽。つくみー？ それにすさのー？

えっ、誰よそれ。えっと、すさのー、すさのー、すさのお……………すさのお……………スサノオ!?)

少し考えれば、すぐに答えに辿り着いてしまった。辿り着いた答えのせいで、私はついつい頬を引きつらせながら、口が開いた。

「……………わあ、もしかしてスサノオのこと？」

「うん！」

——この時ばかりは、嘘であつてほしかつたつて思つたよ。というか、スサノオもどうして白に負けているのさ!?

(えっと、おひさまが太陽つてことは、スサノオから考えて、姉のアマテラス？　そして、つくみーはツクヨミつてこと？　……いや、まさか)

そんなことある筈がない、なんて考えて首を振つても、この時ばかりは混乱が収まることは無かつた。ただ、そんな化け物を相手にしてたんだなあ、などと漠然とした空虚な実感が湧き上がると、もはや中身の無い虚ろな笑いしか出てこなかつた。

——この時の経験から、私は「神遊び」を白と積極的にしようとは思わなくなつたわ。ちよつと子どももつぽいけど、鬼ごつことか、缶蹴りとかをして遊ぶことになつたよ。白も体を動かせれば良かったんだらうね。とつても喜んで、遊んでいた。

大体こんな日常をずっと過ごしながら、月日は過ぎ去り、季節は春になつた。

第十二話 洩矢諏訪子③ 子どもと保護者と危ない奴ら

雪解けはとつくに終わり、既に木々は桜のつぼみを付けている。ちらほらと、花開いたつぼみもあれば、まだつぼみのままの桜もある。花は咲き誇り、散る姿はほとんど見られない。その代わり、神社の周りには桜によって程良く色づいた景観が映し出されていた。満開ではないが、たまには三分咲き程度の木々を見るのも一興というものだ。

春の陽光に照らされながら、二人は縁側に居た。だらーつ、と寝転びながら、日向ぼつこの真っ最中だった。

そんな中、不意に縁側に寝転ぶ一人、白が提案をしてきた。隠れ家に友だちが居るけど、一緒に来てみないか、と。

「……友だち?」

「うんっ! るーみあ、ゆうか、まみぞう、みんなとなかよし!」

当然ながら聞いたことの無い名前だった。けれども、人間の名前にしては珍しい。もしかして同じ狐の友だちかな、などと思いつながら、縁側のもう一人は起き上がって答えた。

「それじゃあ、今すぐ行こっか。案内よろしく」

「うん!・びやく、おねがい!」

——あの時は本当に驚いたよ。だって、白が九尾の狐神になったんだから。本当にあの時はポカーンっていう風に呆然としちゃって。關の力も相当のものだから、白の印象が一気に変わったよ。

白は關という、大きな九尾の狐に変わって大地を一度鳴らした。すると、目の前の空間に裂け目が出来た。關は一度縁側の方を見た後、すぐに裂け目に向き直ってその中に入って行った。

——あの時は呆然としたけど、すぐに白を追わなくちゃ、って思っ  
て、裂け目の中に入って行つたよ。あれが底知れたなんて、私にはとても思えないわ。



そして空間の裂け目を真っ直ぐ抜けた先に見えたものは――

「あのクソ野郎オ！ また白の服脱ぎ散らかしやがって！」

ただの闇の世界であった。目の前は瞼を開けているのに真っ暗で、何も見えない。しかし、そんな世界が目の前に広がっているというのに、敵意や殺意というものは周囲からまるで感じられなかった。女性が怒声を発しているが、少なくとも自分に矛先が向いているわけではなかった。

「あつ、またびやく！ うゝ、こんどおしおきする！」

今度は白の声が聞こえてきた。何処となく焦っているような、ちよつと怒っているような雰囲気だ。その言葉の後には、すぐに衣擦れの音が聞こえてきた。しかし、それもすぐに収まり、「もうだいいじよーぶ！」という白の声と共に、目の前の闇が跡形もなく消えた。「……えつ、誰？」

すると、目の前には金髪と白黒の洋服が特徴的な女性が立っていた。そのすぐ傍には白が両手を広げて、服をお披露目するように立っていた。

「いや、そりや私の台詞だよ。……まあ、白が連れて来たってことは、友だちだろう？」

「うん。……貴方も？」

「そう。私はルーミア。分かっていると思うけど、妖怪だよ」

「そっか。私は洩矢諏訪子。分かっていると思うけど、神様よ」

「……ああ、諏訪の神様か。また随分と遠くから。ここは大和の国にある、白と私たちの隠れ家だよ。くれぐれも、密告なんてしないでくれよ？ 神軍になんて攻められちゃ堪えないからね」

「そんなことするつもりは初めから無いよ。それよりも……」

そこで一度、言葉を濁した。金髪の女性、ルーミアの後ろに居る二名が、余りにも怪し過ぎた。一人は愉悦の笑みを浮かべる緑色の髪の女性で、もう一人はカラカラと面白そうに笑いながら昼間から酒を飲む茶髪の女性だ。ルーミアの後ろに控えながら、我関せずの構えを貫く姿が、妙に緊張感を刺激する。

「ああ、後ろの二人？ 緑が風見幽香。茶色が二ツ岩マミゾウ。どつ

ちも妖怪だよ。隙あれば白を食べようとする、ね」

「あら、人聞きの悪い。ただちよつと、物事を教えるだけよ」

「儂は気分次第といったところじゃ」

警戒度がより上向きに傾いた。油断ならない相手だと、ルーミアの後ろの二人を鋭く視線で射抜いた。

「……退治した方が良いのかしら？」

「あら、やる気？ この土地で、十全に力を発揮出来るのかしら？」

「それでも私は神様。土着神でも、貴方くらいに妖怪の退治、土地柄関係なく出来るわ」

「そう」

直後、緑こと風見幽香は手に持っていた日傘の先端を向けると、そのまま特大の光が真つ直ぐに奔る。ほとんど溜めも無く撃ってきたが、ルーミアは白を抱えてそれを無事に避けた。

——いやあ、あの時は危なかったよ。あんなに素早く魔力砲撃するなんて予想外だったし。まあ、何とか紙一重で横に避けたわ。

「あら、意外と素早いよね」

「っ、いきなり白も巻き込む形で砲撃するなんて馬鹿なの!？」

「白なら平気よ。少なくとも、あの妖怪が付いている間は安心ね」

「だからって、いきなりぶつ放すなよ！ あんた、もう少し自重してくれ！」

「嫌よ。面白くないわ」

「言うに事欠いてそれか！ 白が怪我をしたらどうするんだ!？」

「その時は、私がたつぷり、ねつとり、手厚い看病をするわ」

風見幽香はそんなことを言つて、唇を舌で舐めて濡らした。濡らした唇が妙な光沢を得たせいで、その姿が背中に寒気が奔るほど艶めかしく見える。

——その時、私は悟つたのよ。こいつ、隙があれば白を性的にペロツと食べようとしている、ってね。だから、ルーミアの方に目配せして、一緒に倒そうって提案したわ。

「……よし。私も参戦する。流石に白に怪我させると聞いたら、黙つちやおけない」

「あら、なら私は降りるわ。蹂躪されるのは嫌いなもの」

ルーミアの一声で、風見幽香はあっさり勝負の舞台から降りた。意外にも、相手は素直に戦いを放棄した。二人相手でも戦うと思われほど好戦的かと思えば、引き際はしつかりと見極めているらしい。「ちっ。今度やったら本気で制裁するよ」

「あら、貴方一人なら大歓迎よ。貴方を倒せば、白は私の自由に出来るもの」

「……やっぱ、ここで退治するか」

「冗談よ。半分くらい」

「私も退治するに賛成。ルーミアだっけ。あの緑色、ヤルよ」

「ああ、そうしよう」

じり、と土着神の頂点とルーミアが風見幽香に近づいた。しかし、風見幽香は驚くほど穏やかな笑みを浮かべて、白の方を見て言った。

「血の気が多いわね。白、こっちで花の世話でもしましょう」

「うんー」

とてとて、とルーミアの近くに居た白が、風見幽香のたった一言に釣られてしまった。風見幽香は白の手を握ると、対峙していた二人に背を向けて歩き始めた。

「……………」

ニヤリ、と風見幽香は勝負しようとした二人に対して、嘲るような、馬鹿にするような笑みを浮かべて振り返った。しかし、それも一瞬で、また前を向いて歩きだすものだから、戦おうとしていた二人は立ち尽くすことしか出来なかった。

「——しまった！ 白とアイツが二人きりに!？」

ふと、我に返ったルーミアは泡を食って風見幽香を追いかけた。

——私もその一言に今の状況を気づかされて、本当に急いで追い掛けたよ。結果的に、あの風見幽香ってやつの一人居ちだったね。まあ、その後は特に大事も無く、マミゾウとやらも含めて、そいつの花畑の手入れをやったよ。意外と楽しかったね、神と妖怪の交流ってやつも。

——そしてこれは、最近の事。神奈子が送ってきた文を見た後のこと。

もう戦争は明日だって言うのに、夕焼けの空の下で二人は遊んでいた。狐の耳と尻尾をつけた影が逃げて、帽子を被った影が追う。じゃれ合いみたいな鬼ごっこだったけど、それがとても心地よくて、楽しかった。

制限時間は日が沈むまで。

——ああ、もう日が沈んじゃう。白と遊ぶのも、これで最後になるかもしれない。なんて、柄にもなく感傷に浸っちゃって。鬼はずっと私のまま日は沈んで、日の沈んだ場所を名残惜しく見つめていた。

「すわこ……?」

「あつ、ううん。何でもないよ、白」

——そんなこと言って平気なフリしちゃって、私は夕飯の用意をして、白とそれを一緒に食べて、一緒の部屋で寝て。

「すわこ」

——あの日、私の決心は固まった。絶対に、この土地を守り通すんだ、ってね。

「やくそく! あしたもあそぼうね!」

——でも、結局遊べなかったから、約束も土地も守れなかった。それはちよつと悲しいけど、今は白が無事で良かったことで一杯かな。

——これが、私と白の馴れ初めと、先日までの出来事。所々端折ったけど、酒の肴にはなったでしょ?



宴会の席は今も賑やかだ。諏訪子が話し終わってから、誰もが遠慮無用に様々な神と話をしている。

終わりをみせる気配はなく、終わらせるためには神々が酔い潰れな

ければならぬだろう。

ふと、雨音が聞こえて来た。最初は小雨程度かと思えば、次の瞬間には豪雨となって神社を殴りつける。諏訪子はその雨に露骨に嫌な顔をしながら、天井を睨み付けた。同様に、他の神々も上を向いた。「あら、珍しい方ですね」

アマテラスが呟いた。その顔は微笑みながらも、穏やかなものではなかった。いつの間にか髪を解いて角髪みずらに束ねて、何処から取り出したのか矢筒を背負い弓と剣を手にとっていた。

スサノオの様子も変わった。その手に十拳剣を握り、全身の毛を逆立たせて顔を怒りに染め上げていた。

諏訪子は天を睨み付けたまま、仏頂面を顔に張り付けている。

神奈子は「面倒だねえ」と頭を掻きながらも、酒を飲んで宴会を満喫している。

タヂカラオは特に何をするでもなく、マイペースに徳利を仰いでいる。

同様に、これら以外の神々も宴会を楽しんでいる。

「……………」

雨音が少しずつ止んでいく。豪雨から大雨に、大雨から普通の雨に、そして小雨に、最後には音が無くなり、外を見れば月の光が差していた。

「方向は大和の方ですね。申し訳ありませんが、私は一度、大和の国に帰ります。……スサノオ、貴方は此処に残りなさい」

「わかった。……白の様子を見てくる。お前たちはいつも通り騒いでおけ」

貴き二柱は短く言うと、アマテラスはそのまま宴会会場から姿を消した。スサノオは白の居る部屋に足早に向かっていた。

「私も行くよ」

「……好きにしろ」

諏訪子も宴会会場を抜け出して、スサノオについていく。スサノオは早足のつもりだが、諏訪子にとっては走らなければ追いつけないほどの速さだ。

「白、開けるぞ」

障子を開けると、暗い部屋の中に月の光が差し込んだ。畳の敷かれた見事な和室だ。中央には寝床が用意されているが、そこには誰も居なかった。

「……ちっ。挑発などに乗らなければ良いものを」

苛立ったように、また足早にスサノオが来た道を逆走する。スサノオはあっさりとした反応だったが、諏訪子はこの不意打ちに、ただ頭が混乱していた。

「白……？ あれ、何処いったの？」

「宴会の場に戻れ。いずれ戻ってくる」

スサノオは律儀に諏訪子に言葉を返した。

しかし、諏訪子は凄まじい混乱の渦に突き落とされていた。そのせいで、言葉を返された直後に、意味も無くスサノオの言葉に噛み付いた。

「どうなっているのよ！ 知っているの！ 白が何処に居るか、知っているの!?!」

「……大方、妖怪の友の所にでも行ったのだろう。故に、貴様の出番は無い。おとなしく、宴会の場に戻れ」

「白ッ！」

諏訪子は神社を飛び出して、アマテラスと同じ方角に走り去った。彼女の頭の中では、白が何者かに誘導されたと考えていた。それを、アマテラスが一人で追っていったのだと。

突然の大雨に、それがアマテラスの赴く場所と同じ方角に去っていく。これだけしか状況証拠は無いが、逆にこれだけしかないからこそ、諏訪子は安直にその答えに一切の疑いを持たず、すぐさま行動した。

「……警告はしたぞ。それが、貴様の選んだ未来だ」

諏訪子が去った後、スサノオはふん、と鼻を鳴らして宴会の場に戻る。戻れば後のことは気にしないとばかりに、酔い潰れるまで酒を浴びるように飲んだという。

運命は今、水面に波紋を広げて決定した。  
だからこそ、この言葉が相応しいだろう。

「ごめんね。」

——あのときあわなければ、きっと……。

そうして歴史は、いつも白紙に戻る。

ただ真つ白な、“白”色にリセットされる。

それでも歴史はまた、同じ物語を刻み続けるのだ。

## 第十三話　それが長の姿

關の力は非常に便利だ。『ひらく程度の能力』はどのような場所にも制限なく移動することが出来る。

それ故に、相手の目的地さえ把握していれば先回りも容易である。「びやく、ありがとう」

そこは大和の国に作られた隠れ家だ。主にルーミア、風見幽香、二ツ岩マミゾウが拠点としている場所で、白自身が訪れることは週に一度くらいしかない。

山奥に建てたせいにか、周辺はすっかり真つ暗だ。立ち並ぶ木々のせいで月の光さえ差し込まない。

そんな中、白は急いで一番背の高い木に登る。早く、早くと自分を急かしながら、費やした時間はおよそ五分。木のとっぺんから見えたのは、星の煌めく夜空と、団子のように丸い満月、光を拒絶する表面だけ照らされた森の木々、そして遠方より雨雲を引き連れてやってくる大きな空飛ぶ大蛇のように細長い影だ。

「ちから、ぜんぶもらうね」

一声かけて、白はその身に力を溜め込んだ。溜め込んだ力はその尻尾となり、一本、一本、また一本と霊力が彼の尾を創り上げていく。霊力は唸りを上げる。尻尾は左右に荒ぶる。大地は揺れ動き、空は振動して大気が渦を巻く。足場になっている大木は異音を発しながらもその機能を全うする。

足場には両足両手を用いて手をついている。その姿はさながら、野生の獣の如し。

「みんな、うまくにげてね」

強すぎる力は、必ず怖れを生み出す。それを知っている男の子は、この土地に住む全てを追い出すために、自らが科した戒めを解き放つ

「――ぼくは、おや」

自らが頂点に君臨する存在であることを理解している男の子は、自



分が弱者を強者から守る存在であると定義した。それは遙か昔に決めた事であり、友だち、仲間、部下、神々、あらゆるものを見てきた経験に基づいた、彼なりの精一杯の答えであった。

——力を隠していたのはなぜか？

決まっている。彼が全ての力を見せればみんなが恐怖する。だから、誰かを怖がらせたくないと思って、必要な場面以外では力を見せないことを決めていた。

——關と黒とは何か？

友だちである。例外なく、彼は友達と認識している。ただ、ちよつと身体の中で同居している存在ともだちに過ぎない。それ以上でも、それ以下でもない。

——その力は誰のものか？

すべて彼のものである。少しの間、友だちにその力を貸し与えていたに過ぎない。

ふと、雨雲の下に赤色の光が灯った。

同時に、白もまたその十本の尻尾を天に突き上げ、その先に靈力を集中させる。出来るだけ一杯に、しかし小さく、一杯に、圧縮、圧縮、圧縮。膨大な靈力をただ一つの球体にまとめ上げる。穢れを知らぬ白い輝きが球体からは溢れ出る。まるで神の啓示した救いの光の如く神々しい。この光の前には、月の光でさえ霞んでしまう。

「——だからって、てかげんしない」

直後、尻尾から球体が発射された。今宵の満月のように丸いそれは、まさに光速を以て、一直線に雨雲の光に向かっていった。

——ッ！

そして、世界から音が消えた。向こうの光からは球体ではなく、線が射出されていた。その勢いは烈火よりも恐ろしく、太陽の爆発にも比肩する。直線状にある全てを燃やし尽くさんと、激突した球体を貫こうと周囲一帯を震動させる。

激突した球体と極光。お互いがしのぎを削り合い、意地を張り、何者にも負けない力を以て相手を打ち負かそうとするが、両者衰えを全く見せず。

——その結果。

押し合いを続けて停滞したエネルギーは引き分けを認める様に、その場で爆発し、疑似的な白と赤の太陽を創り上げた。

「もうっ！」

いつもこうだ、と苛立たし気に白は息を吐き捨て、足場にしていた大木を縦に真っ二つに押し折って、前方に思いつき加速した。その速度は音速を優に超越して、弾丸の如く一直線に攻撃してきた相手に向けて飛んだ。

「ちよっかい——」

白はその小さな拳を握り、またそこに圧縮した霊力を込めて極光を宿した。十の尾は蜘蛛の足のように広がり、いつどんな動きにも対応できるようになっている。

「——かけないでよっ！」

怒りのままに、拳は対象の頭に振り下ろされた。

グチャ、と肉を潰したような不快な音が鳴ると、あつという間に対象は木々を押し折りながら地面に撃墜して、月面にあるようなクレターを生み出した。

「ぜったいに」

しかし、攻撃はそれだけに終わらない。

白は体を反転させて大地の方に垂直に向けると、全ての尻尾を対象に向けて槍のように尖らせ、宙を蹴り大気に津波のような振動を起しながら突撃した。

「ゆるさない」

刹那、夥しい魔の絶叫が空を打ち鳴らす。血潮は飛び散り、対象の体を貫いた十の尻尾は返り血に濡れている。白の着物にも返り血は飛び散り、所々に赤い斑点が浮かび上がっている。

対象には鱗があつた。その鱗は一部が尻尾に砕かれて、表面は血に濡れている。しかしそれを気にした様子もなく、白は鱗の上に座り、尻尾を刺したまま、相手の顔に向けて睨み付けた。

「りゅうじん、しつこいよ」

舌足らずな声は相変わらずだった。しかし、その双眸は月の光に

よって怪しく輝き、口元は暗闇によって隠されている。その姿は恐ろしく、魅力的で、非常に危険な香りがした。いつもの可愛らしさは微塵もなく、その姿は絶対的強者の威厳に満ち溢れている。

しかし、それもすぐに暗闇に閉ざされる。月は雨雲に隠れてしまい、更にはこの一帯に滝のような豪雨がザア！と降り注ぐ。

「ねえ、なんどじゃますればいいの？　なんどこわせばきがすむの？　いいかげん、じゃまをしないでよ」

冷酷に白は龍神に言葉を投げ掛けた。いつもの優しさなんて欠片も無い。その言葉は受け取った者の心を凍死させるほど冷たい。当事者でなくとも、その声を聞けば肝を冷やし、あるいは驚掴みされたような気持ちになる。

「やまちはまだいいよ。いつかだけだから。それからは、ちゃんとやくそく、まもつてくれるから。でも、りゅうじんはだめ。むちつじょ——」

ふと、大地が波打った。そのせいで白の言葉は遮られる。

ひゆう、と白の体が宙に投げ出されて風を切る。直後に大地が悲鳴を上げた。一体、どれだけの力で投げ出されたというのか。少なくとも、身体能力に特化した大妖怪の全力以上の力があった。

その証拠に、この土地の地盤はいとも簡単に陥没していく。まるで世界の終わりの様な絵図が出来上がっていた。

「もう……」

宙に放り出された白は溜息を吐いて、ただ靈力の暴力に任せて重力に逆らって宙に足を着いた。すると、目の前に映るのは空飛ぶ蛇のよな龍神の姿だった。

「白、貴様の在り方を、私は認めないぞ！」

龍神が吠えた。怒りに任せた咆哮のような声は星を揺るがし、神力の波動を撒き散らした。ゴゴゴ、と大地が崩れる音は未だに止まない。

「おなじことばかり。ちからをもつてからずつとそう。うるさいよ」

そんな姿の龍神を見て、白はうんざりとした様子で拒絶の言葉を乱暴に投げ返す。

これは異常事態である。

龍神とは、即ち最上位の神である。ある地域では創造神とまで謳われるほど高位の存在だ。自然現象そのものと同意義の力を持ち合わせ、その実力は世界各国の最高神と同列に位置に、あるいはそれ以上のものを有している。

一度咆哮すれば、天が割れんばかりの雷鳴と、水没するかと思われるほどの豪雨が世界を包み込む。体をうねらすだけで山をも崩す。

単純な比較をすれば、ルーミア、風見幽香、二ツ岩マミゾウなどの大妖怪が束になっても傷一つ与えられれば良い方だ。月に行つた綿月依姫と綿月豊姫であっても、勝つことは不可能な位置に存在する。八意永琳も同様に、単純なパワーゲームでは方に一つも勝ち目がないほどの相手だ。

そのような規格外の相手に対して、白は平然と言葉を投げ返し、またそれを露骨に邪見にするほど接する態度は悪く、あまつさえ攻撃して傷さえも負わせてみせた。当の本人はさらに無傷である。これを、異常事態と呼ばずに何という。

「強者は常に弱者の上に立たなければならぬ！ 強者が弱者を囲う楽園を作ってはならない！ 強者は常に、弱者の恐怖を呼び起こさせ、その生命に衝撃を与えなければならぬ！ 時に、その命を散らして証明もしなければならぬ。全ては墮落させないために！ 何故、貴様にはそれが分からない!？」

しかし、言ってしまうえば――

「だまってよ。おしつけるなんて、じぶんかって。かんがえなし」

――それが白なのだ。この姿こそが、本来の彼である。

「おさはみんなのちようてん。だから、みんなをまもる。きにいったから、ともだちだから、ぶかだから、まもる。それだけだよ」

龍神はいつも白に突つかかってくる。お互いの考えが相違していると認知した時から、友であつた関係は瞬く間に崩れ去つた。

龍神は白に理解させようと迫り、時に結果を提示してみせる。

白は自分の他の友だちや部下に手を出す龍神を荒々しく追い払う。そんな関係が、ずっと昔から続いている。

それはとても悲しいことだと、二人は気づかないまま。ずつと、この関係は続いてきた。

「ッ！ 今日こそ、その甘え切った根性を叩き直してやるッ！ 弱者には、恐怖と命を刺激することがどれだけ重要か、その目でしっかり確かめろ！」

「うるさい！ ともだちにてだしするやつなんて、かえりうちにしてやる！」

二人は悠久の時の中で忘れてしまったのだろうか。

——笑顔を分かち合った日々の事を。

霊力と神力はぶつかり合い、その土地を確実に変形させていく。歪なほど穴が開き、歪なほどでこぼこになって、木々はすっかり皆押し折れて、消し飛んで、それを豪雨が流し去る。木々が消え去ることで地盤は緩み、大地は次々と陥没していく。土砂は流される。

大きすぎる力の衝突は、周囲に大きな影響をもたらした。森の全域を泥沼に変質させるだけに飽き足らず、近隣の村を水没させるほどの雨を撒き散らした。

天を裂くような雷鳴は三日三晩鳴り止まず、実際に空が割れたことは数知れず。

血潮と雫に濡れた戦いは、災禍を残して幕を閉じた。

——その後、理想郷に役者が集うまで、白の姿を見た者は居ないという。少なくとも、彼のとある身内一人を除いて、知り合いが彼を見たという報告は無いのであった。

## 第十四話 その後

深い、深い、とても深い森の中。人間の決して到達することの出来ない迷いの森の中には、一人の男の子が膝を着いて嗚咽を漏らしていた。

立派な白と藍色を基調とした着物は所々焼け焦げて穴が開いている。白と藍色は泥水によつてすつかり色が変わり、全体的に汚らしい。

服装だけではない。男の子には狐耳と十本の尻尾が生えていた。元は綺麗な穢れを知らぬ純白の尻尾は、今や見る影もなく、所々固まった泥が付着しており、また毛並みも荒れているように見える。

「えぐつ、うつ、え、う……い！」

男の子の名前は白という。彼は先の龍神との戦いの後、決着がつくと逃げる様に富士山の樹海に潜り込んだ。

——此処は誰も知り得ない彼が弱音を吐く場所だった。

悲しいことがあれば、辛いことがあれば、耐えられないことがあれば、真つ先に此処に訪れて、心の傷を癒していた。

どうして此処なのか。それは非常に簡単だ。

——長は誰かに涙を見せちゃいけない。

そんな彼の理念が誰も知らぬ秘境へと駆り出したのだ。

「——っ！　うえ、うっ」

大きな泣き声が、富士の樹海に寂しく響き渡った。

思い出すだけで声が止まらない。彼が全力を出した時、誰かを守ろうと躍起になった時、いつも決まって守ろうとした者たちが彼に恐怖する。恐怖を含んだ瞳が自身を射抜く瞬間の怖気、それをどうしても忘れることが出来ない。あの視線に貫かれると、まるで自分の存在を否定されているかのような錯覚に陥る。

彼はただ、大切な者を守りたかっただけだ。そんな彼の心と関係なく、大切な者たちは恐怖を抱く。それが仕方ないことだと頭では分かっている、心まで納得させることは出来ない。

「っ！」

今回、恐怖に震えた瞳は八つあった。それを思い出すだけで、全身に鳥肌が立ち、尻尾の毛が逆立ち、身体の震えが止まらない。あれだけ仲の良かった、付き合いの長かった者も、歴史を繰り返した。

「っ！ う——」

喉元まで熱い何かが上がってきたが、白は何とかそれを飲み下す。いつものことだ。思い出したくも無い、忘れられない、数えるのも鳥澁がましい瞳が恐怖を宿して彼を射抜いた時の記憶がフラッシュバックしたのだ。もう、群れの狐たちの顔も思い出せない。思い出すとしても、恐怖の瞳ばかりが浮かんで、白を容赦なく責め立ててくる。

——怖い。

——近寄るな。

——あっちいけ。

誰よりも感情に敏感だからこそ、相手の無意識の恐怖まで感じ取る彼は、その時は群れから一人去って、高天原という世界からも消え去った。

自分が誰かを恐怖させる現実には、彼は耐え切れなかった。

地上に降り立ったのは良いものの、なかなか友だちは出来なかった。誰かを怖がらせないために力を抑えていると、妖怪たちは好き勝手に白を害そうとする。下級、中級あたりの妖怪は特にその傾向があった。

そんな中で出来た友だちが、たった一人ではあるけれど、ルーミアだった。

ルーミアは白と一緒によく遊んでくれた。世話焼きな性格なのか、教育ママのように厳しく指導したこともあった。外敵がくればいつも守ってくれた。

その後は、ツクヨミや永琳、依姫と豊姫、タヂカラオやクラウンピースなどと出逢い、良好な友だち関係を築いていったが、気づけば周りからは誰もが居なくなっていた。

ルーミアの他にも、風見幽香や二ツ岩マミゾウ、諏訪子とも友だち

になったが、結局最後は龍神襲来をきっかけに、白は彼女らのもとを去った。龍神の性格上、このままの関係を何とか維持しようとしても、また来襲してくることを知っていた彼は、結局その結末を選んでしまった。

白は縁りを戻そうなどとは思わない。戻しても、また壊れると知ってしまっていたから。

あの狐の群れのように、一度は仲直りしても、立て続けに龍神が来襲して、結局追い出されることは分かっていた。

ならば、お互いに禍根を残さないうちに、交流を絶つた方が良いに決まっている。

そんな経験をしてでも彼が出逢いを求めるのは、そんな自分でも認めてくれる存在を、ただひたすら求めていただけなのだ。

鉛筆で白紙に名前を書いて、消しゴムで白紙に戻して、また名前を書いて、白紙に戻す。その繰り返しこそが、彼の歴史だ。

「っ、あっちいけー！」

ふと、彼は誰かの視線を感じた。強がり得意地つ張りで、先ほど傷付いたばかりの彼はこの時ばかりは拒絶の言葉を乱暴に投げつけて、全力で出鱈目に霊力を放出した。その力は富士の樹海を震わせ、局地的な地震を発生させる。放出した際に発生した衝撃波は周辺の大木を軒並み押し折り、立ち上る霊力は天を貫く柱となる。

これだけ力を放出すれば、龍神にはすぐに気づかれるが、あれだけ痛めつけた翌日に来るとも思えない。

ただし、別に白にそのような合理的考えがあったわけではない。今回の力の放出ばかりは、癩癩に近かった。

「ぐづぐづううー！」

喉を鳴らして、涙を溜めた瞳で睨み付け、大地に両足と両手をつけて獣のように威嚇する。

すると、睨み付けていた空間が横に裂けた。両端はリボンのようなもので留められて、裂け目からは趣味の悪い目玉が覗いている。中は全体的に紫色に空間が湾曲している。

「かえれっ！」



目玉を見た瞬間、白は拒絶反応を起こしたように一步後ろに退き、更に表情を険しく歪めた。唸り声も低くなり、霊力の放出はとうとう大地を割るほど昂った。

しかし、そんな威嚇は効果を成さなかった。空間の裂け目からは、薄暗い中でもハッキリわかるほど艶めいた長い金髪とドアノブキャップのような特徴的な帽子を被った少女が現れた。

「そんなに唸らないで。私は、貴方の敵ではないわ」

少女は開口一番に、優しい声音で白に告げた。

しかし、白はその十本の尻尾のうち一本を少女に向けると、その顔のすぐ真横に向けて霊力の弾丸を撃った。すると、少女の背後にあった空間の裂け目に着弾し、それは見事に爆散して跡形もなくなってしまう。

先ほどの攻撃がもしも少女に当たれば、彼女はなす術も無く死んでいただろう。それを理解していながら、少女は前に一步、踏み出した。「くるなっ！」

少女の頭上を、真横を、時に首のギリギリ掠めない程度に、霊力の弾丸が豪雨のように飛んできた。しかし、それでも少女は一步、一歩、しっかりと踏みしめて白に向けて真っ直ぐに歩いていく。

白は手加減無しに弾幕をばら撒く。

——少女の目の前で彼女を避ける様に交差する霊力のレーザーを放った。

少女はまるで動じることなく歩いている。

——少女の目の前に数千の霊力弾をばら撒いた。

少女が真っ直ぐ歩くと、その霊力弾は全て少女を避ける様に散らばった。

——少女の真横に霊力のレーザーを撃った。そのレーザーは途中で少女に向かうように直角に曲がり、しかしまた進路を変えて、結局少女には当たらない。

少女は意に介した様子もなく歩いている。もう、白と少女の距離はほとんどない。

「っ、もうっ！」

——数万の霊力弾がばら撒かれた。まるで壁が迫ってくるかのようだ。今度こそ、少女に直撃する弾が数多く存在した。

少女は全てを理解して、その口に微笑みを浮かべた。歩みを止めることは無い。

直後、少女に数十の霊力弾が着弾すると同時に、周囲の霊力弾も大地に着弾し、濃い砂塵を巻き起こした。

「っー」

白はこの場から逃げようと踵を返した。そして足に力を入れようとした時、不意に背後から手を回されて抱きしめられた。そのせいで、彼は足に力を入れることが出来なかった。

「私の名前は、八雲紫」

先ほどの少女、八雲紫の声が聞こえてきた。当然だ。白は彼女に当たる霊力弾だけは、彼女が傷つかないように絶妙な手加減を施した。それ以外の弾の威力は、瀕死の重傷を負う程度の力加減をした。

真っ直ぐ歩いてきた少女が無傷なのは当然のことだった。

「貴方の名前は？」

「……はく」

「そう。白、ね」

こくり、と白は途端に大人しくなって、八雲紫が自分に回している手を遠慮がちに握った。すると、八雲紫はその手をギュッと握り返した。それにビックリしたのか、白の体が大きく跳ねた。

「私は、貴方と友だちになりたいと思って来たの」

「……とも、だち？」

「そう。友だち」

白の全身が震えはじめた。まだ彼は、先日のトラウマを乗り切っていなかった。友だちという単語に思わず恐怖が渦巻き、過呼吸が起こり、苦しみだした。

八雲紫は強く、優しく、白の震えを殺すように抱きしめた。彼の手を両手の温もりに包んで、彼の体を抱きとめて温もりを伝え、その恐怖を消し去ろうと慈母の様に静かにあやした。

「……こわがらない？」

「ええ。もちろん。だって、貴方はこんなに優しいもの」

「……はなれていかない？」

「貴方がそう望んでも、私は白と一緒に居たいわ」

「……きらいにならない？」

「きつと、今まで貴方と仲良くしていた者の中でも、貴方を嫌いになつた人は少ないわ。それに、私は貴方を嫌いにならない。約束するわ」

「……りゆうじんがくるよ？」

「……ゆめ？」

「そう。夢。妖怪と人間が共存できる世界を作ること」

「……そっか」

震えは止まっていた。呼吸も落ち着いていた。今はすっかり紫に背を預けて、俯いてしまった。

「ともだち」

不意に、白が消え入りそうなほど小さな声で呟いた。

「はくとゆかり、ともだち。ずっと、ずっと、やくそく」

「ええ。約束よ。ずっと、友だち」

紫の言葉を聞いて安心したのか、白はすやすやと寝息を立てた。紫は眠っている白を優しく抱きしめて、その様子を彼が起きるまで眺め続けるのであった。

彼だけの秘密の場所は、もう使われることもないだろう。

先ほど全てを曝け出しても恐怖しなかつた友が居るのだから。

白にはやつと、帰る場所が出来たのだから。

寝ている間に、一滴の涙が頬を濡らした。

嬉しさ故の涙を彼は初めて流した。

その姿を見て、笑みを浮かべる者が一人。

世界はとつても厳しいけれど。

時が経てば、きつと甘つたるい時間が訪れる。

——彼は今、壁を乗り越えた。

一方で、後に幻想郷担当の閻魔となる四季映姫・ヤマザナドゥは、後に八雲紫を見た直後に一言、こんなことを言った。

「黒ですね」

そんな閻魔に向けて、八雲紫も真似するように言葉を手向けた。

「貴方も黒。そうでしょう?」

そんな会話は、遠い未来の話である。そんな話はここで終わりにしてしまおう。

次は、ある妖怪のエピローグだ。



あの日、あの時、私はなんて過ちを犯してしまったのだろうか。

龍神が訪れたあの日、私たちはいつものように隠れ家に居た。日がない一日、私は能天気な闇の中で寝ていた。花の妖怪はいつも通り花畑の世話をしていた。狸の妖怪はのらりくらりと何処かに出掛けて、日が沈めば此処に帰ってきた。

協調性の欠片も無い集団だけれど、それが私たちだ。白を中心に回って、後はお互いに不干渉。暇な妖怪同士は杯を交わしたり、話し相手になったりと、そんな感じで暮らしていた。

でも、その日の夜は全てが違った。

全てが変わった。

激しい怒りに包まれた。

私たちは勘違いしていた。白の力は、鬨なんかと比べ物にならないほど圧倒的なものだった。十尾の狐の真の力は、此処に襲来した龍神さえも上回っていた。

私たちはその戦いを間近で見た。土砂と滝の様な雨に流されないように、戦闘の余波に吹き飛ばされないように、この時ばかりは力を

合わせて耐え抜きながら、白と龍神の戦いを見守った。

龍神は強い。一声鳴けば空が割れ、雷が地上を撃った。その体が波打てば山一つが瞬間に崩れて、息を吐けば嵐となって全てを吹き飛ばした。本気の神力からの攻撃は形容し難い威力だった。少なくとも、私たちが狙われたら確実に死んでいた。

対する白はそれ以上に強かった。雨も、雷も、嵐もモノともしない様子で、宙で何度も跳び跳ねながら、龍神に肉薄して尻尾で叩き落として、突き刺して、時に霊力を用いて龍神の神力を凌いで、また攻勢に回る。戦いの中で、白は一度たりとも傷付かなかった。

その戦いは、力だけを見るなら理解を超越していた。まるで幻想のような感覚だった。だけど、次第にそれを自分に置き換えてみれば、途端に恐ろしくなった。でも、白が頑張っているのに、私だけが戦いから目を離すことは出来なくて、怯えながらずっと戦いを見守った。

多分、花妖怪や狸の妖怪も同じ気持ちだった筈だ。この中でも、おそらく単純な力なら私が一番強い。その私が恐怖を覚えるほどの戦いを見て、あの二人が恐怖を抱かない筈がない。例えば戦いが大好きだったとしても、あれだけは勘弁してほしいと思ってしまうだろう。何せ、私たちがや文字通り手も足も出ないから。

それと、途中で諏訪の神もこつちに避難してきた。私と同様に、白の変わりつぷりと龍神との戦いを見て萎縮している様子だった。

「なんなのさ、これ」

私と同じように握りこぶしを固めて、自分の無力さを嘆いているようだった。その気持ちは痛いくらいに分かる。

自分で言うのもおかしい話だけど、今まで母親のように接してきた私は、白の安全をこんな時でも願っていた。龍神の攻撃一つ一つ、当たったらタダじゃすまないことは分かりきっていた。そのせいで、今度は別の恐怖、白が死んでしまうんじゃないか、っていう不安にまで駆られてしまった。

「あつ——」

ふと空を見上げると、丸い満月が見えた。雲はすっかり無くなって、見覚えのある影が空に一つと、見覚えの無い影が空に一つ、地に

伏した巨大な影が一つ、それらが鮮明に見えた。

「……………」

見覚えのある影の顔で、不意に何か煌めいた。それから少しずつ後退していったから、思わずその場で空に向かって手を伸ばして、必死に叫んだ。「行くな！」って。

私の必死の声は届いたのか、それとも届かなかったのか。白は踵を返して、その姿を眩ませた。それを確認すると、途端に私の中で罪悪感と不安が渦巻いた。

いや、それは確信に近かった。私はもう、二度と白に会えないっていう最悪の確信が心の中で芽生えた。そんな筈はない、って心の中でどれだけ叫んでも、嫌な予感ばかりが膨れていった。

「こんばんは。皆々様」

見慣れない人影が、こつちにやつて来て声を掛けてきた。私は闇の妖怪だから、特にそいつに反応して、思わず体が跳ねた。神力の量、質、そして威光、どれをとつても規格外なそいつは、間違いなく最上位の神格持ちだつて、その時は容易に予想が出来た。ついでに、そいつが太陽に近しい存在だとも分かった。

「私はアマテラス。白ちゃんについて、一つお知らせをしようと思い、こちらに赴きました」

やつぱり、太陽神。それも、最高神だ。

誰もがその威光を前に口を開けられない様子を盾にして、そいつは勝手に話を進めていく。

「白ちゃんのことですが、先に宣言しておきます」

胸のざわめきが最高潮に達した。思わず私はその光の前に一歩後ろに退いたけど、その透き通った声は容赦なく私の耳に届いた。

「貴方達の前には、もはや白ちゃんは現れないことでしょう」

心臓を貫かれたような思いだった。膝から力が一気に抜けて、私はその時地面にへたり込んだ。何がいけなかったのか、その時はまだ理解していなかった。ただ、得体のしれないざわめきがあったただけだ。

どうして、と聞きたくても、私の口は動いてくれなかった。それは最高神の威光のせいか、それとも私の精神が参っていたせいかは、今

になっても分からぬ。

「白ちゃんは昔、高天原のほぼすべての狐の群れを率いていました。しかし、そこに八岐大蛇が襲来し、立て続けに龍神が襲来したせいで、白ちゃんは群れから離れざるを得ませんでした。何故だか分かりますか？」

龍神。そう、龍神だ。今回も第一の原因は龍神が作った。アイツさえ来なければ、今頃はこんなことも起きずに、また白と会う日を楽しみに出来た筈だ。

「弱者の心と安寧を守るために、白ちゃんは離れざるを得なかったのです。白ちゃんは誰かを恐怖させることを、誰かに恐怖されることに恐怖していませんから」

……確かに、あの戦いに私は恐怖した。

まさかそれがいけなかったなんて、思いもしなかった。でも、こればかりはどうしようもなかった。

「それに、一度気づかれた集団の中に居たら、また近いうちに龍神がやってくる。ならばいつそのこと、自分が居ない方が良い」

白の考えの代弁は、すんなりと納得がいくものだった。白なら考えそうなことだ、と今まで接してきた経験が言っている。

同時に、もう会うことはないだろう、なんて答えが頭の中で出されていた。

「叶わぬ希望は持たない方が良いものです。それが大妖怪や神ともなれば尚更です。なので、此の度はわざわざ私の口からお伝えさせていただきますました。どうか新しい目標を立てられることを願っております。それでは」

最高神はそう言って、何処かへと消え去った。

それからのことを話そうと思う。

もう集まる必要も無いと思って、私は花妖怪と狸の妖怪と別れて、適当に各地を転々として、時に妖怪らしく人を襲って、食べて、襲ってくる妖怪を蹴散らして、そんな昔と同じ生活に戻っていた。

花妖怪はどうやら、また新しい花畑を作るために、何処か新しい拠

点を見つげるために旅に出るらしい。

狸の妖怪は佐渡の方に本拠地を置くらいしい。酒を持って来れば、たまには話し相手になってやる、なんて偉そうに言っただけ別れたことは、少し古い記憶だ。

長い時間が過ぎ去った中で。

私の事で1つだけ変わったことがあるといえば。

「……いくら食べても、何をやっても、満たされない」

骨の山の頂の上で溜息を吐きながら、私は憎たらしい満月を睨んだ。

腹は既に満腹だ。

だけど、心ばかりはどうしても満たされることが無かった。

何を食っても、何をしても、妖怪としてどんな残虐な行為に及んでも、心の渇きはまるで満たされない。

遠方にあると呼ばれる砂だけの土地、砂漠とやらも、もしかしたらこんな気分なのかもしれない。

「なあ、あの話聞いたか？」

「何の話だよ」

不意に、森の中から人間の声があった。かなり鮮明に聞こえてきた。おそらく、すぐ近くに居るのだろう。今回はどんな殺し方をしようか、などと私は考えながら、闇を纏って人間たちに近寄った。

「ほら、先日にあった九尾の騒ぎ」

「ああ、知ってる。何でも、その九尾を助ける十尾の子どもが居たって話じゃないか。それも白い狐の男の子。縁起物だからねえ。そのせいで、貴族様方も手を出せなくて、見逃したってやつだろ？」

「そうそう。いつか、白い狐様には会ってみてえもんだよなあ」

「ちがいない——」

私はすぐさま、妖怪の身体能力を余すことなく使って、人間たちの首根っこを掴んで大地に伏せた。相手が男だったためか、私の顔をみた瞬間に「ヒイ！」と短く悲鳴を上げたり、「犯される！」などと誰がそんなことするかと吐き捨てたくなるような言葉が聞こえてきたが、



そんなこと今はどうでも良かった。

「教えろ」

私は地に伏せた男二人を見下ろしながら、首根っこをギリギリ死なない程度に掴んで言った。

「その白い狐について、知っていることを全て話せ」

私の心は、この日、少しばかり満たされた。

たった一滴の潤いでも、それは確かに、私の心に浸透していった。

### 第三章 変遷と不変と 第十五話 市場にて

今日も晴天。絶好の商売日和である。

商売と言えば市場。

市場といえば誰もが集う場所。

市場は何も商人と消費者だけが集まる場所ではない。今の時代、市場とは即ち出会いの場とされることが一般的だ。

今日も今日とて、女性が結婚相手となる男性を狙って市場に潜む。虎視眈々と機会を窺って、笠に隠れた男性の顔を見ようと息を殺す。時にはただの通行人として自然に溶け込む。市場はいわば、恋の戦場と化していた。

ふと、女性たちの横を何かが通り抜けた。振り向いてみてみれば、それは上質な濃い黄色の袍を纏った幼い男の子だった。表袴は黒を基調として裾に赤色の線が入っている。履は間違いなく大陸のものだ。

——これはかなわない。

ほとんどの女性たちが彼に声を掛けることを諦めた。女性たちの身分では、男の子に話しかけることすら不敬に当たる。身分の違いは絶対の壁だ。それこそ、物語の中の英雄でもなければ、そんな恋は成就しない。男性から声を掛けて来た場合はその限りではないかもしれないが、圧倒的に身分の高い男性に対する恋は女性には不利なのだ。

「もし、そこの白髪の殿方」

まさか、と女性たちが声の主に注目した。すると、そこには先ほどの男の子に声を掛けた女性が居た。その服装の配色は男の子とほとんど同じだ。こちらも、はづかしき御方であった。身長は男の子よりも少し高い程度で、傍から見れば童女に見える。童女の髪の色は偶然にも、男の子と同じ色である。

「……？」

男の子は立ち止まり、童女の方に振り返った。周りの女性たちからは、笠が邪魔してその顔が見えない。しかし、童女だけはその目元までしっかりと見えて、顔を真っ赤にして唇を慌しく震わせた。

「そ、その……その、だな」

童女はなかなか本題を切り出せない。いや、切り出そうと思っていた話題を、今になって躊躇していた。本当なら和歌の1つでも投げ掛けてみようかと思っていたのだが、事ここに至って途端に、頭の中が真っ白になつてしまった。思考回路は見事に焼き切れて、考えようとも先ほど見えた男の子の顔ばかりが頭に浮かぶ。

「な——」

言葉が喉に詰まった。本当にこの言葉で良いのか。この機会を逃したらもう二度と、こんな出合いは有り得ない。何とか、何とか文だけでも良いから遣り取りを出来れば……。などと、童女の頭の中は混乱の極致にあった。

相手が待つてくれる時間は無限ではない。制限時間がある。もうその大半を消費してしまった。今から和歌を作るなんて絶対に出来ない。かといって、茶飲み話なんて面白味の欠片も無い話をして、この機会を台無しにするだけだ。

短い時間、考えて、考えて、考え抜いた結果——

「な、名前を教えてはいただけぬか!」

普通であれば、選択し得る中でも最悪の言葉を投げ掛けてしまった。初手で名前を訊くなど、自殺行為も甚だしい。名前を訊くとは即ち婚姻の申し込みと同義だ。初対面の相手にそれは無い。絶対に有り得ない。

その証拠に、市場の空気も凍りついた。童女は声を張って言葉を口にしていった。その声は周囲に届かせるには十分過ぎるほどだ。

——ああ、終わった。

童女は失恋を確信した。こんな大衆の前で公開するように告白など、雰囲気欠片も無い。市場の空気が凍てつき、沈黙が流れると、ますますそれを実感してしまう。なんてことをしたんだと、過去の自分

を殴り飛ばしてやりたい。しかし、もはや全て後の祭りだ。

童女は思わず俯いてしまった。羞恥と自身に対する怒りから顔を真っ赤にして、服の裾を掴みながら必死に、足が何処かに赴かないように力を入れた。失恋に終わるとしても、せめて返しの言葉だけはもらおうと、意地だけでその場に留まってみせた。

「……………」

沈黙が痛い。まるで心臓に刃物を突き刺されるように痛い。視線で身体に穴が開くなら、童女の体は既に塵も残らないほど穴だらけになっっている。

もう何分、何十分過ぎた事だろうか。まるで永遠に囚われてしまったかのように、時間というものをこれ以上なく長く感じた。もしかすれば、今まで生きて来た時よりも長く感じたかもしれない。

童女の心の中で不安が渦巻く。もしかして、もう帰ってしまったのではないだろうか。何処かに行ってしまったのではないだろうか。愛想を尽かされて、返事も貰えなかったのだろうか。有り得ることだけに、童女は思わず体を震わせた。現実から逃げる様に目をギュッと瞑ると、必死に我慢していた涙がほろりと目尻に浮かぶ。

ふと、童女は目尻に温もりを感じた。何かが目尻に浮かぶ涙を拭きとった。

「はく」

おそるおそる、目を開けて見てみれば、そこには額が今にもくつききそうなほど顔を近づけた男の子の姿があった。その子は近くで、静かに、童女にだけ聞こえる声で何かを呟いた。

「しろいから、はく。それがなまえ」

少し舌足らずな声が、今度ははっきりと童女の耳に届いた。

名前を教えてもらった。それは即ち、恋の成就を意味する。あまりに予想外の出来事に、童女はポカンと口を開けて呆けてしまった。予想していた未来と、まるで違った結果になって反応出来なかった。

男の子、白は童女の涙を拭いた人差し指を引っ込めると、少し深くかぶっていた笠を動かして、童女に自分の顔が見える様にしてみせた。笠を脱いだわけではなく、あくまで童女だけに見える様に調整し

ていた。

「……………」

今度こそ、言葉というものが出てこなかった。童女は男の子の顔に見惚れてしまっていた。顔の造形全てが、童女の理想の男性像であった。まるで運命の悪戯の如く、嘘みたいな現実が目の前にあった。

——ともすれば、この結末も必然であったのかもしれない。

童女は思った。この男の子とは出会うべくして出会い、結ばれるべくして結ばれたのだと。全てが上手く行き過ぎた結果を見つめて、童女はまさに運命というものを感じ取った。まさに、これこそが、そうだと、確信を持った。

「なまえは？」

童女が歓喜に打ち震えていると、不意に声が掛かった。声を聞くとすぐに、自己紹介をしていなかったことを思い出して、童女は紅潮した頬を惜しげもなくさらして、白に満面の笑みを向けて、腰に手を当てて宣言した。

「我の名前は物部布都！　しかと覚えておくのだぞ！」

ドヤア、と決まった顔、決まったポーズ、決まった迫力。三拍子そろった完璧なドヤ顔を披露して、童女こと物部布都は胸を張った。今この瞬間だけは最高に格好がついていると、彼女自身が満足している様子だった。その裏付けをするように、白は「おーっ」と小さな拍手を送っていた。

「我はこれから太子様のところで茶を嗜む予定なのだが。白殿もどうじゃ？」

気分が最高潮に達していた物部布都は思わず白をお茶の席に誘った。彼女の本音としては、これから積もる話もあるのだから、それくらいまったりと話の出来る場所が欲しかった。主に、結婚式に誰を呼ぶかとか、これからどうするかとか、ご両親への挨拶等々。話さなければいけない内容は山ほどある。

「あっ」

不意に、白が何かに気が付いたように声を上げた。その顔には失敗に気が付いた時の様な色が浮かんでいる。

「どうかしたのか？」

「ごめんね。おつかいしなきゃ。またね！」

「あっ！」

引き留めようと手を伸ばすが、白はそれよりも早く人混みの中へと消えて行ってしまった。何とも運命的な出会いと結末を迎えたにも関わらず、最後の詰めが甘いことだ。

しかし、物部布都はその結果に満足していた。その頬をどうしようもなく緩めて、幸せいっぱい表情だけで、無意識のうちに周囲へよろけていた。

「ふふっ」

これは太子様に良い土産話が出来たと、彼女は踊る様にして人混みの中に入って行った。行動と表情だけ見ても忙しい様子だが、物部布都の頭の中はさらに忙しい。何処で式を挙げるか、ご両親にはどう挨拶をするか、彼の好みは何か、逢引するときは何をしよう、と。

物部布都はこの日、最高に気分が良かったのであった。

今日の運勢：大吉

出合い：運命の人と上手くいく。

一言：千里の道も一歩から。大きな一歩に見えて、それは実は小さな一歩。

注意点：経験と回数を重ねよう！

## 第十六話 市場の簪売り

それはふとした好奇心から生まれた出来事であった。

霍青娥は道教を勧めて見事に言いくるめた相手、豊聡耳神子とその協力者である物部布都との会話を偶然にも壁越しに聞いていた。

何でも、物部布都に夫となる相手が出来たという。相手の特徴は白髪（白髪）の男児で、歳のころはギリギリ二桁かそのあたりで、大変な美男子だという。身分も非常に高いらしい。その上、自分の失敗（突然の求婚）を気にせず、まるで運命の如く話がとんとん拍子に進んで、名前を教えてくれたという。

これは面白い、と霍青娥はすぐに行動に移った。白髪（白髪）のそれほどの身分の高い男児ともなれば、探すのに一日も掛からない。名前が分からずとも、身分さえ特定しているのであれば、その身分の者の屋敷に侵入して確かめるだけがいい。

当然、身分の高い家の者ほどその屋敷の警備は厳しいだろう。しかし、霍青娥は邪仙である。人智を越えた者であり、力もあれば術にも長けている。更に、彼女には『壁をすり抜けられる程度の能力』がある。この力さえあれば、どんな屋敷であろうと侵入は容易である。

かくして、霍青娥は都にある特定の身分の者の屋敷を徹底的に調べ尽した。それも、半日でその作業を終えていた。

「おかしいわね」

霍青娥は自身の青色の髪を弄りながら、改めて情報を整理していた。身分、見た目、年齢、この三つの条件に一致する男児の姿は、この都に住む者の中には存在しなかった。

当然、行きつく先は外部犯という可能性であるが、物部布都の話の間く限りそれは有り得ない。遠方の地より男児をたつた一人で小間使いのように走らせるなんて、昨今の親のやることではない。お供の一人や二人くらいは必ずつける。それすら居なかったということは、考えられる可能性は1つだけだ。

「妖怪……いえ、神霊の類かしら」

都には少なくない手練れの陰陽師たちが妖怪の侵入を阻むために結界を張っている。気づかれずに潜ってくるなど、例えば大妖怪だとしても不可能だ。ならば、人型としてその若さを保つ者は神霊か、あるいは史上例を見ない天才的な仙人が最も有力な説だ。

霊獣や半獣などの類も考えられるが、どちらにしてもまともな人間でないことは確かである。

「ふふっ」

——面白いわね。

霍青娥は確信の笑みを浮かべた。彼女の読みでは、件の男児は間違いないく強者である。ある特徴の一致から、もしかすれば大金星かもしれない。

中国には妲己の伝説がある。紀元前十一世紀頃、妲己は帝辛に寵愛され、彼女のいうことなら、帝辛は何でも聞いたという。妲己は周によつて攻められた際に武王により殺されたとされる。

しかし、この話には続きがある。

——曰く、妲己の上に立つ狐の化け物が居た、と。

——曰く、その力は龍の神を退けるほどである、と。

——曰く、その者も今は地上に降り立っている、と。妲己は己の長を捜すために地上に降り立っていたのだ、と。

——曰く、その姿形は二桁にいかないほど幼い男児である、と。

——曰く、十の狐の尾を持つ白い狐の男児である、と。

——曰く、力を抑えれば人と見分けはつかぬ、と。

一連の話を思い出して、霍青娥はその身を大きく震わせた。もしもそんな伝説が存在するならば、それはもはや彼女の想像の枠組みとは異次元の位置に立っているに違いない。龍の神を退けたともなれば、それは下手な最高神よりも力強く狡猾に違いない。

多芸に秀でているのだろう。

隠蔽の術は史上例を見ない練度なのだろう。

その技術全てを体得するためには、今まで生きてきた時間よりも長い鍛錬が必要なのだろう。

そして。



なにより。

それだけの逸材に会える機会を逃すなんてとんでもない！

「あの子をだしにしましょうか」

何でも、再会の約束というものをしたらしい。

ならば、無暗に探すよりも、再会を取り付けている人物に貼り付く方がずっと効率的である。

霍青娥は目的のためならば、どこまでも自己中心的になれる。

例えそれが計画を進めるための協力者の恋路の邪魔になるとしても。

強者に果てしなく盲目的である彼女は、もはや二度と訪れない機会に食いついた。

「そうと決まればさっそく」

——張り込みね。

鼻歌まじりに、屈託のない笑顔で、彼女は大きな一歩を踏み出した。

物部布都を陰から観察して、既に十日が過ぎた。しかし、一度たりとも彼女の周辺に白髪の男児が現れたことはない。流石に気になって、それとなく豊聡耳神子に話を聞いてみれば、何と別に日を決めて約束をしているわけではないらしい。

そうと分かれば、困るのはずっと張り込みをしていた霍青娥だ。いくら再会の約束をしているといっても、日にち不明瞭であれば当てが外れたとしか言えない。だからと言って、霍青娥が探している相手は、能動的に動いたとしても見つかるとは思えない。

こうなれば、もうお手上げの状態だ。何時になるかは知らないが、再会の約束をしたのであれば、とりあえず年内には会うだろう。

そんな見通しのもと、今日も霍青娥は物部<sup>撒</sup>布都<sup>御</sup>の様子を見るために、その陰へと足繁く通った。どうやら今日は市で買い物をするらしい。何でも、あの白髪の男児への贈り物を買うのだとか。

「どうして、専門の店で買わないのかしら」

これも風水というやつなのだろうか。霍青娥は納得のいかないまま、その買い物風景を見守った。露天商の出している品物は、どれも個人的だが、故にゲテモノや安物が大半だ。男児への贈り物としては雅さに欠ける。

無数にある露店の中、ふと物部布都が立ち止まり、興味深そうにその商品を見始めた。見てみれば、そこは簪の店だった。都の中にある有数の貴族御用達にあるものと違って、飾りは非常に簡素で、素材も金や銀ではなく、鉄に色を塗っただけのものだ。

物部布都が手に取ったのは、先が二股に分かれているものだ。相変わらず鉄製だが、染色のために上等な漆を使っている店の中の逸品だ。細工は黒色の蝶が施されており、その意味するところは間違いない。“胡蝶の夢”だと、霍青娥は確信を持った。

その簪を見ると、それを店に出している店主にも興味が湧いた。一体どんな人物なのかと見てみれば、華人服とチャイナドレスを足して2で割ったような淡い緑色を主体とした衣装を身に着けた、赤い髪を腰まで伸ばした女性だった。見た目から間違いなく、大陸出身の者だ。

「店主！ これは良いモノであるな！ 幾らなのだ？」

「その簪ですね！ えっと、それでしたら……」

「なんと、そんなに安いとは。では、釣りは要らぬから、これに合った入れ物を貰えぬか。ある御方に贈ろうと思っていたのだ」

「わっ、こんなに……。わかりました。腕によりをかけて、外箱を選びますね！」

商品の質にも関わらず、余分に貰った金が多かったからか、店主は店の奥から上等な檜の箱を引っ張り出して、その中に簪を丁寧に入れてから商品を手渡した。それに満足そうに頷いた物部布都は一つ頷いて、良い買い物であった！ と笑顔で言った。そして大切そうに両手で箱を持って帰路に立った。

「……私も買おうかしら」

今まで使ってきた簪に触れながら、霍青娥は陰から出て、先ほど物部布都が買い物をした簪の露店の前まで行き、改めて近くから簪を見

て、どれにしようかしら、と真剣に考え始める。

「めーりん！」

「あつ、白さん！」

簪を選んでいる最中、店主に話しかける者が居た。それも名前呼びということとは、よっぽど親しいのか、それとも家族なのだろうか。興味が湧いた。簪選びを中断して横の店主に話しかける者を見てみれば……物部布都が話していた男児の特徴を生き写しにしたかのような者が居た。いや、間違いなく本人だ。

「わざわざ此処まで来るなんて……何かありましたか？」

「きょうはどうする？」

「……あつ、鍛錬のことですね。陽が沈む前にいつもの場所に行きま  
すね」

「うん。まってるね！」

短い会話の後、本人はそよかぜの如く人ごみに紛れて何処かに行つてしまった。それは邪仙である霍青娥の目に映った光景だ。

「……同郷の方ですよ？」

ふと、霍青娥は店主に話しかけられた。突然のことだったが、霍青娥はやわらかい笑みを共に、当たり前障りなく答えて言った。

「ええ」

見たところ、店主からはあまり力が感じられない。微量に「気」が漏れ出ているが、それも微々たるもので、まだ才能の開花していない武闘家を思わせる。

一方、先ほどの白い男児は力をまったく感じなかった。まるで一般人の如く、人畜無害な様子だった。男児が果たして黒か白か、まったく判別がつかなかった。

故に、この二者はどちらかが、圧倒的強者だ。先ほどの鍛錬という言葉からも、その様子からも、いつも鍛えているということがわかった。問題は、彼と彼女、そのどちらが師であるかということ、ただそれだけ。

「ああつ、やっぱりそうでしたか！ 良かったです」

（……何が良かったのかしら）

店主からの謎の言葉に、霍青娥は首を傾げた。

その様子を見ていた店主は人当たりの良い笑みを浮かべて、ちよいちよい、と手招きをしてきた。近寄れ、ということだろうか。同郷の好ということもあり、霍青娥は素直に指示に従って、店主に顔を近づけた。

「白さんに手を出さないでくださいね？」

耳元で囁かれ、ゾワツ、と全身が粟立った。蛇に睨まれた蛙の如く、動くことが出来なかった。この店主、間違いなく黒だ。顔を上げてみてみれば、その瞳は爬虫類のようにギョロつとしていた。加えて、覇気はまるで龍の如し。

店主が元の位置に戻った。改めて見てみると、その瞳は人間味溢れており、恐怖など微塵も感じない。力強いとも思わない。しかし、粟立った肌が確かに、先ほどのことは現実だと主張している。

「つ……、ひどいわね。私はただ、強ければ師事したいと思っただけだもん。強い相手に師事したい。当然のことですよ？」

ニコリ、と店主は営業スマイルを浮かべた。そして極めて平坦な声で告げた。

「本当にそれだけならいいです。ですが、憎悪、悪意、あるいは害を向けるというのであれば――」

店主はそこで言葉を切り、それ以上は語らなかつた。ただ、知っている者からすれば寒気を催す笑みを浮かべている。その顔はまるで、獲物を待ち構える蛇のようだった。幸いなのは、霍青娥はまだ蛇の狩場に入っていないことだ。

当然、その領域に踏み入るつもりは端からなかつた。結局、蛇の狩場とは無縁なことに、霍青娥は「ほっ」と溜息を吐いた。

「……そうね、これを買おうわ」

「はい。ありがとうございますー！」

お金を渡して簪を受け取る。スイレンの細工が施されている黒い簪だ。簡素だが丁寧な作りだ。その上、この簪においては非常に微弱だが、気配を悟られにくくする術が込められている。

「そろそろお暇するわね。また会いましょう」

「はい。っ縁があれば、また」  
短く別れを告げて、霍青娥は店主と衝突することなく、簪と情報を手にその場を後にした。

## 第十七話 師弟

すつと、柳の様にしなやかな「氣」が、あたかも風に流される様にゆらり、ゆらりとやわらかく動く。その姿と動きは自然の如し。天地と合一し、景色に溶け込む技は「氣」を以て己の気配と姿を絶つ絶技なり。

人並み以上に体術を齧っていれば、その動きがどれほど卓越した技であるのかよくわかる。数多い武人の中でも、自らを自然と同一化させることで気配と姿そのものを捉えさせないなど、生まれた時に天より才を恵まれた者のみに許された、天の技である。才無き者は、どれほど努力をしようとする域に達することは不可能だ。例えば時間が千年単位であっても、達する領域はまた別物になってしまうのが関の山だ。

スウ、と鋭く息を吐いた。すると、先ほどまで溶け込んでいた気配と姿は絵の中央に位置するレリーフの如く浮かび上がり、自然とは別物であることを証明するように存在そのものが自己主張を始めた。

「白さん、お手合わせをお願いします」

武術の達人である彼女は左の手のひらに右の拳を打ち付けて言う。彼女の目の前には、白と藍色を基調とした狩衣を身に着けた男の子と白が居た。彼は一つ頷くと、その頭頂部から突然狐の耳を、お尻のあたりからは十本の狐の尻尾を生やして見せた。

「攻撃手段は体術のみ。霊力などの力は身体能力向上のためだけに使用可能。いいですね？」

白はもう一度頷いて、その四肢を地につけた。さながら大地を駆ける獣のようだ。対面している彼女は顔を引き締めた。

「では、いざ——」

勝負、と叫んだ直後に白の居た大地が陥没して姿を消した。彼女はそれに焦ることもなく、流れる様に一步踏み込むと、正面に向けて正拳突きを放った。

「うっ」

ドン、と一点に集中した莫大な衝撃が殺された。彼女の拳は見事に、白の十本の尻尾によって止められていた。狐の尻尾はまるで最高級の寝具のように柔らかく、芯は鋼鉄よりも強固だ。それを十本も向けられたとなれば、止められることも必然だ。更に言うならば、尻尾が大きすぎて白の姿を見失った。

「やあー！」

白からの回し蹴りが、彼女の側頭部に向けて飛んでくる。お手本のように綺麗な反撃だ。視界を封じて、流れるように弱点に向けて蹴りを見舞う。簡単に見えて、攻撃を受け止めた上でこれをやるというのは非常に難しい。

しかし、彼女の視野は広い。横合いから飛んできた蹴りを、その蛇の如き鋭い瞳に映していた。ことも無きげに、彼女は足に向けて肘を撃つ。

「あうー！」

短い悲鳴が上がった。白は途端に後退して膝をついた。体を尻尾で支えて、先ほど蹴りを放った足を庇うような様子を見せた。先の蹴りは勢いが十二分にあった。加えて、そこに絶妙なタイミングで肘を撃たれたとなれば、体術だけで戦うには相当な痛手を負ったのは間違いない。

「ふう、一度休憩にしましょう」

言いながら、彼女は白に近づき、庇っている足を診た。すると、当たった場所はどうやら脛のようで、酷い痣になっているどころか、腫れによって膨れ上がっている。骨が折れていても不思議ではない。

「少し沁みますが、我慢してくださいね」

「ん……っ」

彼女は白の患部に手を乗せて、そこから「気」を流した。自然回復力を高めるためである。

一方、彼女が言った通りやはり沁みるのか、ビクツ、と白は小さな肩を大きく揺らした。僅かながら瞳に涙を浮かべ、不安そうな顔をしている表情は、妙に下心をそそられる。彼女もその表情は目に映したが、努めて心を穏やかに保っていた。

「めーりん、ほんきだしすぎ!」

「うっ、そ、それは……えつと、そうです! 痛い思いをしないと、身体は覚えませんかからね!」

「うう〜!」

恨めしそうに、白は彼女こと紅美鈴を上目遣いで睨み付けた。ご丁寧に、迫力の無い唸り声という特典もついている。獣に威嚇されているというよりは、愛犬にじやれつかれているような感覚を覚える。恐ろしいというよりは、愛くるしい。

先の手合わせ、実のところ白が紅美鈴の腕を見込んで、体術を習いたい……などといった事情なわけではない。半年ほど前に、紅美鈴が武者修行の旅と称して大陸からこの島国に渡って来た時、一目で白を強者と看破した彼女は彼と手合わせをした。形式は二つで、ルール無用の勝負と体術のみの勝負。その結果、ルール無用では白が圧勝し、体術のみでは紅美鈴が圧勝した。

生来からの負けず嫌いである白は、その結果に納得がいかず、何度も再戦を要求する。紅美鈴も、挑戦者を拒むようなことは彼女のプライドが許さなかった。何より、ルール無用の手合わせであっても、一度負けたとなれば、一度でも勝ちを拾わなければ、心のしこりが取り除けないと悟った。

結果、白と紅美鈴は毎日、この時間帯になると手合わせに励んだ。白は体術のみで紅美鈴を打倒するために。そして紅美鈴はルール無用で白を打倒せしめんために。

しかし、お互いにどちらかの形式では相手を圧倒できるような強さである。それ故に、得意な方の形式で戦うとなれば、常に得意な方が物足りなさを感じる。これでは自分のためにならない。その物足りなさを解消するためにも、今では互いが得意なルールで互いを指導し合うという、妙な関係が築かれていた。

先の戦いでは、白が思わぬ早さと方法で反撃してきたために、紅美鈴も反射的に本気で肘を打ち込んでしまった。まだまだ得意な形式では余裕がある。しかし、時折こうして予期せぬ鋭い一撃が飛んでくると、その一瞬だけ余裕が消え去ってしまう。こればかりは、武人と



して繰り出す無意識の一撃なのでどうしようもない。直せと言われても、そもそも直す必要は無い上に、意識してどうにかできるものでもない。

結果として、こうした怪我の沙汰が後を絶たない。その度に、紅美鈴は「気」を用いることで白の自然回復力を高め、怪我の超高速再生を行う。その一方で、白も自分自身の霊力と術を用いて怪我を治す。

「もういつかいー！」

「いつでもどうぞ」

そして治療が終われば、試合再開である。

お互いに一度距離を置き、そして構えをとる。

手始めにお互いの動きを観察して。

次に呼吸の隙間を縫えないものかと虎視眈々と狙い。

それでも駄目なら、しびれを切らして突撃する。

先ほどとは、少しだけ違う方法で。

「やあー！」

「っ、はあー！」

またも、意識の外から攻撃が飛んできた。真後ろから、首を刈りとする様な蹴りを放ってきた白に対して、紅美鈴はそれをしやがみ込んで避けた後、流れるようにながら空きの胴に寸勁を叩き込んだ。

「っ」

息を盛大に吐き出して、白は背中から大木に叩きつけられた。

「ごほっ、ごほっ！ー。う、ううー！」

また本気で叩き込んだ！ と白はその愛らしい眼力を以て紅美鈴を睨み付けた。それを見て、自分が白を瞬殺したことに気づいた紅美鈴は、苦笑を浮かべながら言う。

「あつ。えつと、ごめんなさい。隙だらけだったので」

隙があり過ぎても、武人の体は反射的に攻撃を叩き込んでしまう。この性ばかりは、如何ともしがたい。

後に、最終的にはこの日も十度以上も瞬殺される白であったが、もはやこれもいつものことになっていた。

「うーん……」

釈然としない、といった様子で、白は周囲を見回した。目の前には、先ほどルール無用の形式で手合わせをして楽々と倒した紅美鈴が仰向けになって倒れている。周りには草木が生い茂っているが、特に変わった点は無い。今夜も月は綺麗で、上を見れば木の葉の隙間から満月が見える。

「やっぱり、へん」

じつと数多ある木々の中でも腐りかけの齢百年ちよつとほどの木を見つめる。そこには、言い知れぬ違和感があった。肌をべたつくような、喉に小骨が刺さったような、大きくも小さい感覚だ。

「だれかいる」

聞こえるように呟いた。しかし、紅美鈴は仰向けに寝転んだまま動かない。関心がないのか、それとも動けないほど疲れ果てているのかはわからない。

「だれ」

腐りかけの木に向けて、白は言葉を投げかけた。すると、ほどなくして陰から青色の髪を簪でまとめた女性が出て来た。彼女は優雅に一礼をすると、白の目を見て真っ直ぐに告げた。

「初めまして。私は霍青娥。仙人を生業としています」

「……」

人当たりの良い笑みを浮かべて、青色の髪の彼女、霍青娥は言った。しかし、対する白はいつもの調子ではなく、ぶすつとむくれて黙り込んだ。

そんな白の様子を見て、霍青娥は「あら、あら」と声音は穏やかだがあたふたと慌て始めた。何か粗相をしたかしら、などと考えるが、思い当たる節は何もない。

「うーっ……なんか、きらい」

何とも理不尽極まりない言い分だった。無条件に嫌われるのは初めてだ。これからどうやって弟子入りをすればいいのか、霍青娥は頭を捻った。

「貴方の腕を見込んで、お願いがあります」

「えー、うー……」

白は困ったように声を上げた。それを気にせず、霍青娥は次の言葉を投げかけた。

「私を弟子にとつてくださいな」

「やだ」

強情な子どもばりの即答である。取り付く島もないとはこのことか。

しかし、話し上手の霍青娥はそんなことではへこたれない。

「弟子をとつた人のことを師匠というのだけれど」

話の本題に入る。

「師匠はとつてもお徳よ？ 炊事洗濯力仕事、全て弟子に任せても文

句は言われない」

「じぶんでやる」

なるほど、怠惰に過ごすことに興味はないらしい。

「良き弟子を持つ師匠は徳も高いわ。立派な人物として見られるでしょう。立派な弟子を見れば師匠の評価も上がり、人々から好かれるわ」

「うっ」

目に見えて表情が変わった。心が揺れ動いた時、ちよつといいかも、なんて都合のいい凶星を突かれたときの反応だ。

「そして師匠というのは、あらゆる存在の憧れです。なりたくとも、なれるものでもなし。人々からは羨望の眼差しを向けられ、たちまち誰かと触れ合う機会が増えるでしょう」

「うう……」

腕を組んで、頭を捻り、十本ある尻尾をグルグルと忙しく回して落ち着きがない。もう少しね、と霍青娥は聖母のような慈愛に満ちた柔らかい笑みを浮かべる。

「師匠となれば、今までの印象もすっかり変わるの。もしかすれば、擦れ違いで仲違いした友と仲直りするきっかけになるかもしれない。噂を聞き付けた知り合いが、貴方に会いに来るかもしれない。弟子が有名になればなるほど、師匠の威光もまた天下に轟くことでしょ」

「……せーがは、ゆーめい？」

やった、と霍青娥は向日葵のような明るい満面の笑みを浮かべて頷いた。

「ええ。この国でも、凄く偉い人と知り合いなのよ。仲も良好」

「うー、う、うう……！」

唸り声は強くなっているが、所詮は獣の威嚇のようなものである。こうなれば、あとは押し歩いていくだけである。

「毎日おいしい料理も馳走します」

「っー」

尻尾が天に向けて真っ直ぐに伸びた。

「お金は取りませんとも。師匠の生活の面倒を見るのは全て弟子の役目ですから」

「……………」

「とつても美味しい油揚げもあるわよ」

「せーが、まずはおなかにちからをあつめて」

「……………あらあら」

一瞬のうちに一本釣り出来たことに戸惑いながらも、彼女はすぐに意識を切り替えて指示された通り「気」を腹部に凝縮させる。

「つぎ、それをからだにながす。ちといっしょ」

言われた通りにするが、ふと思う。これってただの鍛錬じゃないのかしら、と。

「それをずっと、つづける。つぎのまんげつのひまで、つづけること」  
えっ、と思わず声を上げた。次の満月の日まで、それは即ち一ヶ月後ということ。これは単なる「気」を用いることによる身体能力の強化の類であり、基礎の中の基礎である。しかし、それを一度練り上げた「気」をもとに、たったそれだけの力で一ヶ月も循環させ続けると言われれば、途端に難易度は跳ね上がる。百円の馬券を買って満足していた者が、急にラスベガスのカジノで賭けをするようなものだ。難易度だけを言及するならば、格の高い仙人の中でも出来る者が限られてくる。霍青娥は仙人と自称することを憚らないが、実力だけをいえば中堅だ。修行を怠ってはいないが、こればかりは出来る気がしな

かった。

「ちから、もれてる。へればわかるから、そのたびにくふうして」

そういうこと、と彼女は途端に納得して頷いた。どうやら、無理難題を平気で吹っ掛けて来たわけではなく、敢えて現状では絶対に出来ないラインを作って、且つ成長の振れ幅的に届き得る目標を設定した上で、白は鍛錬方法を教えてくれたようだ。ただ、それもあくまでやり方だ。試行錯誤するのは霍青娥本人であり、半ば丸投げの状態といってもいい。

鍛えるは、力の変換効率と持続力。

「おしえたから、ごはん、たべにいこう！」

「……そうしましょうか」

一つ溜息を吐いて、先頭に立って都に向かう。その途中、ふと白の相手をしていたあの簪屋の店主のことが頭をよぎった。

「そう言えば、あの大陸出身の彼女はいいの？」

「ねてるから。いつものこと」

口を出してこないと思っただらそういうことね、と霍青娥は納得した。白は見かけによらず、存外に逞しく生きているようだ。最初に一方的に嫌われてしまったのはもしかすれば、思ったよりも身近に理由があるかもしれない。霍青娥は道中、彼と言葉を交わすことなく、そんなことを考え込んでいた。

## 第十八話 再会とご対面

なんと愛らしい男か、と一目見た時に彼女は思った。

何やら怪しい動きをしていた霍青娥が突然連れて来たのは、物部布都の話と合致する男の子であった。白と藍色を基調とする服を着ているのは、きつとお忍びか何かだろう。身分を偽って民に扮し実情を把握することは、良き為政者の務めである。この歳からそれが行えるとなれば、将来に掛かる期待は非常に大きい。

「……青娥、その方は？」

「食事にお招きしたのよ。名前は」

「はく。よろしくね」

「私は豊聡耳神子と申します。こちらこそ、よろしく」

軽い握手を交わした。白とは父母から与えられた名ではなく、呼称みたいなものなのだろう。そうでなければ、見ず知らずの異性に軽々しく教える筈もない。この時、彼女は教えられた名に関して、重くは考えていなかった。

「食事ということでしたが……お時間の方、あと半刻ほどは必要になるでしょう。ご都合の方はよろしいですか？」

「だいじょうぶ。このあと、やることもないから」

見た目よりも舌足らずな様子が見受けられたが、おそらくそれが素顔なのだろうと彼女は気に留めない。

「それでしたら、私の部屋で話をしましょう。手持無沙汰で半刻は長いものです」

少しの下心と好奇心のもと誘うと、白は警戒することなく頷いた。これを受けて彼女は先頭に立って歩きはじめる。白はそのあとに続く。

「青娥。白との関係は？」

「師弟関係、ということに」

「ああ……。青娥がご迷惑をお掛けして申し訳ありません」

「ん、もうおしえたから、だいじょうぶ」

「えっ」

「……んにゆ？」

白が絶妙なタイミングであざとく首を傾げてみせた。彼女は胸の内に湧き出した衝動をぐっと抑え込み、一度息を吐いて思考をクリンにする。

(強敵です。青娥が居なければ襲ってしまいましたね)

ストツパー役となった霍青娥にこの時ばかりは感謝しつつ、彼女は改めて白を見た。

——なるほど、美男子だ。そして幼い。好みど真ん中である。

違う、そうじゃない、と彼女は頭を振って雑念を振り払う。

今問題としていることは、白の容姿ではない。物部布都との関係でもない。

真に問題となっていることは……。

「あっー」

何かに気が付いたように、白が声を上げた。そしてすぐに彼女の方を見ると、花が綻んだかのような笑みを浮かべた。

「みこって、えらいの？」

「ええ。それはもちろん。大陸の進んだ文化や制度を取り入れたのは、私の政策ですから」

いつの間にか声が口から飛び出していた。ほとんど無意識のうちの行動であったが、彼女がそれを気にした様子はない。むしろどころなく誇らしげである。白はそんな彼女に「おーっ」という声と共に惜しみない拍手を送った。

見事に乗せられている彼女だが、霍青娥はそれに気付いて尚指摘することはしない。その方が面白そうだったのだから、自己本位の考えを持つ仙人が注意をする素振りなど見せる筈もない。

「そうなんだ！ あっ、からだにはきをつけてね！」

「……？ 当然、気を付けてはいますが……」

「へんなものたべちゃだめだよ？」

「拾い食いをするほど餓えてはいませんよ」

「うん。きをつけてね」

もう……と、白が何か呟いたように聞こえたが、それは思いの外小さなもので、彼女の耳を以てしても聞き取ることは出来なかった。

「あつ、それとね」

積み重なるものに気付くことなく、彼女は目の前の男の言葉に耳を傾けた。

——やっぱりかわらない。

誰かがそう、呟いたそうだ。



なにかが あたまを

ふとよぎる

しってる なきながら

よこにはおさら

しってる なきながら

よこにはつるぎ

くちる どうりを

しらないからだ

きつと おそらく

もくろみどおり

ちのけがひいて そうけだち

すべてすべてが まっしろけっけ

きょうも あしたも

そのとおり

たのしい じかんは



あとちよつと

わをなして うたげのせきに

ひとつの まきもの

かみちぎる



物部布都は混乱の真ただ中に停滞していた。贈り物の簪を買った後、政策の準備やら書類仕事やらと仕事に励んでいれば、気が付けば飯時になっていた。呼びに来た太子様こと豊聡耳神子には感謝が尽きないが、その後が問題だ。

食事の席まで赴いてみれば、その部屋には先に席に着いていた婚約相手が居るではないか。次にいつ会えるかもわからなかった相手が、突然目の前に現れて、物部布都は大いに焦った。驚きすぎて尻もちをついた時は悶絶した。羞恥と痛みによって。

たっぷり自分の行いを反省すると、今度こそと彼女は顔を上げた。すると、目の前には婚約者の顔がすぐ近くまで迫っていた。鼻に息が当たってくすぐったい。間近で見る白の目は心配そうに細められていた。そして一言、「だいじょうぶ？」と舌足らずな見た目以上に幼い声が響けば、物部布都の思考回路はとうとう爆発した。脱兎のごとくその場から走り去り、気づけば仕事部屋の中で、今日購入したばかりの簪の入った木箱を目に映していた。

白のための贈り物の前で、物部布都は混乱に包まれていた。今渡すべきか、それとも日を改めて然るべき状況で渡してしまうか。目の前から逃げ出してしまったことをすっかり忘れて、簪をどうするかばか

り考えていた。

「どうすればあああ……！」

妙案浮かばぬことに頭を抱えながらも考える。出来るだけそれらしい雰囲気の中で物を贈る方が、印象が良いことは間違いない。しかし、渡せる機会というものがそもそも少ない中で、そんな贅沢を言っていられるかと問われれば、彼女も贈り物がお蔵入りにする可能性を否めない。

葛藤した。長く、深く、考え続けた。

倒れてしまいそうなほどの高熱が頭を帯びた時、彼女の頭の中で電流が弾けた。

起死回生、逆転の一手を思いついた。これならば、望んでいる条件全てを満たせると確信した。

男は愛嬌だ。

女は度胸だ。

なれば、女である物部布都が度胸を示さずどうするのだろうか。

意を決して、彼女は簪の入った箱を懐に仕舞った。それからの足取りは実に軽やかなものだった。先ほど脱兎のごとく離れた食事の席に、彼女はすぐさま入り、しかし静かに自分の席に着いた。

「んっ、もうだいじょうぶ？」

「当然だ！ 心配を掛けてしまったな。もう大丈夫であるぞ！」

「よかった。うん、けんこうにはきをつけてね？」

「それこそ心配無用というもの。健康に気を遣うのはいつものことである故な！」

自信満々に言った後、物部布都は箸をとる。そして目の前の食事に手を付けようとしたところで、ふと白が幸せそうに巻物を頬張っているところを見た。

「白殿。巻物が好物なのであるか？」

「んっ。げんかつぎ」

「ゲン担ぎ？」

そんな風水があっただろうか、と物部布都は考えてみるが、思いつかなかった。

「まるいもの、きれいだから」

幸せそうに巻物を食べる白を見ながら、物部布都は首を傾げるしかなかった。

## 風見幽香から見た『白』

『はく！ しろいから、はく！』

そんな自己紹介をした男の子は、もう近くには居ない。

癖のある緑色の髪をいじりながら、花々に水を与える。雫は太陽の光のもとに輝き、花に当たれば弾けて宙に消える。

水に与える雫は、まるで昔の思い出のようだ。出たかと思うと、弾けて、消えて、そしてまた現れる。楽しかったころの思い出は、どうにも頭の中に残り続ける。

『はくははく。くろはくろ。びやくはびやく』

鬨の力は『ひらく程度の能力』といていた。

なるほど、確かに規格外の能力だ。

「だけど、そうじゃないわ」

『びやく、くろ、どっちもともだち。はくといっしょ。でも、どっちもあばれんぼう。はくとちがう』

白と、鬨と、黒。

この三者は同一の体を保有する。しかし、各々の意識はまるで別人だ。事実、魂のレベルで根本的に違うのだろう、と風見幽香は考えている。

「ふふっ」

思わず笑みがこぼれた。

「あはははっ！」

たのしくて、たのしくて、仕方が無かった。

『『異変を予見する程度の能力』』

それが白の能力だと、ルーミアが言っていた。

「そう。間違っではないわ」

そして問題は、黒の能力だが。

これに関しては、まったく分からない。周りにいる誰もが知らなかった。

「黒の能力。ふふっ、あはは、アハハハハハ！」

おかしくて、おかしくて、堪らなかつた。  
腹を抱えて、心の底から笑った。

「なんて素晴らしいのかしら」  
ひとしきり笑って、目元の涙を拭って呟いた。

「白。本当に、なんて、恐ろしいのかしら」  
敬遠されるわけだ。恐れられるわけだ。知った者が拒絶するわけだ。

あの日、気づいた時の感触を思い出すと、夏場だというのに今も肌が粟立ってしまったている。

「でも、貴方に勝てないわけではないわ」

確かに、白の舞台に立てば風見幽香に勝ち目は、万に一つも有り得ない。いや、確率なんて、本当の意味でゼロである。

だが、要するに、彼をその舞台から引きずり下ろしてしまえば勝ち目が生まれると、風見幽香は計算していた。

「魔界か、月の都」

前者も後者も、ある人物の力が必要になってくる。いや、もしかすればその両方が必要になるかもしれない。知恵者の彼女は数百年経った今も尚、計画に穴を作らないために考える。

しかし、どう転んだとしても、勝利条件だけは変わらない。

「鬮。それに黒。白以外、本当に、邪魔ね」

風見幽香にとって、鬮と黒は害虫だった。あの二体さえ居なければ、すぐにでも決行出来たというのに、あの二体のせいで、計画に大幅な遅れが生じている。打つ手が、十手、二十手と、とことん変わってくる。

「私が、屈服させるわ」

——絶対的強者である白を。

——この手で、抵抗できないようにして。

——その心まで犯し尽す。

——白を、自分だけのものにする。

絶対的強者を屈服させる。なんと、甘美な響きだろうか。

考えただけで、彼女の体が疼き始める。はやく、はやく、と急かす

ように、時間を経れば経るほど衝動は強くなる。

「はあ」

艶めいた息が糸を引く様に吐き出された。その色めきときたら、見ればすぐさま思考が凍結し、甘い蜜に寄りつく虫の様に彼女のもとに歩き出してしまふほどだ。例えば身持ちと警戒心の強い男性相手だとしても、これを見れば自らまな板の上に躍り出るだろう。

「はあ——」

長い、長い、後に引くような吐息が漏れる。

花の水やりを終えた時には、シャツが汗にまみれて透けていた。肌にペタリとくっ付いたシャツからは肌色が浮かび上がっている。服は着崩れ、滑らかな鎖骨のラインが白日のもとに晒される。豊満な胸から締まった腰に至るまで、ボディラインを浮き上がらせるほどしっかりと貼り付いた白色。それが彼女の美しい肢体を強調しているからこそ、今の彼女は裸体であるときよりも艶めいて映る。

「はあ」

——今日も平和だわ。

彼女は暢気に空を見上げた。

今日も、憎たらしいほど青々とした空である。

快晴だ。

「私の心のようね」

それはない、とどこかの宵闇が呟いた気がしたが、そんなことは気にしない。

何せ、今日は快晴なのだから。

友の戯言を聞き流すくらいの寛容さは備えている。

まあ、それはさておき。

「水浴びをしましょう」

豪雨に見舞われたかの如く濡れていた彼女は、身体を清めるために川辺へ向かうのであった。

本日は快晴。

平和な一日なり。

## 第十九話 贈り物

食事が終わり、あとは寝るだけとなった頃合い。

物部布都は白を誘って庭を散歩していた。庭はよく整備されており、白い石を敷き詰めた地面のおかげか、力強い緑色を主張する松がよく映える。

「白殿」

頃合いか、と物部布都は白に声を掛ける。彼は目を輝かせながら彼女の方を見た。

「先ほど、丸い物が嫌いとのことであつたのだが……そのころは？」  
その質問は何となく、という非常に曖昧な気持ちから出て来たものだった。ただ、彼の好き嫌いが分かればいいな、程度のもの。

白は予想外の質問だったのか、目を見開いて、しかしすぐに笑顔になつて答えた。

「まるいみち。いくらあるいても、おわらないから。だから、キラい」  
「むっ、確かに……」

言われてみればその通りだ、と彼女は頷いた。  
「我も今、嫌いになつた！」

同調して、彼女は堂々と言つた。屈託のない純粹な発言に、彼はますます機嫌を良くして、鼻歌まじりに月を見た。

「あ、でもね。まるくても、つきはすき」

彼女も月を見上げた。月は綺麗だ。好き嫌いなど、言うまでもない。

「——白殿」

頃合いだろう、と彼女は懐から檜の小箱を取り出した。そして、それをこちらに向いた彼に差し出した。

「これ、なに？」

「そ、その。贈り物、というものなのだ」

「おくりもの？ くれるの？」

「当然、そのつもり——」

「ありがとう！」

彼女の言葉を途中で遮って、彼は贈り物に飛びつき、今まで以上に輝いた瞳で「開けていい?」と聞いてくる。彼女がこれに頷いて返すと、彼は櫛の小箱の蓋を開けて、中身を取り出した。

「あつ」

一瞬、ほんの一瞬だけだが、その笑顔が消えた。蝶を模ったデザインを見た瞬間だった。しかし、彼女が気づく前に彼はすぐに元の輝いた笑顔で彼女と中身の簪を交互に見た。

「……うん、だいじょーぶ」

彼は彼女の手をギュッと握った。彼女は急な出来事に顔を赤らめてしまう。そんなことに構わず、彼は言葉をつづけた。

「ふとは、ふと。だから、だいじょーぶ。これは、げんじつ。つぎのまえ、まえのつぎ、じゃない」

彼は伸びていた後ろ髪を纏めて、簪を挿す。銀色の髪は後ろでまつまり、漆と黒色の蝶が月光の下でよく映える。髪は光を反射し、簪は光を吸い込む。

「きつと、もう、だいじょーぶ。だから、もういくね」

背を向けて、出口に向かって彼は歩き始めた。

「行く、とは何処へ?」

「ともだちのところ。おそいから、きつとしんぱいしているから」

「また、会えるのであろうか?」

「うん」

彼は後ろ手を組んで、くるっと振り返って笑顔を浮かべた。

「またね、ふと!」

月の光に照らされた彼の笑顔は綺麗だった。屈託なく、白百合のように柔らかい。空に浮かぶ月のように儂く、魅力に溢れる。

彼女はその笑みに見惚れて、気づけば彼を見失っていた。周囲を見回しても居ない。それは彼の旅立ちを意味していた。

「う、ううむ……」

真っ赤になった顔を月から隠すようにその場で蹲り、彼女は悶々と唸った。その網膜には何度も、彼の月に照らされた笑みがフラッシュバックして、ますます顔の朱が増していく。



「変な輩を、引っ掛けねば良いのだが……」

苦し紛れに文句のようなことを言ってみても、彼女の熱を冷ますこととはない。本心ではないせいで、恥ずかしさからむしろ熱が増すばかりだ。

「う、うう」

朝日が光を差した頃。それまでずっと、彼女は庭先で蹲っているのであつた。

## 第二十話 飛鳥閉幕

全てはその通りに進んでいる。

我々傍観者からしてみれば、この世界の豊聡耳神子と物部布都はこの時代にて、尸解仙となるべく眠りにつく。それが正道である。

しかし、ふと足元に目を向けてみると、決定的な正道との乖離が見受けられる。誰もが分かる大きな違いだ。それはコインの表と裏の関係によく似ている。

世界には、概念として確かに存在する。それが表裏のどちらに身を潜めているのか、それだけの話なのだ。

正道では裏にある。

邪道では表にある。

表裏はどの世界においても存在する。

これら三つは前提条件である。

この世界では確かにコインが表に向いている。誰が見ても明らかなものだ。

故に、この世界は正道にあらず、邪道である。

Q. E. D.



八雲紫がすべてに気がついたとき、最初は自分の手に負えないと問題を放り投げていた。それ以上を考えれば自我が崩壊しそうだった。彼女の考えが正しければ、想定される相手は全能なる神のような力の持ち主であった。ティアマト、ゼウス、アマテラス、神話に登場する神々と比較しても、想定される相手の方が圧倒的に厄介だ。何せ、攻略方法が無い。

しかし、それから程なくして、一つの光が未来に差した。一つの想定外なことが彼女の前で発生した。現在と未来の合致により、たった一つの勝機が見出された。そして彼女の頭の中でパズルのピースは補完され、ついに勝利の方程式が完成した。

彼女が直接手を下すことはない。未来、現実より淘汰され幻想に生きるしかない妖怪にとつて、相手はあまりに相性が悪すぎる。何故なら、想定される相手は「存在を否定する程度の能力」に類するものを持っている。加えるならば、「回帰する程度の能力」も持ち合わせている。どれだけ肉体を消滅させようと、魂ごと消し飛ばそうと、相手はもとの完全な存在に「回帰」する。相手の魂の記録媒体はどうしようもないところにあるのだから、それも当然だ。

そんなどうしようもない相手に対しての勝機は、本当に目の前で降って湧いたようなものだ。相手が一枚岩でないことが幸いした。いや、分裂を起こしたからこそ救われた、というべきか。

——どちらにしても。

「白。行きましょう」

まずは目の前で落ち込んでいる彼を元気づけようと、八雲紫は声を掛ける。

なんて事はない。正道通り、豊聡耳神子と物部布都が、剣と皿を傍らに眠っているだけだ。彼女たちは死んだわけではない。ただ、少し長い眠りにについているだけである。

白からしてみれば、長い別れになるのかもしれないが、いずれ必ず会えるのだから、今は我慢してもらおう他にない。

「ねえ、ゆかり」

「なに？」

どこまでも子どもであるしかない白の言葉に耳を傾ける。

「これで、よかったのかな」

「この世界に、もしかしたら、何てものは無いのよ。あるのは、今目の前にある現実だけ」

「そう、だよね。うん。ありがとう」

八雲紫は誓う。ずっと頑張ってきた彼のために、諸悪の根源を断ち切る、と。

例えそれが、どのような結末にあったとしても。

八雲紫は、ひた走ることをやめはしない。

——これにて、飛鳥時代、閉幕。

## 第四章 終幕への布石 第二十一話 始まった

随分と格の高い狐ね、と蓬萊山輝夜は白狐の耳と尻尾を生やした男の子を見ていた。夢中で差し出した菓子を食べるその姿は底まで見えるほど透き通った水のように、様子を見ているこちらが和ませる力がある。

「それで、どういうご用件かしら」

「ん、なにが？」

「私の所にまで来た理由よ。年端もいかない男児が、見知らぬ女のもとに来るなんて、不用心が過ぎませんこと？」

見た目から妖獣や神獣の類であることは明らかなので、果たしてそんな一般常識が通じるのか不明に極まるが。彼女は見知らぬ男児に一般常識を説くことを試みた。

何より、彼女は「男たらし」という不名誉な称号を出身地より授かっている。美貌が過ぎたのだ。それに釣られてくる男は数知れず。だから、そういった手合いとの付き合いは飽きていたのもあって、芽は若いうちから摘み取ろう、という魂胆もあった。

「んー、それはどうでもいいけど」

いや、良くないから言っているのだけれど、と彼女は突っ込みそうになるところ寸前で言葉を呑み込む。「月きつてのプレイガール」と呼ばれた彼女は、こと男への気遣いを忘れた例がない。

「それでは、何のご用かしら。まさか、私のお菓子を食べにきたわけでもないでしょう」

「うーん、かおあわせ」

随分と面白みのない回答に、彼女の興味が一息に削がれる。舌足らずでまだ子どものようではあるが、どうにもませている節が強い。

「残念ながら、貴方のような方は五万と見たの」

「え、そんなに!？」

まだ二つ残っていた饅頭に手を付けることもやめて、彼は身を乗り

出して妙な食いつきをみせた。それも厭味ではなく、本心から驚いている様子に、彼女は瞬く間に毒気を溜息と共に外に排出した。

「言葉の綾よ。たくさん見た、つてこと。正確な数は百から数えていないわ」

「ひやく……うーん、そんなにいるの?」

「居たわね。男が百人以上」

「……………あつ!」

ぽん、と手を叩いて彼はひとり頷いた。ようやくか、と思いながらも、彼女も話す手合いとして新しいタイプの男ということもあり、話を切ることはしなかった。

「うん。そうだよね。だって、たくさんなんて、ありえない」

「何の事かしら?」

「えつとね。ほかはぜろ、つてこと」

要領を得ない話に、旗色が悪いと察した彼女はすぐさま話題を転換する。

「そう。ところで、お菓子は口に合ったかしら」

「うん。すごくおいしいよ!」

まるで太陽だ。月下美人、と謳われるのが彼女であれば、彼はそれの対称である。外から見れば物静か、中から見れば気配り上手の静の女であるのが蓬莱山輝夜という人物の一般像ではあるが。彼は外から見ても中から見ても、常に激しく天真爛漫だ。

人々を優しく照らすのが月であれば、人々を否応なく照り付けるのは太陽だ。その実はまさに、この二人の印象と合致する。

「それで、本題は顔合わせと言ったけれど、本当にそれだけなのかしら」

「うん」

隙の無い即答だ。この角度からは入り込めないと悟ると、別の切り口から攻める。

「どうして私と顔合わせをしようと思ったのか、お聞かせ願えますかと」

「えーりん」

一言だけだった。それでも、彼女は虚を突かれて時間が止まる。そして頭の中で整理がつくと、彼女の時が動き出す。

「そう。あなたが、永琳の話していた子ね。白、で合っているのかしら」

「うん。えーりん、なんていつてた？」

「とても強い子と聞いたわ。あと、無警戒な子、つてね」

「そっか。やっぱり、えーりんはそうだね。あいつ、すごくこまかいから」

「あいつ……永琳が聞いたら泣くわよ」

「ん？ あ、ちがうよ。えーりんのことじゃないよ、あいつは」

「そう。なら、誰なの？」

彼女に訊かれて、彼女は顎に手を当てて悩む。

「うーん……ひかりだよ」

「光？ あの刺激の強い？」

「うん。ほしのひかり」

「太陽のことかしら？」

「えーりんにきいたら、わかるよ」

「答えてはくれないのね」

「うん。あ、よりひー、とよひー、げんきにしてる？」

「あの二人ね。今頃、大忙しじゃないかしら。不死の薬の騒動のせい」

「よかった。みんなげんきで」

彼は心底安心した様子で息を吐いた。そして袖の中に手をいれると、そこから小さな花冠を取り出して、彼女に差し出した。

「はい、これ」

「秋桜。私にピッタリの花ね」

冗談めかして言いながら、彼女はてのひらの上で収まってしまう小さな花冠を頭の上にのせる。

「どうかしら」

花のティアラをのせたその姿は、さしづめ一国の王女というべきか。月の光は彼女を照らし、その淡い光は白い花吹雪を思い起こさせ

る。凜然とした姿勢で顔を綻ばせた彼女は、御伽噺から飛び出した精霊のように朧にして儂い。

「すつごくきれいな！」

「ふふ、ありがとう」

混じりけのない贅辞は実にくすぐつたい。クスクスと小さく笑いながら、ふと外が気になって月を見た。永琳に会った時の土産話が出来たとひとり満足して視線を戻すと、彼の姿は狐に化かされたかのように、忽然と消えていた。

「帰ったのかしら」

ただ一つ、彼の居た場所には白い紙が残されている。まっさらな紙を見てどうしようかと考えるが、とくに文を書く相手も居ないため、結局その紙は机の上に置き直して放置する。

「お迎えはいつくるのかしら」

彼女は月を見ながら、その口に弧を描いた。



「そういうことがあったのよ」

落ち着いた場所。月の民の追っ手から逃げ切った蓬萊山輝夜は手頃な石の上に座って、八意永琳に向けて白い狐の男の子との邂逅について語った。

「輝夜も白も、元気そうでよかったわ」

「ええ。下々の生活を満喫していた、なんてね」

言ったところで、ふと輝夜はあることを思い出した。

「そうだ。一つ聞きたいことがあったのよ」

「何かしら？」

「白が言っていた、あいつって誰かしら。白が言うには、星の光みたい



だけれど」

「普通に考えれば、太陽……すなわち、主神である天照大神のことだけだ」

「でも、太陽かって聞いたら、はぐらかされたわ」

「そうねえ。他の可能性は……」

星の光の何者かなど、本当に数が多い。それこそ、そうした神々や逸話を持つ英雄は現在に至るまでに、数多く生み出されてきた。

「わからない？ おかしいわね。白は、永琳だったらわかる、つて言っていたのだけれど」

「私なら？」

それは知恵者である永琳なら、ということなのか。それとも白をよく知る人物の一人だから、という意味なのか。

知恵者である、という意味なら、候補は山というほど浮かんでくる。この中から断定するなど、あまりに判断材料が少なすぎる。

ならば、白をよく知る人物のひとりとして、という意味の方が妥当だろう。十尾の狐であること、鬨という別人格が「ひらく程度の能力」を有していること。

「ああ、それと不思議だったのよ。どうして白が白い紙を最後に置いていったのか」

白い紙を置いていった。それは間違いなく、白からのメッセージだろう、と永琳はあたりをつけて考察を進めていく。

そんな中でふと、永琳は輝夜が手に持っている白い秋桜の花冠が目に入った。確か、話の中で白からプレゼントされた、と語っていた。

永琳はそれが、色という観点が偶然ではないことを悟った。そして大昔にも、色の名前を冠した存在、お茶会のとくにほんの少しだけ出てきた、「くろ」のことを思い出した。

白い秋桜の花冠と、白い紙。それは間違いなく白を指していると見て間違いない。色の観点から注目させたければ、この「くろ」という存在は考察から外すことはできない。

しかし、そうなると浮いてくるのは鬨の存在だ。鬨は「ひらく程度の能力」を持っていることは、彼の親しい知人しか知らない。白をよ

く知る人物だからこそわかる、の前提に従うのであれば、關の存在を外すことはできないが、色の観点には一致しない。

「……いえ」

読み方だ、と永琳は気がついた。關とは「びやく」と読み、これを他の漢字に変換するとき、「白」とすることも出来る。

ならば、星の光の「あいつ」という謎の人物を知る上で考えなければならぬのは、白、關、黒の存在。

「永琳、どうかしたの？」

「いえ。ちよつとね。星の光、について考えていたのよ。それと、白と、その別人格の關、そしてその友達の黒、について」

「混沌としているわね」

「混沌？」

「ええ。個々人の区別がはつきりついているのに、モノクロに国生みの漢字に星の光なんて、如何にも繋がりがあさう。明確なのに曖昧なのよ。羅列されたものが」

確かに混沌としている。

「……混沌」

ふと、頭の中に入っていた単語の意味に引つ掛かりを覚える。確かに「天地創造の神話で、天と地がまだ分かれず、まじり合っている状態」だったか。

妙である。確かに、繋がりを覚えざるを得ない。

「——そうだわ。混沌。反対は秩序。そして神話は、宇宙」

「この国で言えば、天地開關だったかしら」

「ええ。でも、それだけではない。輝夜、さつきモノクロといったわね？」

「確かに言ったわね。それがどうしたの？」

「白と黒はすなわち、無彩色。等色相面、同一の色相を切り出したものでは、無彩色は通常、上下に走る一辺……つまり二次元、線のこと」「線が区別するためのもの、とでも言いたいの？」

「違うわ。そうじゃないの。二次元の線とは、長い目でみれば、つまり世界の歴史を外から見たとき、それは過去であり、現在であり、未来

となる」

「概念的な話ね」

「ええ。まさしくその通りよ。過去、現在、未来の話として、歴史として考えてみれば。闢はつまり、未来を切り拓くこと。黒は、その道の色づけて歴史と文明を生み出すこと」

「それなら、白は？」

「……輝夜、白は最後に、白い紙を置いていったのよね」

「そうね」

「それはつまり、過去、現在、未来の話にこじつけるならば、白紙に戻す……つまり、やり直しということになる」

「白紙に戻す？ 過去に戻るってこと？」

「いえ。そんな生易しいものではないわ。白紙に戻すということは、世界そのものを無かったことにすること。ある事象を、そっくりそのまま消してしまうこと」

「……けれど、過去に戻ることには変わらないのでしょうか？」

「そうね。結果としては同じ。でも、ここで重要なことは、もしも白が『白紙に戻す程度』の能力を有している場合、彼はあるモノに干渉しなければならぬ」

輝夜は永琳の顔を見て、汗が滲んでいることに気がついた。

「待って。どうして、白がその能力を持つことが前提なのよ。飛躍しすぎよ」

「いえ、飛躍していないわ。何故なら、星の光の正体は——」

輝夜は永琳から答えを聞いて、目をいっぱいに見開いて驚いた。

「でも、それは生物じゃないのよ」

「これは必然よ。白、闢、黒の三者は揃ったとき、『世界を運行する程度の能力』を有すると同義。これも別に、生き物というわけではなく、その世界が作り上げていくもの。それなのに、その営みの能力を持った存在が居る。これは、非生物に自我が宿ったことの証左よ」

「だとしても、闢以外の能力は想像なのでしょう？ 根拠にするには、まだ弱いわ」

「……決定的な必然があるのよ」

永琳は空を見上げて月を見た。

「必然？」

「ええ。白は、私の言ったとおりの子だった。そうよね？」  
「そうね」

「なら、白はどうして、私と会った時から今までずっと、精神的に子どもなのか、ってことよ」

「……話が見えたわ」

「採点しましょうか」

「つまり、記憶障害の一つの事例のようなものね。ショック映像を見て記憶喪失になるやつ。時に二重人格になるけれど……彼はそれが、精神にまで来て三人に分裂した、と」

「95点ね。厳密に言うなら、解離性同一性障害。まともな精神をしていれば、『白紙に戻す程度の能力』なんて、使い続けられるわけがない。この能力は、生命全てを無に還す……虐殺に等しい。それが本人たちの自覚なく行われる。白の幼さの原因は、能力の都合ってやつね」

はあ、とため息を一つ。

そんな永琳の姿を見て、輝夜はいたずらを思いついた子どものように笑って聞く。

「さて。永琳はこのあとどうするのかしら？」

「あら、まだ目的も相手の事情も話していないのに」

「愉快犯でしょう？ だから、ワクチンが用意された」

「そう。世界の修正力。怠慢故の剥離。そして生まれた三人の勇者。まるでゲームだけれど、実行犯もゲーム感覚でしょうね」

やれやれ、と両手を広げてみせる永琳と、それを見て微笑む輝夜。

「なら、そのゲームに参加しましょう」

「ええ。幸い、私たちには参加するためのチケットが配られている」

永琳はどこからともなく、昔に白より渡された白い秋桜の花冠を出した。花は枯れることなく、今も強く、その白を強調する。

「これから忙しくなるわね」

「それよりも。休憩は終わりよ。まずは追っ手から完全に逃げ切りま

しよう」

「そうね。永琳、頼りにしているわ」

白い秋桜の花言葉は「優美」「美麗」「純潔」。

二人のゲームはようやく、始まりの時を迎えた。

## 第二十二話 大江山的一幕

大江山。鬼が拠点とする山の中には鬼の住む屋敷があり、その中で今、蛇と狐が邂逅していた。

「それで、白。酒呑のヤツを見て、どうだ？ 婿にならないか？」

真剣な様子で、人ほどの大きさの蛇が白に向けて提案を投げかける。これに白は少し唸ったあと、お猪口に入った水を一口飲んで言う。

「まだわかんない」

「そうか。わからないか！」

その答えに蛇は満足して大声を上げると、置いていた盃の中身を一気に飲み干して、酒気の強い息を吐き出した。

「まあ、追々でいいのだ。我々の生は長い。それに、白には大任を背負わせている。忠告するとすれば、取り返しのつかないことはするな、としか言えぬ」

苦い顔をする白を蛇は見えていなかった。自分の考えにすぐに没頭して、喉を鳴らしている。それに合わせて、ちろちろと細い舌が見え隠れする。

「しかし、白が何をしようとも、我々は気づかないのだろう。どこかの聖書に出てくるヤツならば、あるいは知り得るのだろうが。それは、我々の管轄の話ではない」

ヌルツとその身を柔軟に翻らせて帰るのかと思えば、蛇は振り返って言った。

「白。決意はしていないのだろう。まだ枝葉は分かれるのだろう。それでも尚、言葉を紡がせてもらう」

蛇は一つ息を吸うと、言葉を投げかけた。

「欠けても世界は何事もなく成立するだろう」

白の体が跳ねる。

「だが、我々は納得しないのだ」

白は蛇を見て首をかしげた。しかし、蛇はそれ以上何も言うことな

く、部屋の外に行ってしまった。

白は蛇が出て行った後も、蛇の言葉の真意を考えた。頭を捻り、時に立ち上がって歩き回り、時に座禅を組んで心を落ち着かせて。

「ハク〜！」

がばつ、と後ろから何者かが飛びついてきた。驚いて白が振り返ると、そこには立派な二本角を生やした女の子が居た。彼女は白の背中に引っ付いたまま、瓢箪を傾けてその中身を飲んでる。

「ハクう。なーに、ひとりで考えているのさ」

水臭いぞ〜、と彼女は左の拳を白の頬にグリグリと押し付ける。頬を弄られた白は「うー」と唸りながら、恨みがましく彼女に視線を向けた。

「そんなに怒るなつてえ。ほら、頼れる鬼さんに話してみなつて」

「えー。すいか、たよりない」

「まったたく、無駄に正直だねえ。嫌いじゃないけど。それで、何があつたのさ？」

「……やまちーにいわれたこと、かんがえてた」

「オヤジが？ ははあ、なるほどね。で、なんて？」

白は蛇、八岐大蛇に言われたことを復唱する。すると彼女、伊吹萃香は「なんだい、そんなことか」と軽口を叩く。白が怪訝そうに萃香を見ると、彼女はさも当然のように言う。

「私が今死んだつて、世界が壊れることなんてありやしない。でも、仲間たちは惜しんでくれるだろうね。オヤジはキレて暴れまわるかもしれないね」

単純な話さ、と萃香は瓢箪の中身を流し込む。白がまだ渋面を作っているのを認知すると、彼女はため息を吐いて言う。

「白が死ねば、私も少しは悲しいし、惜しむ心も出てくる。オヤジあたりは泣くかもねえ。つまり、白に関わってきた奴等全員、居なくなれば悲しむし、なかなか割り切れることも難しい。心のつつかえになるのさ。白も、私が死んだら悲しいだろ？」

白が頷くと、萃香は「それと一緒さ」と言つて、白の背中から離れた。

「何を抱えてんのか知らないけど、オヤジが言ったことを噛み砕いて言ってる。

白、お前が死んでも、消えても、世界は壊れない。でも、残された私たちは悲しいし、辛いんだよ。だから、短気起こして自暴自棄になつて、無駄に死ぬなんてことするんじゃないよ」

言い切ると、萃香は八岐大蛇と同じように部屋から出て行つた。残された白は「そっか」と小さく呟いて、宙を見つめて考え事に耽るのであつた。



## 第二十三話 黒白金 1 / 2

仲間が殺生石になる光景を、白は見たことがあった。仲間が人間に、殺生石にされてしまった。白はその殺生石になった仲間を何とか助けようと躍起になったが、彼自身の力では、術ではどうしてやることもできなかつた。

完璧とは言えないが、白は未来を知っている。その仲間が後に救い出されて、救い出してくれた人物の式になるところまでは確定した未来だ。

ならば放っておくのが一番かと言われれば、それは白の気持ちとして選択できない。自分のあずかり知らぬところならいざ知らず、既知の上で見捨てるということ、彼には選択することができない。

「下がれ、人間」

だから、彼は仲間のもとに現れた。鎧と弓を携えた者たちを後ろに、多数の陰陽師を前方に隊を組んでいる人間たちに告げながら。

白黒の尻尾を揺らして、彼は追い立てられていた仲間の前に立つ。

「黒狐!？」

人間たちの驚きは並大抵のものではなかつた。何故なら、黒狐は平和の象徴と考えられているからだ。それは『続日本紀』和銅5年（712年）の記事に見られるものであり、「王者の政治が世の中をよく治めて平和な時に現れる」と記されていたらしい。

つまり、黒い狐は非常に縁起の良い存在だ。攻撃などしたら、どんな罰が下るかわかつたものではない。何より、これに歯向かうことは政治的な理由から出来るはずがない。

「いや、白い尾もあるー」

白い尾ということは、即ち白狐。稲荷明神の眷属であり、代表的な善良な狐である。神の眷属に粗相をするなど、この時代では有り得ない。故に、人間たちは彼に逆らうことがますます出来ない。

「私は黒であり、白であり、ひらく者でもある」

幼い人の姿で彼は語りかける。人間はただ、固唾を飲んで見守るほ

かにない。彼の後ろに居る彼女は、目を見開いて呆然自失する。

「此度は私の仲間が大変な粗相をしてしまったようだ」

「仲間？ その、九尾と？」

「然り。理由は他でもない、世の中を上手く治めているかどうか、見定めるために派遣したのだ」

衝撃の言葉に、人間は目を見開いて硬直する。しかしすぐに、ひとりの陰陽師が慌てて口を開いた。

「し、しかし。我々も、簡単には引き下がれぬのです。御方が病にお伏せになられている故に。そして、その原因がその九尾であるが故に」

「確かに、私の仲間は出過ぎた真似をした。愛に飢えていたのだろう。この娘は術にも長けていてな。おそらく、それは人を妖怪に変えてしまふ呪いだろう。その呪いを解かせよう。それで事を収めることは出来ないか？」

陰陽師のひとりが考える。手打ちの条件として、そしてどうすれば上方の怒りが収まるかを。

「……では、それに加えてもう一つ。貴方が現れた証拠を戴きたい」「いいだろう。ならば、脇差を一本、貸してほしい」

陰陽師は手近な弓兵から脇差をひったくり、それを彼に渡した。彼はそれを受け取ると、鞘から刃を抜き取り、自身の頭に生えた左耳の先を掴む。

そして、一閃。

生暖かい液体が彼の仲間の顔に降りかかる。その光景を見て、彼女は体を大きく跳ねさせ、震えさせる。しかし、そんな彼女の様子を意に介する様子もなく、彼は自身の左耳を陰陽師に差し出した。

「脇差と、私の左耳だ。受け取れ」

痛みに顔を歪めることもなく、彼は鞘に納めた脇差と左耳を陰陽師に押し付けると、振り返って彼女に言う。

「術を解け。話はそれからだ」

「——どうして、お前が」

「話は後だ。いまは、術を解け」

彼女は言われるままに掛けていた術を解いた。それを目ざとく感じ取った陰陽師の一人は腰を折った。

「感謝する」

「ならば、早く都に帰還せよ」

それから間もなく、人間の部隊は都に帰還した。彼はそれを見送ったあと、彼女と向き合って、手を差し伸べた。

「まずは、少し遠くに行こう。話はそれからだ。白もそう言っている」「あ、ああ……そう、か」

彼女は彼の手をとって立ち上がる。彼は彼女の手を引いて、ただその場から離れるために歩みを進めるのであった。

## 第二十四話 最初で最後の悲鳴

九尾の狐の彼女を助けるために、幾つかのハツタリと証拠となる黒自身の左耳を差し出した。

ハツタリとは九尾の彼女が人の世を見定めるために派遣された、という点だ。真偽のほどは当然人間たちには分からないが、黒狐が「王者の政治が世の中をよく治めて平和な時に現れる」という記述にもあるとおり、非常に縁起の良い存在である。だからこそ、人間は黒狐の言葉を疑うわけにはいかない。この黒狐を疑うということは即ち、王者の政治を疑うことと同義である。九尾の彼女が派遣された理由が人の世を見定めるためともなれば、尚の事、政治的な意味合いが強くなる。これを攻撃するなどもつての外だ。それは今を治める王への反逆、ないし批判とも取られかねない。その上、神の遣いとされる白狐のような白い尻尾も生えているとなれば、そんな選択を出来るわけがない。

しかし、その言葉を鵜呑みにして都へと帰還することは人間たちにとっても都合が悪い。せめて黒狐の現れた証拠がなければ、九尾の狐を退治するように言われた彼らは討伐失敗の叱責を逃れられない。

そんな人間側の都合に最低限の折り合いをつけるために、黒は左耳を証拠として渡した。尻尾の毛数本では証拠としては弱い。しかし、体の一部分であるならば、例え王であってもこれを責めることは出来ない。自らが治めているこの時代を、自身で否定するわけにはいかないのだ。確たる証拠がある以上、納得がいかないにしても、溜飲を下げる他に道はない。

交渉事は初めから、平和的解決の出来るように考えられていたのである。

「そう、か。そうだったのか」

自分を助け出すプランを黒から聞いた九尾の彼女は脱力してため息をついた。

「どうして、私のことがわかった？」

しかし、彼がどうして自分を都合よく助けに来たのか、その偶然と  
いうにはあまりに出来すぎた現実を理解することは出来なかった。  
そんな都合の良い事など、現実には有り得ないのだ。何せ、情報がな  
い。

「それについては、白から聞くといいだろう。私はただ、黒狐という姿  
を貸したに過ぎないのだから」

しかし、黒は質問に答えることなく、眠るように目を閉じた。

再び目を開いた時、そこには空のように明るい瞳が彼女を見つめ  
た。焦点は合っている。寝惚けている様子はどこにもない。

「ひさしぶり、たまも」

そして屈託のない笑顔が、九尾の彼女こと玉藻の前の瞳に焼き付い  
た。過ぎ去った時間を思い起こさせる白い太陽に、彼女の頬は自然と  
緩んでいく。

「ああ、久しぶりだな。それで、どうして此処に？」

「そういう ちから だから」

白はそう言うのと西を見た。そこには黄昏を彩る日が、今まさに落ち  
ようとしているところ。

「……白、やはりか」

彼女もまた白と同じく黄昏色を見ながら言う。

「私は偶然などというものは信じない。だから、ようやくわかったよ。  
高天原に居た時から、不思議に思っていたことが」

白の横顔に語りかけるように、彼女は言う。

「都合がいい、都合がいい、とはずっと思っていた。龍神、八岐大蛇、  
どちらの襲来であろうとも、お前はつつがなく対応してみせた。仲間  
を一人も失わずに。確か、『異変を予見する程度の能力』だったか」

「まえに そう いったね」

「違うだろう？ お前の本当の力は、さらに上位である筈だ。確か、大  
陸の方だったか。この国にある陰陽師などとは違う力を行使するそ  
うだ。そこでひとつ。聞いた話によると、至った者は全てを知り得る  
らしいな」

彼女は一息吸い込むと、白に向き直って言う。

「お前は至ったのだな。いや、お前自身がそうらしい」

「……うん。やつぱり、ここはちよつと、ちがうね」

変わらず、いや、今まで以上に輝いた笑顔を浮かべていた。しかし、輝いているというのに、その姿は押せば崩れてしまいそうなほど弱々しい。

「だから、おねがい」

白は彼女の手を取って、真摯な瞳で彼女を見上げた。

「あのこと、いっしょに、たすけて」

瞳に涙を溜めて、ついにはそれをボロボロと零しながら、白は彼女に言った。涙には悔しさが滲んでいる。顔には悲愴が浮かんでいる。それでも、瞳だけは希望を見据えて、彼は今を生きている。

「まだみてない 21せいきに たどりついて」

「その頼み、確かに聞き届けたよ」

白の尻尾から光の粒が天に昇る。よく見てみれば、白の体全体から天に昇り、徐々に、徐々にその体を薄くしていつている。

「強制送還か」

「だいじょうぶ。みんな、ばれてないから。ぜんぶ、おねがいね」

「任されたよ。全てが終わったら、また一緒に遊ぼう」

「うん」

白は全身を光の粒に変えて消え去った。後に残したのはお願いと、母親に抱かれた赤子のような笑顔。

「裏切るわけにはいかないな」

失敗は許されない。覚悟を決めた彼女は、オレンジ色を背にした。そしていざ立ち去ろうとしたとき、その目の前に空間の裂け目が現れた。

「こんばんは」

どこまでも胡散臭い妖怪が空間の裂け目から挨拶をひとつ。

「はあ」

それに対して、彼女は思わずため息を吐いた。

——雰囲気も後味も台無しだ、と。